

賠償ス

第二十條 徵發物件ヲ差出場所ニ輸送スルハ徵發區ノ義務トシ其輸送賃ヲ支辨セ  
ス

第三十一條 賠償ハ平時ト戰時トヲ論セス其時々之ヲ支辨スルモノトス但戰時若  
クハ事變ニ際シ紛擾ノ爲メ延滞シテ三ヶ月ヲ越ユルキハ年六分ノ割ヲ以テ其利  
子ヲ付ス

第三十二條 賠償ハ徵發區毎ニ一括シテ府知事縣令郡區長戶長停車場長船舶會社  
ノ店長ヨリ之ヲ請求スヘシ

第三十三條 徵發物件ノ其使用ノ爲メニ毀損シタルモノハ賠償ス其金額ニ就キ供  
給者ト熟議調和セサルトキハ評價委員ノ評定ニ任ス  
其毀損ハ持主若クハ操業者ヨリ速ニ其地ニ在ル陸海軍官憲若クハ戶長ニ届出可  
シ其届出ハ徵用濟引渡ノ後左ノ期限ヲ越ユヘカラス若シ其期限ヲ越ヘ又ハ期限  
中持主若クハ操業者ニ於テ使用セシトキハ無効トス

一 西洋形船舶

七日間

二 地所

評價委員ノ告示スル時日間

三 其他ノ物件

一日間

第三十四條 第十二條第一項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ其地市場ノ前三ヶ年間ノ平  
均價ヲ取り之ヲ定ム其平均價ノ取り難キモノハ評價委員ノ評定ニ任ス

第三十五條 第十二條第二項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ其郡區平常ノ賃價トス但物  
件ト操業者トヲ各個ニ各別シテ徵用シタルトキハ其郡區平常ノ雇賃及ヒ借賃ニ  
准シテ賠償ス

第三十六條 第十二條第二項ノ徵發ニ係ルモノヲ宿泊セシメ連日使用スルトキ及  
ヒ六里以外ノ地ニ於テ使用スルトキハ第三十二條ノ例ニ拘ハラズ賃價ノ半額ヲ  
前給シ宿泊食飼ヲ官給ス但此場合ニ於テハ賃價ノ四分ノ一ヲ減ス

第三十七條 第十二條第二項及ヒ第六項ニ掲クルモノヲ買上クルトキハ勿論其他  
使用ノ都合ニ依リ價格ノ豫定ヲ要スルトキハ其金額ヲ定メ置クヘシ其金額ニ就

チ

キ供給者ト熟議調和セサルトキハ評價委員ノ評定ニ任ス

第三十八條 第十二條第三項ノ徵發ニ係ルモノハ第三十五條ニ准シテ賠償シ第三十六條ヲ適用ス

第三十九條 第十二條第四項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ陸海軍省ニ於テ之ヲ定ム

第四十條 第十二條第五項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ其地平常ノ代價トス

第四十一條 第十二條第六項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ別ニ命令書アルモノ、外左ノ區別ニ從フ

一 出船ノ定時アリテ定路ヲ航スルモノハ平常ノ定賃

二 定路ヲ航スルモ特ニ出船時日ヲ命シタルトキハ其乘載量五分ノ三ニ滿チタル以上ハ前項ノ例ニ准ス若シ之ニ滿タサルモ五分ノ三ニ値ル平常ノ定賃

三 出船及ヒ航路ノ定メナクシテ定賃ナキモノ又ハ運送ヲ以テ營業トセサルモノ等其賠償金額ニ就キ供給者ト熟議調和セサルトキハ評價委員ノ評定額

第四十二條 第二十四條ノ場合ニ於ケル賠償金額ハ操業者平常ノ給料航泊實費及

ヒ船舶ノ損料トス其損料ハ一ヶ月ニ各船舶買入代價六十四分ノ一トス

第四十三條 第二十六條ノ場合ニ於ケル賠償金額ハ操業者ニハ平常ノ給料船舶ニ

ハ第四十二條ノ損料トス但船橋及艇船ニ充テタルモノ、賠償金額ハ第四十一條第三項ニ准ス

第四十四條 第十二條第七項ノ徵發ニ係ル賠償金額ハ別ニ命令書アルモノ、外平常ノ定賃トス

第四十五條 第二十七條ノ場合ニ於ケル賠償金額ハ操業者ニハ平常ノ給料物件ニハ其地平常ノ代價若クハ損料トス其金額ニ就キ供給者ト熟議調和セサルトキハ評價委員ノ評定ニ任ス

第四十六條 第十二條第八項ノ徵發ニ係ルモノハ其植物ニ損害ヲ加ヘ又ハ地形ヲ變更シタルトキニ限り賠償ス其金額ハ評價委員ノ評定ニ任ス

第四十七條 第十二條第九項ノ徵發ニ係ルモノハ其地平常ノ代價若クハ相當ノ損料ヲ賠償ス

チ

第四十八條 第十三條第一項第二項及ヒ第四項ノ徵發ニ係ルモノハ其地平常ノ代價若クハ損料ヲ賠償ス其金額ニ就キ供給者ト熟議調和セサルトキハ評價委員ノ評定ニ任ス

第四十九條 第十三條第二項ノ徵發ニ係ルモノハ第三十五條ニ准シテ賠償シ第三十六條ヲ適用ス

第五十條 第十三條第五項ノ徵發ニ係ルモノハ通常患者ノ例ニ從フテ賠償ス全ク明渡サシムルトキハ第三十九條ノ例ニ准ス

第五十一條 徵發ヲ拒ミ或ハ規避シ或ハ漫リニ使役ヲ離レタルモノ及ヒ之ヲ教唆誘導シタルモノハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第五十二條 徵發ノ命令ヲ受ケタル府知事縣令郡區長戶長停車場長船舶會社ノ店長其處置ヲ爲サ、ルモノハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ貳拾圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス其懈怠ニ出ツルモノハ貳拾圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第五十三條 徵發書ヲ出スノ權ヲ有スル官憲妄ニ徵發書ヲ出シ又ハ其權ヲ有セサル官憲徵發書ヲ出シタルトキハ一年以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

○朝鮮國ニ於テ行步規程ヲ犯シタル者處罰方

○明治十六年四月五日第拾壹號布告

朝鮮國ニ於テ行步規程ヲ犯シタル者ハ貳圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス  
右奉 勅旨布告候事

○徵發令ニ依リ負擔スヘキ費用ノ怠納者處分方并右費用ニ關スル處分不服ノ者出訴方

○明治十六年八月八日第二拾壹號布告

徵發令ニ依リ負擔ス可キ費用ノ怠納者ハ明治十年<sup>十一月</sup>第七十九號布告ニ依リ處分  
スヘシ但財産公賣ノ際買受望人ナキトキハ徵發區ニ沒入シ不足金アルトキハ其區  
ノ損失ニ歸ス

右費用ニ關スル處分ニ就キ不服アル者ハ明治十五年<sup>五月</sup>第二十二號布告ニ依ル可シ  
右奉 勅旨布告候事

○朝鮮國ニ於テ日本人民貿易ノ規則并朝鮮國海關稅目

○明治十六年十月十五日第三十四號布告

今般朝鮮國ト別紙ノ通日本人民貿易規則并海關稅目ヲ協議決定ス  
右奉 勅旨布告候事

別紙

朝鮮國ニ於テ日本人民貿易ノ規則

朝鮮國ニ於テ日本人民貿易ノ規則

第一款

日本諸商船朝鮮國ノ通商港ニ入津スルトキハ即時ニ海關ヨリ官吏ヲ派遣シ艙口ヲ  
封鎖シ且其外荷物アル場所ハ相當ノ取締ヲ爲スヘシ商船ニテハ其官吏ヲ丁寧ニ取  
扱ヒ且之ニ適宜ノ房室ヲ給スヘシ若シ之ニ給スヘキ房室ナキトキハ右官吏ハ海關  
ノ番船上若クハ陸上ニ在ルモ其便宜ニ任スヘシ尤其諸費ハ總テ海關ノ支拂タルヘ  
シ船主若クハ代理人等ニ向テ私ニ毫釐ヲモ受クヘカラス但日本形風帆船荷物取締  
方ニ付テハ海關長日本領事官ト協議シ適宜ノ方法ヲ設施スヘシ

第二款

日本商船朝鮮國ノ通商港ニ入津シタルトキハ其船長或ハ代理人ヨリ其船書即船免

チ

狀荷物送物ヲ日本領事館ニ指出シ其預リ證書ヲ受取り而シテ入港手數トシテ其投  
 錨時點ヨリ四十八時以內但日曜日及ヒ其他ノ休日ヲ除ク以ニ右預リ證書入港届書  
下諸款内時間ニ係ル者ハ皆ナ同シ  
 積荷目録其他船用品及ヒ自餘ノ免税品商品ニアラノ目録ヲ海關ヘ差出スヘシ若シ  
 右時限内ニ入港手數ヲ爲サ、レハ其船長ニ銅錢三萬文ノ罰金ヲ課シ尙ホ怠テ手數  
 ヲ爲サ、レハ其時限ヨリ二十四時ヲ經過スル毎ニ更ニ同額ノ罰金ヲ課スヘシ但其  
 總額八十萬文ノ外ニ踰ルヲ得ス

本款入港届書ニハ船名噸數或ハ石數船長ノ姓名乗組水夫人員船客ノ姓名員數仕出港  
 名發航ノ年月日及ヒ入港ノ年月日時ヲ詳記シ船長或ハ其代理人之ニ記名調印ス  
 ヘシ又積荷目録ニハ積荷物ノ記號番號箇數品名及ヒ荷主ノ姓名ヲ詳記シ其正確  
 ナル旨ヲ保證シ船長或ハ其代理人之ニ記名調印スヘシ又船用品及ヒ自餘ノ免税  
 品目録ニモ船長或ハ其代理人記名調印スヘシ但諸届書及ヒ其他ノ書類共何レモ  
 日本國文ヲ用ヒ譯文ヲ副ルコトナシ

第三款

積荷目録ノ遺漏若クハ錯誤ハ入港手數ヲ畢リテヨリ二十四時以內ナレハ之ヲ書入  
 レ或ハ書改ムルコトヲ得若シ此時限ヲ過ルトキハ手數料七千文ヲ納ムルニアラサ  
 レハ之ヲ書入レ又書改ムルヲ得ス又右ノ時限ヲ過キ誤脱アルヲ知ラスシテ陸揚ス  
 ル者ハ其物品ニ課スヘキ税ノ二倍ヲ徵ス

第四款

入港手數ヲ畢レハ即時ニ海關長ヨリ開船免狀ヲ付與スヘシ船長或ハ代理人ハ此免  
 狀ヲ本船ヲ監守スル海關官吏ニ示シテ艙口其他ノ開封ヲ乞フヘシ若シ擅ニ其封鎖  
 ヲ破開スルコトアレハ何人ノ所爲タルヲ問ハス其船長ニ三萬文ノ罰金ヲ課スヘシ

第五款

輸入荷物ヲ陸揚シ或ハ輸出荷物ヲ船積セント欲スル者ハ先ツ陸揚願書又ハ船積願  
 書ニ仕入書ヲ添ヘ仕入書ナル者ハ荷物仕入ノ年月日及ヒ地名并ニ其賃價及ヒ包裝  
 費口錢保險料運賃其他ノ諸雜費ヲ詳記シ其買主或ハ所有主又ハ  
 船積セシ者或ハ代理人  
 ノ記名調印セシ者ヲ云海關ニ指出スヘシ然ルトキハ海關官吏ハ速カニ陸揚免狀或  
 ハ船積免狀ヲ交付スヘシ荷物ヲ船卸シ又ハ船積スルニハ先ツ此免狀ヲ本船ヲ監守

チ

スル所ノ海關官吏ニ示スヲ要ス又荷物ヲ船移スル者モ右ニ准シテ海關ノ免許ヲ受クヘシ

陸揚願書又ハ船積願書ニハ其輸入船又ハ輸出船ノ名及ヒ其荷物ノ記號番號品種等ヲ詳記シ且海關ノ收稅ヲ害スヘキ物品ヲ隱匿スルコトナキ旨ヲモ保證シ願人或ハ其代理人記名調印スルヲ要ス

第六款

日没ヨリ日出マテハ海關ノ特許ヲ受クルニ非サレハ荷物ノ陸揚船積又ハ船移スルヲ得ス且海關官吏ハ日没ヨリ日出マテノ間艙口ヲ封鎖シ其他荷物ノ在ル處ニハ相當ノ取締ヲ爲シ置クヘシ若シ該官吏ノ許可ナクシテ其封鎖ヲ開キ或ハ取締ヲ破ル者アレハ其船長ニ三万文ノ罰金ヲ課スヘシ

第七款

若シ海關ノ免狀ヲ得スシテ荷物ヲ陸揚船積若クハ船移スルモノ或ハ海關ノ免許ナクシテ兩國議定ノ埠頭外ヨリ荷物ヲ陸揚シ若クハ積出ス者アラハ並ニ本品ヲ沒收

スヘシ

第八款

日本人民ハ通商各港ニ於テ荷物ヲ運搬シ或ハ船客ヲ送迎スル爲メ相對ノ約束ニテ朝鮮ノ舟車人夫等ヲ雇入ルコトヲ得ヘシ朝鮮官吏ニ於テハ決シテ之ニ干涉セス又何舟何人ト制限ヲ立ルカ如キコトアルヘカラス但日本商民若シ其雇方ニ差支ヘ海關ニ願出ルトキハ海關ニ於テ相當ノ周旋ヲナスヘシ

第九款

輸出入品トモ其通關ノ時本書附錄ノ稅則ニ從ヒ海關稅ヲ納ムヘシ又船中自用品ト雖トモ之ヲ陸揚シテ賣拂フトキハ稅則ニ照シテ納稅スヘシ但從價稅ヲ徵收スルトキハ荷物ノ産出地若クハ製造地ニ於テノ實價ニ該地ヨリ其荷物ヲ陸揚スル港マテノ運送費保險料及口錢等ノ諸費ヲ合算シ之ヲ原價トナシ其定則ノ稅ヲ賦課スヘシ

第十款

稅金ノ過納或ハ不足納ノコトアリトモ納稅ノ日ヨリ二十日ヲ過キカル間ハ海關ヨ

テ

リハ其不足ヲ追収シ又納人ヨリハ其過納ノ返還ヲ請求スルコトヲ得ヘシ但荷物入量ノ不足又ハ損傷ヲ發見シタルカ爲メ過納税ノ返還ヲ乞フ者アリトモ荷物通關後ハ之ヲ許サス

第十一款

海關官吏ハ輸出入荷物ノ全部又ハ一部ヲ荷物改所ニテ検査スヘシ其搬運ノ費用ハ荷主ノ自辨タリ如シ荷物ヲ荷物改所ノ外ニ持往キ検査スルトキハ其費用ハ海關ノ支辨タルヘシ又海關官吏ハ物品ノ損壞セサル様細心ニ之ヲ取扱ヒ検査ヲ畢ラハ其荷物ヲ成ルヘキ丈ケ替ノ如クニ包装スヘシ且検査ノ爲メ徒ニ時間ヲ費スコト莫ルヘシ若シ検査ノ時不注意ニ因リ損毀ヲ致スコトアラハ海關之ヲ賠償スヘシ

第十二款

海關長若シ輸出入人ノ申立テタル價格ヲ不充分ナリト思フトキハ海關鑒定役ノ鑒定價格ニ從テ納税セシムヘシ若シ輸出入人其鑒定ニ服セサルトキハ二十四時内ニ其次第ヲ海關長ニ申出ツヘシ然ルトキハ海關長ハ輸出入人ヲシテ自ラ評價人ヲ選

定シ其評估ニ從テ再度申立テ爲サシムヘシ海關長ハ其再度申立テタル評定價格ニ從テ税ヲ課スルモ又ハ評定價格ニ其百分ノ五ヲ加ヘ本品ヲ買上ルモ自由トス但之ヲ買上ルニ於テハ再度申立ノ日ヨリ五日以内ニ其代價ヲ拂濟スヘシ

第十三款

輸入貨物ノ途中ニテ損傷シタルモノアレハ輸入人ハ其趣ヲ海關ニ届出テ二人以上ノ正實ナル鑒定人ヲ擇ヒテ其損高ヲ鑒定セシメ各包ノ記號番號ト其損高ヲ記載シタル證書ヲ認メ鑒定人ヲシテ之ニ調印セシメ之ヲ陸揚願書ニ添テ海關ニ差出シ減税ヲ請フヘシ但此場合ト雖トモ第十二款ニ載スル如ク更ニ鑒定評價スルヲ妨ケス

第十四款

若シ陸揚願書或ハ船積願書ニ載セサル物品ヲ荷物ノ内ニ隠シ入レ關稅ヲ逋脱セント謀ル者アラハ該品ヲ官ニ沒收スヘシ又若シ荷物ノ品種數量等ヲ偽リ或ハ可稅品ヲ免稅品目錄中ニ混記シテ關稅ヲ逋脱シ又ハ減少セント謀ル者アラハ相當ノ關稅ヲ納メシメタル上罰金トシテ其逋脱若クハ減少セント謀リタル稅金高ノ五倍ヲ課

チ

スヘシ

第十五款

船中乗組人及ヒ旅客ノ自用品ヲ陸揚或ハ船積スルニハ海關ノ免狀ヲ請フニ及ハス然レトモ海關官吏ニ於テ其品々ヲ検査シ若シ自用ト認メ難キ過分ノ可稅品ヲ所持スルトキハ稅目ニ照シ之ニ相當ノ稅ヲ課スヘシ又旅具中ニ禁制品ヲ隠スモノハ本品ヲ沒收シ阿片ノ如キハ第三十六款ニ從テ處分スヘシ

第十六款

日本公使館所用ノ物品ニハ總テ關稅ヲ課スルコトナク且之ヲ検査スルコト莫ルヘシ

第十七款

爆發質若クハ危險質ニ係ル荷物ノ揚卸場ハ豫メ之ヲ定メ置キ其場所ノ外之ヲ揚卸スルヲ許サス

第十八款

朝鮮國ノ通商港ニ輸入シタル關稅納濟ノ諸物品ハ之ヲ朝鮮國ノ諸部ニ輸送スルニ當テ運送稅或ハ内地通關稅其他一切ノ稅ヲ賦課スルコト莫ルヘシ又輸出ノ爲メニ朝鮮國ノ各部ヨリ通商港へ運送スル所ノ物品ニモ右同様運送稅内地通關稅其他一切ノ稅ヲ課セサルヘシ

第十九款

輸入物品關稅納濟ノ後更メテ之ヲ他ノ開港場へ轉送セントスル者アラハ其荷物ヲ解開ケ若クハ物品ヲ抽キ換ヘ或ハ挿シ入レタルコトナク元形ノマ、タルコトヲ海關ニ於テ見届ケタル上ハ納稅濟手形ヲ渡スヘシ他港ノ海關ニテハ其荷物ヲ右ノ手形ニ引合セテ相違ナケレハ重テテ輸入稅ヲ課スルコトナシ若シ物品ヲ抽キ換ヘ或ハ挿シ入レタル等ノ事アラハ其抽キ換ヘ若クハ挿シ入レタル物品ニ付相當ノ稅ヲ納メシメタル上罰金トシテ其稅額五倍ノ金高ヲ課スヘシ

第二十款

輸入物品荷主引取タル後之ヲ積戻サンコトヲ請フ者アルトキハ海關ニテ之ヲ検査

チ



シ果シテ輸入品ニ相違ナキノ證左アレハ輸出税ヲ課スルコトナク其積戻ヲ許スヘシ

第二十一款

日本商船朝鮮國ノ通商港ヘ積ミ回ル朝鮮國產物ハ最初朝鮮港ヨリ輸出セシ時ノ性質及ヒ有様ヲ變換セス又其輸出ノ日ヨリ起算シテ三周年ヲ經過セス且其輸出ノ時受取タル船積免狀ヲ相添ヘ輸入人ニ於テ其朝鮮國產物タルコトヲ證明スルニ於テハ無税通關ヲ許スヘシ

第二十二款

朝鮮國沿海運輸ノ便相整フ迄ノ間日本國商船ハ其何國ノ物品タルヲ問ハス之ヲ搭載シ通商各港ノ間ヲ往來スルヲ得ヘシ但各通商港ニテ買入タル朝鮮產物ヲ朝鮮國ノ他ノ通商港ヘ輸送セント欲スルトキハ其物品ノ輸出税ニ等シキ金額又ハ其金額ヲ擔保スヘキ相當ノ保証人税關長ノ滿ヲ選ミ其證書ヲ其輸出港ノ海關ニ預ケ置キ而シテ他ノ通商港ニ到リテ右物品ヲ陸揚スルトキ陸揚證書ヲ其港ノ海關ヨリ受取

リ尤輸入税ヲ拂 輸出ノ日ヨリ六ヶ月以内ニ之ヲ輸出港ノ海關ヘ指出シ最初預ケ置キタル金額ヲ請戻シ又ハ證書ノ返却ヲ乞フヘシ然レトモ若シ其輸送船ノ難破ニ遭

フコトアレハ輸出ノ日ヨリ一ケ年内ニ右證書ノ代リトシテ日本領事官ノ確認シタル難破証明書ヲ差出スヘシ但朝鮮國ノ船隻不足ナキ日ニ至レハ此口ノ貨ヲ彼口ヘ運載スルニ他國ノ船隻ヲ用ヒス

第二十三款

各通商港海關ノ荷物ヲ取扱フ處ニハ朝鮮政府ニテ上屋ヲ建設シ且又輸出入荷物等ヲ預置クヘキ借庫ヲ築造スヘシ尤藏敷料及ヒ其他ノ事ハ別ニ其規則ヲ協議設定スヘシ

第二十四款

輸入荷物ノ税ヲ納メシテ之ヲ海關倉庫ニ預ケント欲スルモノハ倉庫規則ニ從ヒ海關長ノ免許ヲ受ケサルヘカラス然ルトキハ右荷物ヲ再ヒ日本國ヘ積戻サントスルトキハ其マ、輸出スルヲ得ヘシ又既ニ納税シタル荷物ト雖トモ右倉庫内ヨリ直

チ

チニ積戻スニ於テハ其既納ノ税金ヲ返還スヘシ尤一旦荷主ノ許ニ引取りタル荷物ハ第二十款ノ例ニ據ルヘシ但朝鮮政府ニテ借庫ヲ建築セサル間ハ荷物ヲ引取りタル後ト雖トモ原包ノマ、ナレハ海關ニ於テ既納ノ輸入税ヲ還付シ積戻スコトヲ許スヘシ尤一ケ年ヲ過クル者ハ第二十款ノ例ニ同シ

第二十五款

日本商船修復ノ爲メ其積荷ヲ陸揚スヘキコトアラハ關稅ヲ納メシテ之ヲ陸揚シ海關所轄ノ上屋或ハ倉庫ニ入置但藏敷料及諸雜費ハ船長ヨリ支辨スヘシ修復濟ノ後之ヲ船積スルコトヲ得ヘシ然レトモ若シ其荷物ヲ賣拂フコトアラハ相當ノ關稅ヲ納ムヘシ又朝鮮海邊ニテ破損シタル船舶ノ船材船具及ヒ船用品ヲ賣却スルトキハ其輸入税ヲ免除スヘシ

第二十六款

日本商船出港セント欲セハ拔錨前ニ船長或ハ其代理人ヨリ先ツ出港届書及ヒ輸出積荷目錄ヲ海關ニ差出シ領事ノ船書預リ証書ヲ請戻シ出港免狀ヲ得テ後出港スヘシ

シ

第二十七款

出港ノ手數ヲ爲シ了リタル船舶都合ニ由リ再ヒ荷物ヲ船積シ若クハ船卸シセント欲スルトキハ更ニ入港ノ手數ヲナシ出港スルトキハ亦出港ノ手數ヲナスヘシ又出港手數ノ濟ミタル上出港時期ニ及フト雖モ拔錨シ能ハサルトキハ船長或ハ其代理人ヨリ其旨ヲ海關ニ届出テ認可ヲ受クヘシ

第二十八款

船長出港免狀ヲ得ント欲スルモ海關諸規則ニ違犯スルノ事件アリテ未タ裁判ヲ經サル間ハ海關ニ於テ之ヲ與ヘサルヘシ尤領事官ニ於テ船長ニ至當ノ引受人ヲ立テシムルカ又ハ相當ノ保証金ヲ出サシメタル上海關長ニ通牒スルトキハ海關長ハ出港免狀ヲ與フヘシ

第二十九款

郵船ハ同日若クハ同時ニ入港手數ト出港手數ヲナスコトヲ得ヘシ又輸入積荷目錄

チ

ニハ其港ニ於テ陸揚シ若クハ船移スル所ノ荷物ノ外之ヲ掲記スルコトヲ要セス又輸出積荷目錄ハ船長ヨリ差出シ能ハサルトキハ其郵船會社ノ代理人ヨリ出港後三日内ニ之ヲ指出スモ妨ケナシ

第三十款

船中ノ需用品ヲ求ムル爲メ若クハ災厄ヲ避ル爲メ朝鮮ノ通商港ニ立寄りタル日本商船或ハ漁船ハ入港手數及ヒ出港手數ヲ爲スニ及ハス但斯ノ如キ船舶ト雖トモ二十四時以上碇泊スルトキハ其次第ヲ海關ヘ届出ツヘシ尤引續キ貿易ヲ爲ストキハ必ス第二款ノ規則ニ從フヲ要ス

第三十一款

朝鮮政府ニ於テ後來通商各港内ヲ修理シ及ヒ燈臺礁標ヲ設クヘシ尤之ヲ維持スル費用ニ充ツルカ爲メ日本商船ノ各通商港ニ來航スルモノ噸稅トシテ每噸百貳十五文ツ、ヲ納ムヘシ但何石積ト稱スル船ハ日本ノ六石右噸稅ヲ納ムレハ海關ヨリ四ヶ月限ノ手形ヲ渡シ右期限内ハ朝鮮國內何レノ通商港ニ到ルトモ復タ噸稅ヲ納ム

ルニ及ハス又入港ノ商船荷物ヲ陸揚セスシテ他所ニ赴カントスル者二日内ニ出港スルトキハ噸稅ヲ納ムルニ及ハス尤風雨或ハ大霧等ニテ出港シ難キモノハ其次第ヲ海關ニ届出ツヘシ但漁船ハ噸稅ヲ納メス尤噸稅ハ他國ノ商船若シ日本船ト同數ノ多キニ至レハ公同協議シテ改定スルコト有ルヘシ

第三十二款

軍艦其他日本政府ニ屬シ商品ヲ搭載セサル船舶ノ朝鮮國通商港ニ到ルモノハ入港手數及ヒ出港手數ヲ爲スコトナク又噸稅ヲ拂フコトナク且海關官吏之ヲ監守スルコト莫ルヘシ然レトモ其船中所用品ノ内不用ノ分ヲ陸揚シテ之ヲ賣拂フトキハ其買主ヨリ之ヲ海關ニ届出テ相當ノ關稅ヲ納ムヘシ

第三十三款

日本商船若シ朝鮮國ノ不開港場ニ於テ密商シ或ハ密商セント謀ルモノアラハ該商品ハ勿論其搭載スル所ノ商品ヲ朝鮮政府ニ沒收シ船長ニ五十万文ノ罰金ヲ課スヘシ但風波ノ難ヲ避ケ或ハ薪水食料ヲ求ムル爲メニ一時寄泊スル者ハ此例ニ非ス

第三十四款

朝鮮國政府又ハ人民ニテ荷物人員等ヲ不開口岸ニ運送セント欲スルトキハ日本商船ヲ雇入ル、コトヲ得ヘシ雇主若シ人民ナレハ朝鮮國政府ノ免狀ヲ得テ之ヲ僱使スヘシ

第三十五款

此規則中ニ掲クル所ノ罰金沒收及ヒ其他ノ罰則ニ關スル事件ハ海關長ノ告訴ニ因リ日本領事官ニ於テ之ヲ裁斷スヘシ尤其取立タル罰金及ヒ沒收シタル物品ハ總テ朝鮮政府ノ收領スル所トス故ニ朝鮮官吏ノ差押ヘタル物品ハ該官吏ト日本領事官ト立會ノ上ニテ之ニ封印ヲ施シ裁斷ヲ了ル迄海關ニ留置クヘシ若シ領事官ニ於テ之ヲ無罰ニ決スルキハ其物品ハ領事ヲ經テ荷主ヘ引渡スコト勿論タリト雖モ朝鮮官吏若シ其裁判ニ服セサルトキハ日本國相當ノ裁判所ヘ控訴スヘシ然ルトキハ荷主ハ其物品ノ代價ヲ裁判完結ニ至ルマテ領事館ニ預ケ置クヘシ若シ其差押ユル所ノ物品腐敗質變態質或ハ危險質ニ係レハ其代價ヲ領事館ニ預リ置キ物品ハ荷主ニ

渡スヘシ

第三十六款

鴉片ハ輸入ヲ嚴禁ス若シ鴉片ヲ密輸シ或ハ密輸セント謀ルモノアラハ其品沒收ノ上密輸高一斤ニ付七千文ツ、ノ罰金ヲ課スヘシ但朝鮮政府需用ノ爲メ輸入スルカ又ハ在留日本人民藥用ノ爲メニ日本領事官ノ証明ヲ經テ輸入スルモノハ此限ニアラス

第三十七款

若シ朝鮮國水旱或ハ兵擾等ノ事故アリ境内缺食ヲ致スヲ恐レ朝鮮政府暫ク米糧ノ輸出ヲ禁セント欲セハ須ク其期ニ先タツ一ヶ月前ニ於テ地方官ヨリ日本領事官ニ照知スヘシ然ルトキハ豫メ其期ヲ在各港ノ日本商民ニ轉示シ一體遵守セシムヘシ米穀類ハ進出口トモニ五分稅ヲ課スト雖トモ如シ朝鮮國ニ災荒アリテ進出口ヲ要シ或ハ日本國ニ災荒アリテ出口ヲ要スルトキハ知照ヲ經テ進出稅ヲ免スヘシ

第三十八款

チ

大小砲銃諸種彈丸火藥雷粉其他一切ノ軍器ハ朝鮮政府又ハ朝鮮政府ヨリ軍器買入ノ免許ヲ受ケタル朝鮮人ヲ除クノ外朝鮮人民ヘ賣渡スコトヲ許サス若シ之ヲ密賣スル者アラハ其品ヲ沒收スヘシ

第三十九款

此規則中罰科ヲ掲ケサル條款ニ違背スル者アルトキハ一万五千文以下ノ罰金ヲ課スヘシ

第四十款

此規則ニ定ムル所ノ稅銀及ヒ罰金ハ朝鮮銅錢ヲ以テ之ヲ納ムヘシ或ハ日本銀貨ヲ以テ時ノ相場ニ從ヒ換用スヘシ尤墨斯哥弗ハ日本銀貨ト同價ナルヲ以テ之ヲ換用スルモ亦妨ケナシ又第二第三第四第六第三十三ノ諸款ニ掲クル所ノ罰金及ヒ手數料ハ其商船五百噸以下ハ二分ノ一ヲ科シ五十噸以下ハ四分ノ一ヲ科スヘシ

第四十一款

日本國漁船ハ朝鮮國全羅慶尙江原咸鏡ノ四道朝鮮國漁船ハ日本國肥前筑前長門

朝鮮

海ニ面スル所 石見出雲對馬ノ海濱ニ往來捕魚スルヲ聽スト雖トモ私ニ貨物ヲ以テ貿易スルヲ許サス違フ者ハ其品ヲ沒收スヘシ但其所獲ノ魚介ヲ賣買スルハ此例ニ非ス其彼此應納ノ魚稅及ヒ其他ノ細目ニ至テハ遵行兩年ノ後其景況ニ隨ヒ更ニ協議酌定スヘシ

第四十二款

此規則ハ調印ノ日ヨリ百日内ニ日本朝鮮兩政府ノ允准ヲ經ヘキモノニシテ右百日經過ノ後直チニ之ヲ實踐スヘシ然ルトキハ從來ノ貿易規則及ヒ其他ノ諸約書中此規則ノ諸條款ニ抵觸スルモノハ總テ其効ヲ失フモノトス尤現時若クハ後來朝鮮政府何等ノ權利特典及ヒ惠政恩遇ニ論ナク他國官民ニ施及スルモノアラハ日本國官民モ亦猶豫ナク一体均霑スルヲ得又此規則ハ實踐ノ日ヨリ五箇年ヲ以テ期トス故ニ其ノ滿期前ニ於テ兩國政府更ニ協議ヲ遂ケ新規則ヲ設立スルヲ要ス但若シ協議中其ノ期ヲ過クルコトアルモ新規則設立マテハ此ノ規則ニ據テ辨理スルモノトス且又兩國ノ官吏此ノ規則内ニ掲載セサル條款ヲ增加スルヲ以テ彼此共ニ必要ト考

チ

フ時ハ隨時商議ヲ開クヲ得ヘシ

右証據トシテ兩國ノ全權大臣此條約ニ各ヲ記シ印ヲ調スル者也

大日本國明治十六年七月二十五日

大朝鮮國開國四百九十二年六月二十二日

全權大臣辦理公使 竹添進一郎 印

全權大臣督辦交涉通商事務閔泳穆印

朝鮮國海關稅目

朝鮮國海關稅目

輸入之部

第一 藥材製藥及香料

○五分稅 (從價)

一 諸藥材 他項ニ掲クル者ヲ除ク

一 諸製藥類

一 明礬

一 膠(各種ノ)

一 樟腦

○壹割稅 (從價)

一 龍腦

一 丁香

一 麝香

○貳割稅 (從價)

一 安息香

一 乳香

チ

一 沈香

一 白檀

一 甘松

一 線香

一 其外香料

第二 染料及顏料

○八分稅 (從價)

一 乾藍水藍

一 漆

一 蘇木及蘇木越幾斯

一 五倍子

一 紅花

一 染粉

一 其他別項ニ掲載セサル一切ノ染料

一 色油

一 各色鉛粉及亞鉛粉

一 洋漆

一 紺青

一 雌黃

一 郡青

一 綠青

一 朱

一 其他別項ニ掲載セサル一切ノ顏料

第三 金屬及金屬製品類

○五分稅 (從價)

一 日本銅

○八分税 (從價)

- 一 鍍鋼鉛錫汞夾金其他別項ニ掲ケサル諸金屬類塊錠條桿板葉等ノ別ナク
  - 一 鍍線及銅線
  - 一 銅鍍釘類
  - 一 水銀
  - 一 ソルダ
  - 一 白銅
  - 一 アンチモニー
  - 一 鍋釜刃物及鍍製ブリキ製其他總テ金屬製品類
- 壹割税 (從價)
- 一 金銀銅錫ノ箔類
- 貳割税 (從價)
- 一 金銀器及鍍金銀器

第四 油蠟脂類

○五分税 (從價)

- 一 石炭油
- 八分税 (從價)
- 一 諸種ノ油別項ニ掲ケサルモノ
  - 一 蜜蠟木蠟
  - 一 瀝青及タール
  - 一 獸蠟
  - 一 其他別項ニ掲載セサル一切ノ油蠟脂類
  - 一 椿ノ油
  - 一 レーブ
  - 一 セサナン
  - 一 蠟燭



一 餐付油

一 氣油

第五 布帛類

○八分稅 (從價)

一 生平

一 海黃

一 紬

一 綸子

一 郡内

一 絹紹

一 綿純子、綿縹子、綿紋縹子、綿綸子

一 生金巾

一 白金巾

一 唐棧

一 雲齋小倉織紋羽類

一 天竺布

一 寒冷紗

一 緋金巾、色金巾、紋金巾、綾金巾

一 左良紗

一 綿紹

一 綿天鵝絨

一 蚊帳巾、褥巾

一 純毛吳呂

一 綾吳呂

一 呷吳呂

一 フラチル (純駝ノ別ナク)

- 一モヘイル(全)
- 一毛縹子
- 一縮緬吳呂(純駁ノ別ナク)
- 一純毛羅紗
- 一綿毛羅紗
- 一毛純子、羅世板セルダス、スバニスストライプス(純駁ノ別ナク)
- 一アルバカ
- 一麻布、麻綿布、及麻毛布類(生色白色ノ別ナク)
- 一臥氈ワシ
- 一帆布(綿麻共)
- 一其他別項ニ掲載セサル一切ノ絹綿毛及麻布ノ類
- 一油布蠟布

○壹割税 (從價)

- 一紗
  - 一縮緬
  - 一琥珀
  - 一羽二重
  - 一緞子、縹子綾類
  - 二割税 (從價)
  - 一天鹅絨
  - 一諸種地氈類カレキヤット
- 第六 文具紙類
- 五分税 (從價)
  - 一日本人自用雜紙
  - 八分税 (從價)
  - 一印刷用洋紙(何國製ニ拘ラス)

一 包裝用洋紙

一 諸日本紙

一 墨池、封筒、鉛筆、洋筆、毛筆、石盤等  
一 各種墨

○ 壹割稅 (從價)

一 色紙

一 紋紙

一 印材

一 印肉

一 其他別項ニ掲載セサル一切ノ文具紙類

第七 飲食物及烟草類

○ 五分稅 (從價)

一 穀物穀粉

一 生水菓

一 日本人所食ノ物

一 味噌醬油及酢

○ 八分稅 (從價)

一 鹽

一 茶

一 醃肉、醃魚、及罐詰食料

一 素麩

一 葛粉

一 寒天

一 落花生豆

一 檸檬水、生姜水、曹達水、及諸飲料類

一 其他別項ニ掲載セサル一切ノ飲食物類

チ

一 白黑砂糖
一 糖蜜糖水
一 日本酒
一 清國酒
一 林檎酒
○ 壹割税 (從價)
一 麥酒 (諸酒ノ)
一 赤白葡萄酒
○ 壹割五分税 (從價)
一 冰糖精製糖
一 果子類
○ 貳割税 (從價)
一 卷烟草紙卷烟草其他一切ノ烟葉

○ 貳割五分税 (從價)
一 ウエルムート
一 ポルト
一 シエリー
○ 三割税 (從價)
一 プランデイ
一 ウイスキー
一 シャンペイン
一 櫻酒
一 杜松子酒
一 リキウル
一 糖酒
一 焼酎及泡盛

一其他別項ニ掲載セサル一切ノ酒類

第八 雜貨

○五分稅 (從價)

一石炭及コークス

一日本人常用器具

一家根板

一襖、障子

一疊

一石灰

一砥石

一砂紙

一摺附木

一諸石鹼類

一靴其他履物及傘

一提灯

一膳、椀、重箱、鏡臺、簞笥、盆及總テ木製器具

一日本人建造房屋用竹木材

○八分稅 (從價)

一木材、竹材、石材

一煉化石及瓦

一皮、角、骨、牙、蹄、羽、毛類(工ヲ經サルモノ)

一木炭

一籐

一綿英

一綿糸

一糸系、鬘斗系、屑系

子

- 一天蚕糸
- 一羊毛其他獸毛
- 一苧麻
- 一運貨車船
- 一金剛砂
- 一綿子、菓子、麻子、亞麻子、胡麻子
- 一燈心
- 一弗箱
- 一器械
- 一食器用、磁器陶器類
- 一別項ニ掲載セサル一切ノ雜貨
- 一臥床、椅子、其他家具
- 一衣服帽襪其他服飾品

- 一目鏡
- 一象牙及一角牙
- 一扇及團扇類
- 一齒磨
- 一窓玻璃及玻璃片
- 一洋燈及其部分
- 壹割稅 (從價)
- 一熟皮類
- 一馬具及馬車
- 一諸玻璃器類(別項ニ載セサルモノ)
- 一鏡類(廓ノ有無ニ拘ラス)
- 一紫檀、黑檀、テイクス木、黃楊木、鉄刀木、及總テ堅硬木
- 一蝙蝠傘(絹製鉄幹)

一 旅櫃、提囊及佩袋類

一 寫真器

一 樂器

一 鈕釦扣子類

一 鑛山使用ノ爆發物

○ 壹割五分稅 (從價)

一 烟管及烟囊

一 袋物類

一 毛、皮、狐、獾、獺、海狸、兔等ノ類

○ 貳割稅 (從價)

一 蒔繪シタル漆器類

一 玩具

一 首飾品

一 時辰鐘、及時辰表并其部分品類

○ 貳割五分稅 (從價)

一 寫真

一 花筒、置物其他室內裝飾品ニ属スルモノ

一 鼈甲細工類

一 繪畫(裱裝ノ有無ニ拘ラス)

一 彫刻物

○ 三割稅 (從價)

一 烟花類

一 玻璃珠

一 獵銃及其使用品

一 珊瑚珠

一 眞珠及寶石類

チ

一 衝球象棋骨牌  
一 其他一切ノ遊戯品

第九 船舶

一 蒸氣船 每噸 銅錢貳百五拾文  
一 風帆船 每噸 銅錢百貳拾五文

第十 免稅品

一 貨幣  
一 金銀地金  
一 旅客行李ノ具  
一 貨物見本(相當ノ額數)  
一 新聞紙  
一 廣告紙類  
一 書籍地圖海圖

一 招牌

一 修藝勸業ノ雛形類

一 農具

一 醫術用器具

一 尺度、衡量、寒暖計、晴雨儀、驗液器、針盤、其他學術用器具并其使用品

一 活字(新古ノ別ナク)

一 消防器具

一 船用具 若シ不用ノ者夫陸上シテ競賣スル者ハ仍ホ定稅ヲ徵ス

一 包裝諸席蓆、及繩類(貨物包裝ニ用フヘキ)

第十一 禁制品

一 鴉片(藥用鴉片ヲ除ク)

一 偽藥

一 擬造貨幣類



一淫猥私褻ノ畫圖肖像

一軍器類 凡ソ軍械ノ式樣及ヒ防身ノ物件ハ須ラク領事官ニテ朝鮮官  
准單ヲ收到シタル上方ニ進口ヲ准ス但出賣スルヲ准サス

朝鮮國海關稅目

輸出ノ部

○免稅

一貨幣

一金銀地金及砂金

一旅客行李ノ具

○五分稅 (從價)

一別項ニ掲載セサル一切ノ輸出品

○壹割五分稅 (從價)

一紅蔘 朝鮮ノ商民日本ニ帶入スルトキハ應ニ一割五分ノ稅ヲ納ムヘシ如シ日本ノ  
商民朝鮮政府ノ特許ヲ經スシテ私カニ輸出スル者アレハ查出沒收スヘシ

右証據トシテ兩國ノ全權大臣此稅目ニ各ヲ記シ印ヲ蓋スル者也

大日本國明治十六年七月二十五日

大朝鮮國開國四百九十二年六月二十二日

全權大臣辦理公使竹添進一郎印

全權大臣督辦交涉通商事務閔泳穆印

○朝鮮國トノ貿易手續ハ總テ他ノ外國同様トス

○明治十六年十二月七日第四拾號布告

明治十七年二月一日ヨリ明治九年<sup>十</sup>月<sup>十</sup>第二百二十九號布告ヲ廢止候條朝鮮國トノ貿易

ハ總テ他ノ外國貿易ノ手續ニ依ルヘシ

但當分ノ内各開港場ノ外長崎縣下對馬國嚴原山口縣下長門國下ノ關福岡縣下筑  
前國博多ノ三港ニ限リ朝鮮國貿易ニ關スル日本人所有ノ船舶ノ出入及貨物ノ積

チ

卸テ許シ日本形船舶ニ限り出港手数料トシテ正金壹圓入港手数料トシテ正金貳圓ヲ徴收ス  
右奉 勅旨布告候事

○徴兵令

○明治十六年十二月二十八日第四十六號布告  
徴兵令別冊ノ通改正ス

右奉 勅旨布告候事

別紙

徴兵令

第一章 總則

第一條 全國ノ男子年齢滿十七歳ヨリ滿四十歳迄ノ者ハ總テ兵役ニ服ス可キモノ

トス

第二條 兵役ハ陸軍海軍共ニ常備兵役後備兵役及ヒ國民兵役トス

第三條 常備兵役ハ別チテ現役及ヒ豫備役トス其現役ハ三個年ニシテ年齢滿二十

歳ニ至リタル者之ニ服シ其豫備役ハ四個年ニシテ現役ヲ終リタル者之ニ服ス

第四條 後備兵役ハ五個年ニシテ常備兵役ヲ終リタル者之ニ服ス

第五條 國民兵役ハ年齢滿十七歳ヨリ滿四十歳迄ノ者ニシテ常備兵役及ヒ後備兵役中ニ在ラサル者之ニ服ス

第六條 各兵役ノ期限已ニ滿ルト雖モ戰時或ハ事變ニ際スルトキ若クハ臨時ニ演習或ハ觀兵ノ舉アルトキ若クハ航海中或ハ外國駐劄中ハ其期ヲ延スコトアル可シ

第七條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ兵役ニ服スルコトヲ許サス

第二章 服役

第八條 陸軍現役兵ハ毎年所要ノ人員ニ應シ壯丁ノ身材藝能職業ニ從ヒ步兵騎兵

チ

砲兵工兵輜重兵及ヒ雜卒職工ニ區別シ抽籤ノ法ニ依リ當籤ノ者ヲ以テ之ニ充ツ  
海軍現役兵ハ海軍所要ノ人員ニ應シ沿海地方及ヒ島嶼ノ人民ヲ調査シ海軍ニ適  
スル職業ニ從ヒ水兵火夫職工等ニ區別シ抽籤ノ法ニ依リ當籤ノ者ヲ以テ之ニ充  
ツ但海軍志願兵徵募規則ニ依リ就役スル者ハ本令ノ限ニ在ラス

第九條 陸軍雜卒ノ現役期限ハ其職務ニ因リ之ヲ短縮スルコトアル可シ但常備兵  
役ノ全期ハ之ヲ減スルコトナシ

第十條 年齡二十歳ニ滿タスト雖モ滿十七歳以上ノ者ハ現役ヲ志願スルコトヲ得  
第十一條 年齡滿十七歳以上滿二十七歳以下ニシテ官立府縣立學校小學校ノ卒業  
ヲ除ク證書ヲ所持シ服役中食料被服等ノ費用ヲ自辨スル者ハ願ニ因リ一個年間陸軍現  
役ニ服セシム

其技藝ニ熟達スル者ハ若干月ニシテ歸休ヲ命スルコトアル可シ但常備兵役ノ全  
期ハ之ヲ減スルコトナシ

第十二條 現役中殊ニ技藝ニ熟シ行狀方正ナル者及ヒ官立公立學校小學校  
ヲ除クノ歩兵

操練科卒業證書ヲ所持スル者ハ其期末タ終ラスト雖モ歸休ヲ命スルコトアル可  
シ

第十三條 豫備兵ハ戰時若クハ事變ニ際シ之ヲ召集シ常備隊ヲ充實シ又補充隊ニ  
編制ス平常ニ在テハ技藝復習ノ爲メ毎年一度六十日以内之ヲ召集シ又兵員實查  
ノ爲メ毎年一度點呼ヲ爲ス但海軍豫備兵ハ技藝復習ノ爲メ召集スルコトナシ

第十四條 後備兵ハ戰時若クハ事變ニ際シ豫備兵ニ次テ之ヲ召集シ常備兵ノ後援  
ト爲ス平常ニ在テ其技藝復習ノ爲メニ召集シ及ヒ兵員實查ノ爲メニ點呼ヲ爲ス  
コト豫備兵ニ同シ

第十五條 國民兵ハ戰時若クハ事變ニ際シ後備兵ヲ召集シ仍ホ兵員ヲ要スルトキ  
ニ限り之ヲ召集シ隊伍ニ編制シテ軍役ニ充ツ

第三章 免除及ヒ猶豫

第十六條 兵役ヲ免除スルハ癡疾又ハ不具等ニシテ徵兵検査規則ニ照シ兵役ニ堪  
ハサル者ニ限ル

第十七條 左ニ掲クル者ハ徵集ヲ猶豫ス但其年補充員不足スルトキ又ハ戰時若クハ事變ニ際シ兵員ヲ要スルトキハ之ヲ徵集ス

第一項 兄弟同時ニ徵集ニ應スル者ノ内一人及ヒ現役兵ノ兄或ハ弟一人

第二項 現役中死没又ハ公務ノ爲メ負傷シ若クハ疾病ニ罹リ免役シタル者ノ兄或ハ弟一人

第三項 戸主年齢滿六十歳以上ノ者ノ嗣子或ハ承祖ノ孫

第四項 戸主癱疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサル者ノ嗣子或ハ承祖ノ孫

第五項 戸主

第十八條 左ニ掲クル者ハ其事故ノ存スル間徵集ヲ猶豫ス

第一項 教正ノ職ニ在ル者

第二項 官立府縣立學校小學校ヲ除クノ卒業証書ヲ所持スル者ニシテ官立公立學校教員タル者

十七年十九號布達スヲ以テ教員職ヲ廢ス

第二項 官立大學校及ヒ之ニ準スル官立學校本科生徒

第四項 陸海軍生徒海軍工夫

第五項 身幹未タ定尺ニ滿タサル者

第六項 疾病中或ハ病後ノ故ヲ以テ未タ勞役ニ堪ヘサル者

第七項 學術修業ノ爲メ外國ニ寄留スル者

第八項 禁錮以上ニ該ル可キ刑事被告人ト爲リ裁判未決ノ者

第九項 公權停止中ノ者

第十九條 官立府縣立學校小學校ヲ除クニ於テ修業一個年以上ノ課程ヲ卒リタル生徒ハ六個年以内徵集ヲ猶豫ス

第二十條 左ニ掲クル者ハ豫備兵ニ在ルト後備兵ニ在ルトヲ間ハス復習點呼ノ爲メ召集スルコトナシ但戰時若クハ事變ニ際シテハ太政官ノ決裁ヲ經テ召集スルコトアル可シ

第一項 官吏判任以上及ヒ戸長

チ

第二項 教導職試補ヲ除ク

第三項 官立公立學校教員

第四項 府縣會議員

第五項 官立府縣立醫學校ノ卒業證書ヲ所持シテ醫術開業ノ者

第二十一條 官省院廳府縣ニ於テ餘人ヲ以テ代フ可カラサル技術ノ職ヲ奉スル者ハ太政官ノ決裁ニ依テ徵集ヲ猶豫スルコトアル可シ

第二十二條 左ニ掲クル者ハ第十七條ニ照シテ徵集ヲ猶豫スルノ限ニ在ラス

第一項 附籍戸主及ヒ附籍戸主ノ嗣子或ハ承祖ノ孫

第二項 癡疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルニ非ス或ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルニ非スシテ嗣子承祖ノ孫若クハ相續人ヲ罷メ更ニ定メタル嗣子承祖ノ孫

第二項 年齢六十歳未滿ノ戸主癡疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルニ非ス或ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルニ非スシテ戸主ヲ罷メ年齢六

十歳以上ノ者ニシテ其跡ヲ繼キタル戸主ノ嗣子或ハ承祖ノ孫

第四項 分家シ又ハ絶家若クハ廢家ヲ再興シタル戸主及ヒ其戸主ノ嗣子承祖ノ孫

第五項 嗣子承祖ノ孫失踪シテ五個年ヲ經サル者ノ跡ニ定メタル嗣子承祖ノ孫

第六項 第二項第三項第四項ニ當ル嗣子或ハ承祖ノ孫ニシテ戸主癡疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルニ非ス或ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルニ非スシテ戸主ヲ罷メ其跡ヲ繼キタル戸主

第七項 年齢六十歳未滿ノ者癡疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルニ非ス或ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルニ非スシテ戸主ヲ罷メ其跡ヲ繼キタル戸主

第八項 嗣子承祖ノ孫又ハ相續人癡疾又ハ不具等ニシテ一家ノ生計ヲ營ムコト能ハサルニ非ス或ハ重罪ノ刑ニ處セラレタルニ非スシテ戸主ノ死亡跡若

クハ戸主ヲ罷メタル跡ヲ繼カス他ノ者ニシテ其跡ヲ繼キタル戸主

第九項 戸主失踪シテ五個年ヲ經サル者ノ跡ヲ繼キタル戸主

第二十三條 第十八條第一項第二項第三項第四項陸海軍生徒ヲ除ク第十九條第二十一條ニ

當ル者ト雖モ第三十五條ニ示シタル徵兵各自屆出期限即チ九月十六日以後ニ係ル者ハ徵集ヲ猶豫スルノ限ニ在ラス

第四章 徵兵區及ヒ抽籤

第二十四條 徵兵區ハ軍管師管及ヒ府縣ノ區域ニ從フ其軍管ニ從フモノヲ軍管徵兵區ト爲シ師管ニ從フモノヲ師管徵兵區ト爲シ府縣ニ從フモノヲ府縣徵兵區ト爲ス但府縣ノ管地兩師管ニ分属スルモノハ師管毎ニ一區ヲ設ク軍管及ヒ師管ノ徵兵區域ハ別表ニ掲ク

第二十五條 各鎮臺ニ属スル歩兵ハ其師管徵兵區限リ其他ノ諸兵ハ其軍管徵兵區限リ之ヲ徵集ス但現役徵員及ヒ其補充員不足スルトキ歩兵ハ他ノ師管其他ノ諸兵ハ他ノ軍管徵兵區ヨリ之ヲ補フ

海軍及ヒ近衛ノ諸兵ハ各軍管徵兵區ニ配當シテ全國ヨリ之ヲ徵集ス

第二十六條 抽籤ハ各府縣徵兵區限リ之ヲ行フモノトス

府縣徵兵區ニ於テハ其區壯丁ノ身體檢査終リタル後兵役ニ適ス可キ人員ノ身材職業ニ從ヒ兵種ヲ區別シ番號ヲ定メ抽籤セシム

第二十七條 籤ハ一郡區毎ニ籤丁ノ人撰ヲ以テ一名乃至三名ノ總代人ヲ出シテ之ヲ抽カシム

第二十八條 抽籤ノ法ハ籤丁ノ數ニ應シ籤札ニ兵種番號ヲ記シ籤箱ニ納レ籤簿掛ノ面前ニ置キ籤丁各簿ノ順序ニ從ヒ其氏名ヲ呼ヒ總代人ニ之ヲ抽カシメ籤簿掛ハ抽籤ノ正否ヲ監シ抽キ擧クル所ノ番號ヲ高聲ニ呼ハシメ其籤札ヲ受取り籤簿ニ氏名番號ヲ記シ籤札ハ總代人ニ交付ス

第二十九條 籤ハ其番號現役徵員ノ數ニ滿ツル迄ヲ以テ現役籤トシ其餘ヲ以テ補充籤トス

第五章 補充員及ヒ豫備徵員

チ

第三十條 補充員ハ補充籤ヲ抽キタル者ヲ以テ一個年間之ニ充ツ其期限内現役兵  
欠員スルトキ又ハ戰時若クハ事變ニ際シ兵員ヲ要スルトキ其番號ノ順序ニ從ヒ  
之ヲ徵集ス

補充員ノ數ハ概テ現役徵員五分ノ二ヨリ少カラサルモノトス

第三十一條 補充員ニシテ其期限内徵集ノ命ナキ者及ヒ第十八條第三項ノ生徒ニ  
シテ二個年以上ノ課程ヲ卒リタル者ハ年齡滿二十七歲迄之ヲ第一豫備徵員トス  
第三十二條 第十七條ニ當ル者ニシテ其年徵集ノ命ナキ者第十八條第二十一條ニ  
當ル者ニシテ七個年間其事故ノ存スル者及ヒ第一豫備徵員ヲ終リタル者年齡滿  
三十二歲迄ハ之ヲ第二豫備徵員トス但第十七條ニ當ル者第二豫備徵員ト爲リタ  
ル後六個年間ニ該條ニ掲クル資格ヲ失ヒタルトキハ現役ニ徵集ス

第三十三條 豫備徵員ハ戰時若クハ事變ニ際シ兵員ヲ要スルトキ之ヲ徵集ス但第  
二豫備徵員ヲ徵集スルハ後備兵ヲ召集スルトキニ限ル

第六章 雜則

第三十四條 毎年一月ヨリ十二月迄ニ年齡滿十七歲ト爲ル者ハ其年ノ九月一日ヨ  
リ同月十五日迄ニ戸主本人戸主ナレハ自身以下  
戸主トアルモノ皆同シヨリ本人ノ氏各家族籍住所誕生ノ  
年月日及ヒ職業ヲ記載シ本籍ノ戸長ニ届出可シ

第三十五條 毎年一月ヨリ十二月迄ニ年齡滿二十歲ト爲ル者ハ其年ノ九月一日ヨ  
リ同月十五日迄ニ書面ヲ以テ戸主ヨリ本籍ノ戸長ニ届出可シ若シ届出ノ後翌年  
四月十日迄ニ異動ヲ生シタルトキハ其事由ヲ詳記シ三日以内ニ本籍ノ戸長ニ届  
出可シ但二十歲未滿ニシテ現ニ服役スル者ハ届出ルニ及ハス

第三十六條 第十七條ニ當ル者其資格ヲ失ヒ第十八條第十九條第二十一條ニ當ル  
者其事故止ニ及ヒ第三十二條但書ニ當ル異動ヲ生シタルトキハ其事由ヲ詳記シ  
其年ノ九月一日ヨリ同月十五日迄ニ戸主ヨリ本籍ノ戸長ニ届出可シ但九月十六  
日以後翌年四月十日以前本條ニ當ル者ハ三日以内ニ本籍ノ戸長ニ届出可シ

第三十七條 他ノ府縣ニ寄留スル者其地ニ於テ徵集ニ應セント欲スルトキハ其地  
ニ居住スル者戸主ヲ以テ證人ト爲シ八月十五日迄ニ戸主ヨリ其旨ヲ本管廳ニ願出

チ

可シ但第二十五條ノ屆書ハ寄留地ノ戸長ニ差出ス可シ

第二十八條 現役兵在營在艦中ハ定額ノ日給ヲ與ヘ服食等ヲ給ス

第二十九條 疾病或ハ犯罪等ニテ期限ニ際シ入營シ難キ者ハ其事由ヲ詳記シ其疾病ニ罹ル者ハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ即日戸長ニ届出可シ其事故止ムトキ亦同シ

第四十條 第三十九條ニ掲クル者其年九月一日ニ至ルモ事故猶止マサルトキハ之ヲ翌年廻シノ者ト爲シ翌年更ニ検査ヲ遂ケ他ノ徵員ニ先チ徵集ス可シ但戰時若クハ事變ニ際シ兵員ヲ要スルトキハ翌年徵集ノ期ヲ待タズ徵集ス

第四十一條 兵役ヲ免レンカ爲メ身体ヲ毀傷シ疾病ヲ作爲シ其他詐僞ノ所爲ヲ用ヒ又ハ逃亡若クハ潜匿シタル者又ハ正當ノ故ナク検査所ニ參會セス又ハ第三十

五條第二十六條ノ届出ヲ怠リタル者ハ抽籤ノ法ヲ用ヒス直ニ現役ニ徵集シ又ハ翌年検査ヲ遂ケ第四十條ニ掲クル者ニ先チ抽籤ノ法ヲ用ヒス徵集ス

第四十二條 常備現役年期ノ計算ハ總テ其入營年ノ四月二十日

ヨリ起算シ豫備役及ヒ後備役年期ノ計算ハ其定例編入ス可キ年ノ四月二十日ヨ

リ起算ス但禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ監視ニ付セラレ又ハ逃亡シタル者其刑期中

ノ日數及ヒ逃亡中ノ日數ハ服役年期ニ算入セス

第四十三條 第三十四條第三十五條第三十六條第三十九條ノ届出ヲ爲サ、ル者及

ヒ検査時日ノ指定ヲ受ケ正當ノ故ナク其場所ニ參會セサル者ハ三圓以上三十圓

以下ノ罰金ニ處ス

第四十四條 兵役ヲ免レンカ爲メ逃亡シ又ハ潜匿シ若クハ身体ヲ毀傷シ疾病ヲ作

爲シ其他詐僞ノ所爲アル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓

以下ノ罰金ヲ附加ス

第四十五條 本令施行ノ爲メニ要スル規則ハ別ニ布達ヲ以テ之ヲ定ム

第 第	軍管 師管	國 名
武藏ノ内	麴町區 神田區 日本橋區 京橋區 芝區 麻布區 赤坂區 四谷區	
北豐島郡 南足立郡 北足立郡 東多摩郡 西多摩郡 南多摩郡 北多摩郡 久良岐郡 檜樹郡 都筑郡	牛込區 小石川區 本郷區 下谷區 淺草區 横濱區 荏原郡 南豐島郡	
新坐郡 入間郡 高麗郡 比企郡 横見郡 秩父郡 兒玉郡 那珂郡 賀美郡 大里郡		

チ



第一	相摸 甲斐 伊豆 上野 信濃ノ内 <small>南佐久郡 北佐久郡 小縣郡 埴科郡</small>	武藏ノ内 <small>本所區 深川區 南葛飾郡 北葛飾郡 南埼玉郡 北埼玉郡</small>	陸前ノ内 <small>仙臺區 名取郡 磐城 岩代 羽前 越後 佐渡</small>	陸前ノ内 <small>宮城郡 栗原郡 登米郡 本吉郡 志田郡 桃生郡 牡鹿郡 遠田郡 氣仙郡</small>	陸前ノ内 <small>陸中 陸奥</small>	尾張ノ内 <small>名古屋區 海東郡 海西郡 知多郡 中島郡 信濃ノ内 <small>東筑摩郡 西筑摩郡 南安曇郡 北安曇郡</small></small>	尾張ノ内 <small>東春日井郡 西春日井郡 美濃 加賀 能登 越中 飛驒 越前</small>	攝津ノ内 <small>北區 東區 南區 紀伊ノ内 <small>和歌山區 那賀郡 伊都郡 有田郡</small></small>	攝津ノ内 <small>日高郡 西牟婁郡 東牟婁郡 山城 大和 河内 和泉 近江 伊賀</small>
----	--	--	---	--	------------------------------	---	--	--	--

第四	攝津ノ内 <small>神戸區 西成郡 島上郡 島下郡 豐島郡 能勢郡 播磨 淡路</small>	若狹 丹波 丹後 但馬 美作 備前 因幡 伯耆	安藝 備後 備中 出雲 石見 隱岐 周防 長門	阿波 讚岐 伊豫 土佐	肥後 日向 大隅 薩摩 沖繩	豐前 豐後 筑前 筑後 肥前 壹岐 對馬	渡嶋 後志 石狩 天鹽 北見 膽振 日高 十勝 釧路	根室 千嶋
----	--	-------------------------	-------------------------	-------------	----------------	----------------------	----------------------------	-------

軍管ハ軍團ノ諸兵師管ハ師團ノ諸兵ヲ徵集ス  
 徵兵ハ現今沖繩縣ニ之ヲ行ハス北海道ニ於テハ第七軍管ノ鎮臺ヲ設クル迄函館縣  
 下函館江差福山三個所ヲ限リ之ヲ行ヒ第二軍管ノ管轄ニ属セシム

子

○地租條例

○明治十七年三月十五日第七號布告

地租條例別冊ノ通制定シ明治六年<sup>七月</sup>第二百七十二號布告地租改正條例及地租改正ニ關スル條規其他本條例ニ牴觸スルモノハ廢止ス

但東京府管轄伊豆七嶋小笠原嶋函館縣沖繩縣札幌縣根室縣ハ當分從前ノ通タルヘシ

右奉 勅旨布告候事

地租條例

第一條 地租ハ地價百分ノ二箇半ヲ以テ一年ノ定率トス

但本條例ニ地價ト稱スルハ地券ニ掲ケタル價額ヲ謂フ

第二條 地租ハ年ノ豐凶ニ由リテ増減セス

第三條 有租地ヲ區別シテ二類ト爲ス

九年百六十一號布告  
北海道地租額案

第一類 田畑郡村宅地、市街宅地、鹽田、鑛泉地、

第二類 池沼、山林、原野、雜種地、

第一類中又ハ第二類中ノ各地目變換スルモノヲ地目變換ト謂フ

第二類地ニ勞費ヲ加ヘ第一類地ト爲スモノヲ開墾ト謂フ

第一類地又ハ第二類地ノ山崩、川欠、押堀、石砂入、川成、海成、湖水成等ノ如キ天災ニ罹リ地形ヲ變シタルモノヲ荒地ト謂フ

第四條 公立學校地、鄉村社地、墳墓地、用惡水路、溜池、堤塘、井溝、及公眾ノ用ニ供スル道路ハ地租ヲ免ス

第五條 土地ノ丈量ハ曲尺ヲ用ヒ六尺ヲ間ト爲シ方壹間ヲ以テ步ト爲シ三十步ヲ畝ト爲シ十畝ヲ段ト爲シ十段ヲ町ト爲ス但市街宅地ハ方壹間ヲ以テ坪ト爲シ坪ノ十分一ヲ合ト爲シ合ノ十分一ヲ勻ト爲ス

第六條 開墾墾下年期明荒地免租年期明ニテ地價ヲ定ルトキ又ハ地目變換スルトキハ地盤ヲ丈量ス

チ

第七條 地價ハ地目變換又ハ開墾ニ非サレハ修正セス

第八條 一般ニ地價ノ改正ヲ要スルトキハ前以テ其旨ヲ布告スヘシ

第九條 地價ハ其地ノ品位等級ヲ詮定シ其所得ヲ審査シ尙ホ其土地ノ情況ニ應シ之ヲ定ム

第十條 地目ヲ變換スルトキハ之ヲ地方廳ニ届出ヘシ地價ハ其地ノ現況ニ依リ之ヲ修正ス

第十一條 免租地ヲ有租地ト爲サントスルトキハ地方廳ノ許可ヲ受クヘシ地價ハ其地ノ現況ニ依リ之ヲ定ム

第十二條 地租ハ地券記名者ヨリ徴收ス但賃入ノ土地ハ其賃取主ニ於テ之ヲ納ムヘシ

第十三條 有租地ヲ公立學校地、鄉村社地、墳墓地、ト爲ストキ其地租ハ許可ヲ得シ月分ヨリ月割ヲ以テ之ヲ免シ用惡水路、溜池、堤塘、井溝、公衆ノ用ニ供スル道路、ト爲ストキ其地租ハ其地工事著手ノ月分ヨリ月割ヲ以テ之ヲ免ス

免租地ヲ有租地ト爲ストキ其地租ハ許可ヲ得シ翌月分ヨリ月割ヲ以テ徴收ス

第十四條 地目變換ハ其地價修正ノ年ヨリ修正地價ニ依リ地租ヲ徴收ス

第十五條 開墾地ハ歛下年期明荒地ハ免租年期明ノ翌年分ヨリ更定地價ニ依リ地租ヲ徴收ス

第十六條 開墾ヲ爲サントスルトキハ地方廳ノ許可ヲ受クヘシ開墾地ハ十五年以内ノ歛下年期ヲ許可ス但年期中ハ原地價ニ依リ地租ヲ徴收ス

第十七條 歛下年期中當初ノ目的ヲ改メ他ノ地目ニ變スルトキハ之ヲ地方廳ニ届出ヘシ此場合ニ於テハ直ニ其地價ヲ定メ又ハ更ニ歛下年期ヲ許可スルコトアルヘシ

第十八條 歛下年期明ニ至リ開墾ノ成功ニ至ラサルモノハ更ニ十五年以内歛下年期ヲ許可ス

第十九條 歛下年期明ノトキハ其地價ヲ修正ス若シ其開墾當初ノ目的ニ達セス他ノ地目ニ變スルモノハ其地ノ現況ニ依リ地價ヲ修正ス

チ

第二十條 荒地ハ其被害ノ年ヨリ十年以内免租年期ヲ定メ年期明ニ至リ原地價ニ復ス

第二十一條 免租年期明ニ至リ其地ノ現況原地價ニ復シ難キモノハ十年以内七割以下ノ低價年期ヲ定メ年期明ニ至リ原地價ニ復ス

第二十二條 低價年期明ニ至リ尙ホ原地價ニ復シ難キモノ及ヒ免租年期明ニ至リ原地目ニ復セス他ノ地目ニ變スルモノハ其地ノ現況ニ依リ地價ヲ定ム

第二十三條 免租年期明ニ至リ尙ホ荒地ノ形狀ヲ存スルモノハ更二十年以内免租繼年期ヲ定ム其年期明ニ至リ原地價ニ復シ難キモノハ第二十一條第二十二條ニ依テ處分ス

第二十四條 川成、海成、湖水成ニシテ免租年期明ニ至リ原形ニ復シ難キモノハ更二十年以内免租繼年期ヲ許可ス其年期明ニ至リ尙ホ原地目ニ復セス他ノ地目ニ變セサルモノハ川、海、湖ニ歸スルモノトシ其地券ヲ還納セシム

第二十五條 土地ヲ欺隱シ地租ヲ遁脱スル者ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處シ

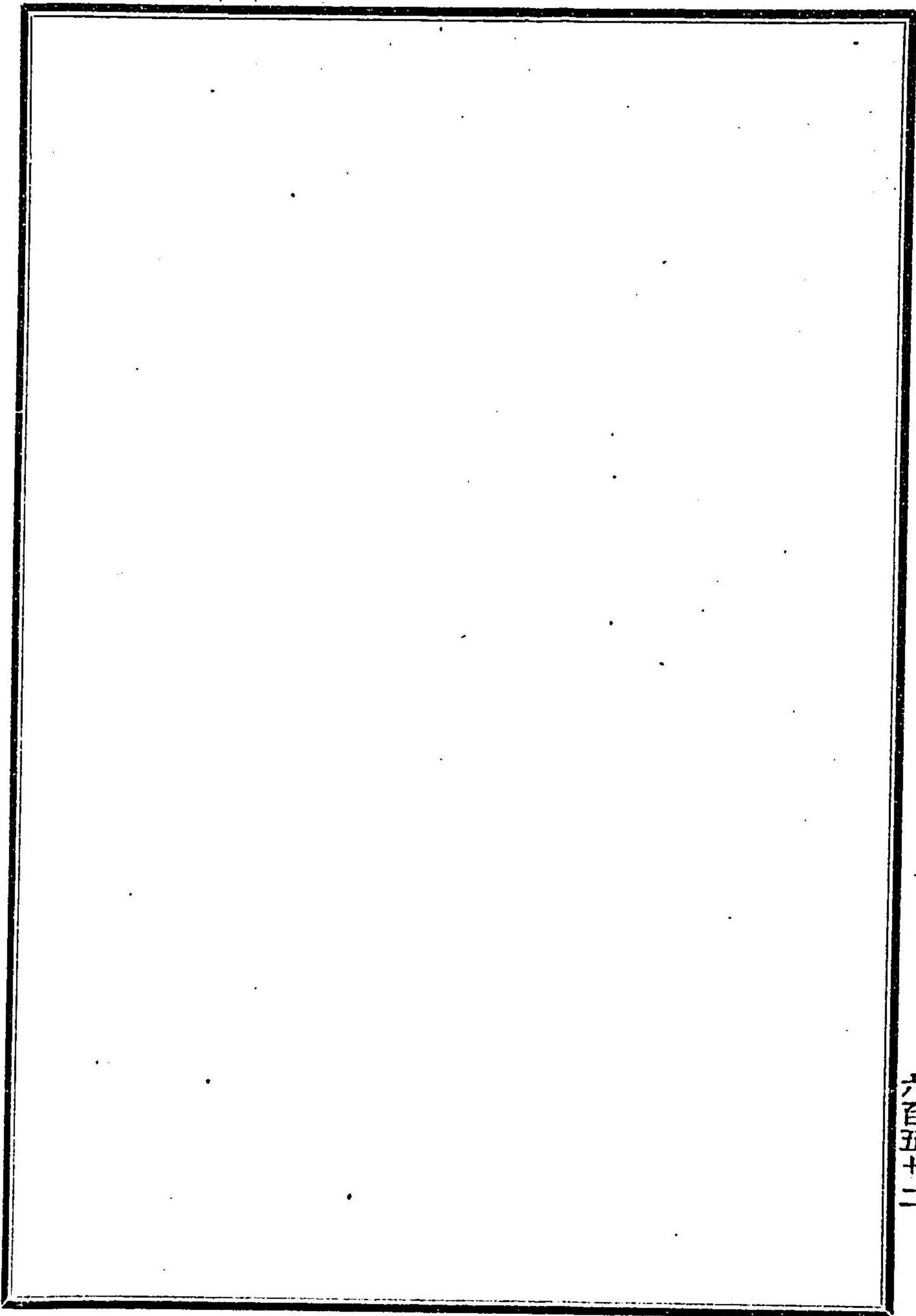
現地目ニ依リ地價ヲ定メ欺隱年間ノ地租ヲ追徴ス但地租改正ノ初年以前ニ溯ルコトヲ得ス

策二十六條 第十一條第十六條ニ違犯スル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス其免租地ヲ有租地ト爲シ又ハ開墾ヲ爲スコトヲ許可スヘキモノハ現地目ニ依リ地價ヲ定メ其地租増額ヲ追徴ス但地租改正ノ初年以前ニ溯ルコトヲ得ス

第二十七條 第十條第十七條ニ違犯スル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第二十八條 第二十五條以下ノ所犯借地人、小作人、ノ所爲ニ係リ所有主其情ヲ知ラサルトキハ其借地人、小作人ヲ罰シ地租ハ所有主ヨリ追徴ス

第二十九條 第二十五條第二十六條第二十七條第二十八條ノ刑ニ當ル者自首スルトキハ其罰金科料ヲ免ス但其追徴スヘキ地租ハ仍ホ之ヲ納メシム



### ○利ノ部

○離婚ノ出訴ヲ許ス

○明治六年五月十五日第百六十二號布告

夫婦ノ際已ムヲ得サルノ事故アリテ其婦離縁ヲ請フト雖モ夫之ヲ肯ンセス之レカ  
タメ數年ノ久ヲ經テ終ニ嫁期ヲ失ヒ人民自由ノ權理ヲ妨害スルモノ不少候自今右  
様ノ事件於有之ハ婦ノ父兄弟或ハ親戚ノ内附添直ニ裁判所へ訴出不苦候事

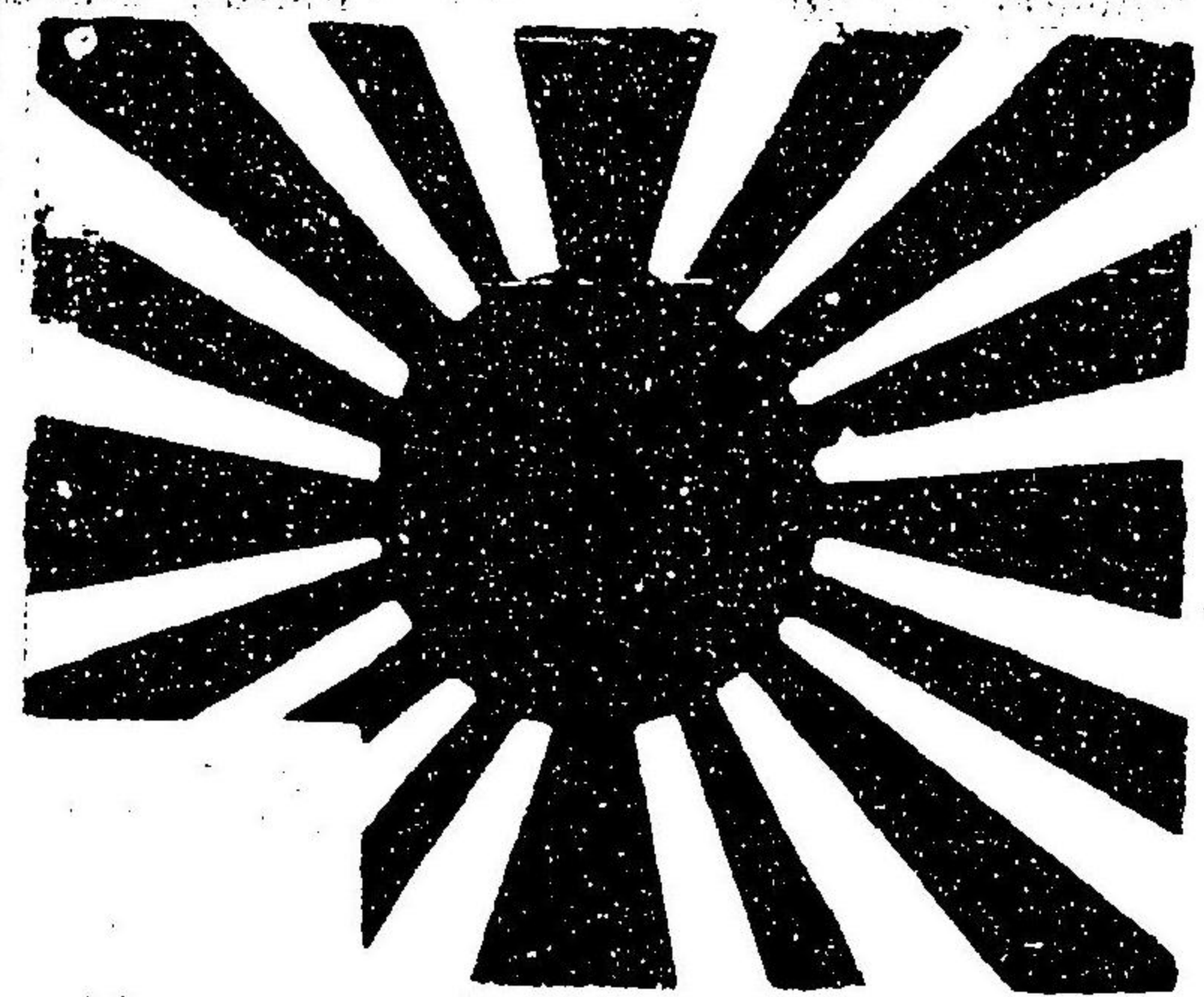
○陸軍歩騎砲三兵聯隊軍旗并ニ歩兵大隊旗嚮導旗ヲ定ム

○明治七年十二月二日第百三十號布告

陸軍歩騎砲三兵聯隊軍旗并ニ歩兵大隊旗及ヒ同嚮導旗別紙圖面ノ通被定候條此旨  
布告候事

十八年六月號布告ヲ  
以テ本令中ヲ改正  
削除ス

リ



皇太后御遺詔

○明治十八年三月九日第六號布告

明治七年<sup>十二月</sup> 第三百三十號布告中左ノ通改正削除ス

「步騎砲」三兵聯隊軍旗并ニ步兵大隊旗及ヒ同嚮導旗「トアルヲ」步兵騎兵聯隊軍旗ニ改ム

「步兵聯隊軍旗」ノ下割注中「綠紫色ハ絹絲」トアルヲ「綠ハ絹絲ニシテ常備軍聯隊軍旗ハ紫色後備軍聯隊軍旗ハ赤色トス」ニ改ム

「騎兵砲兵聯隊軍旗」<sup>周圍黃色ハ金モ一</sup>「トアルヲ」騎兵聯隊軍旗<sup>周圍及綠ハ步兵聯隊軍旗ニ同シ</sup>

ニ改ム步兵大隊旗及步兵嚮導旗ノ六圖ヲ削除ス

右奉 勅旨布告候事

○立憲政體漸次設立ノ詔勅

○明治八年四月十四日第五十八號布告

別紙詔書之通被仰出候條此旨布告候事

詔書寫

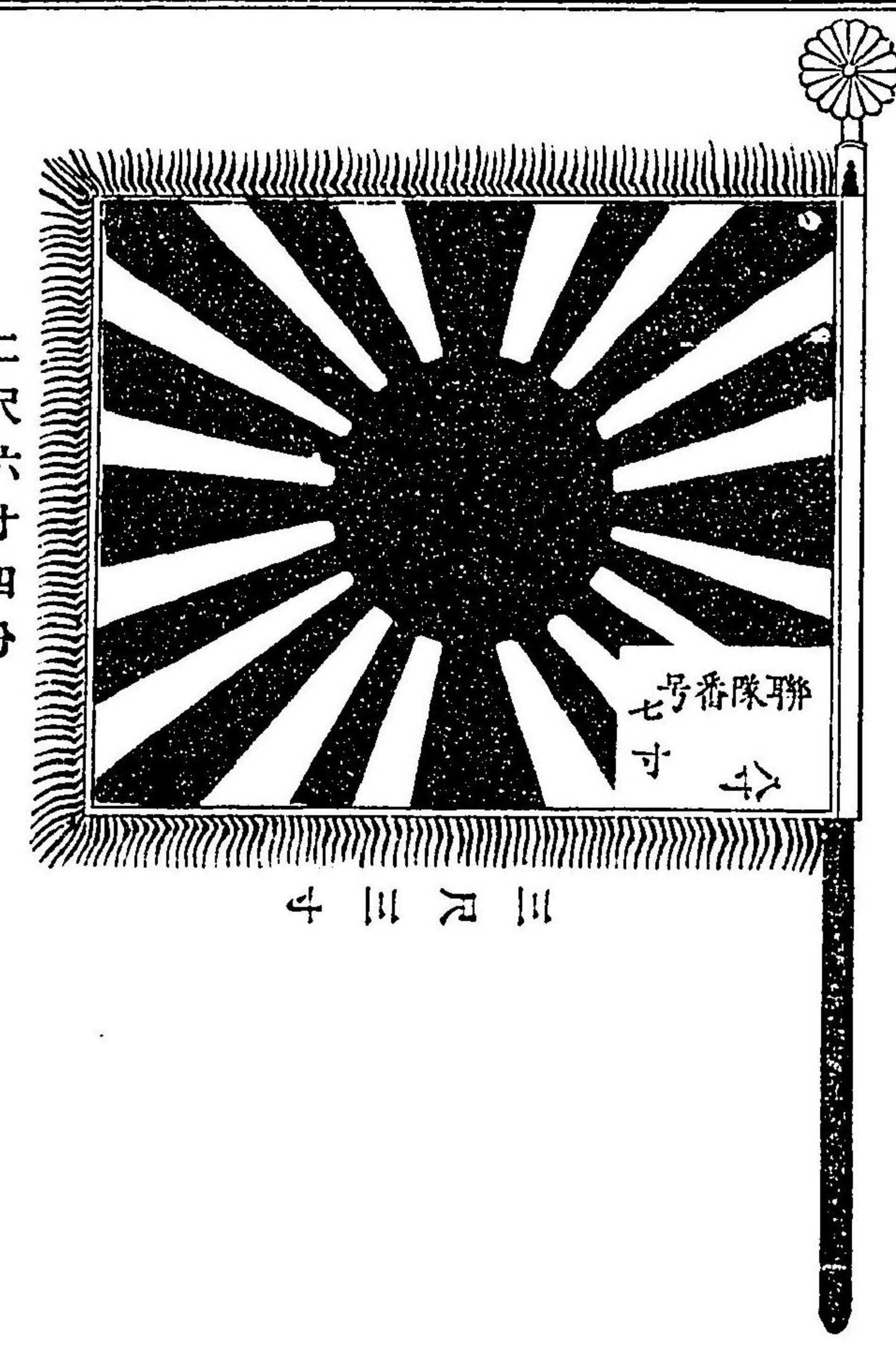
朕即位ノ初首トシテ群臣ヲ會シ五事ヲ以テ神明ニ誓ヒ國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ求ム幸ニ祖宗ノ靈ト群臣ノ力トニ頼リ以テ今日ノ小康ヲ得タリ顧ニ中興日淺ク内治ノ事當ニ振作更張スヘキ者少シトセス朕今誓文ノ意ヲ擴充シ茲ニ元老院ヲ設ケ以テ立法ノ源ヲ廣メ大審院ヲ置キ以テ審判ノ權ヲ鞏クシ又地方官ヲ召集シ以テ民情ヲ通シ公益ヲ圖リ漸次ニ國家立憲ノ政體ヲ立テ汝衆庶ト俱ニ其慶ニ頼ント欲ス汝衆庶或ハ舊ニ泥ミ故ニ慣ル、ト莫ク又或ハ進ムニ輕ク爲スニ急ナルト莫ク其レ能朕カ旨ヲ體シテ翼賛スル所アレ

明治八年四月十四日

リ

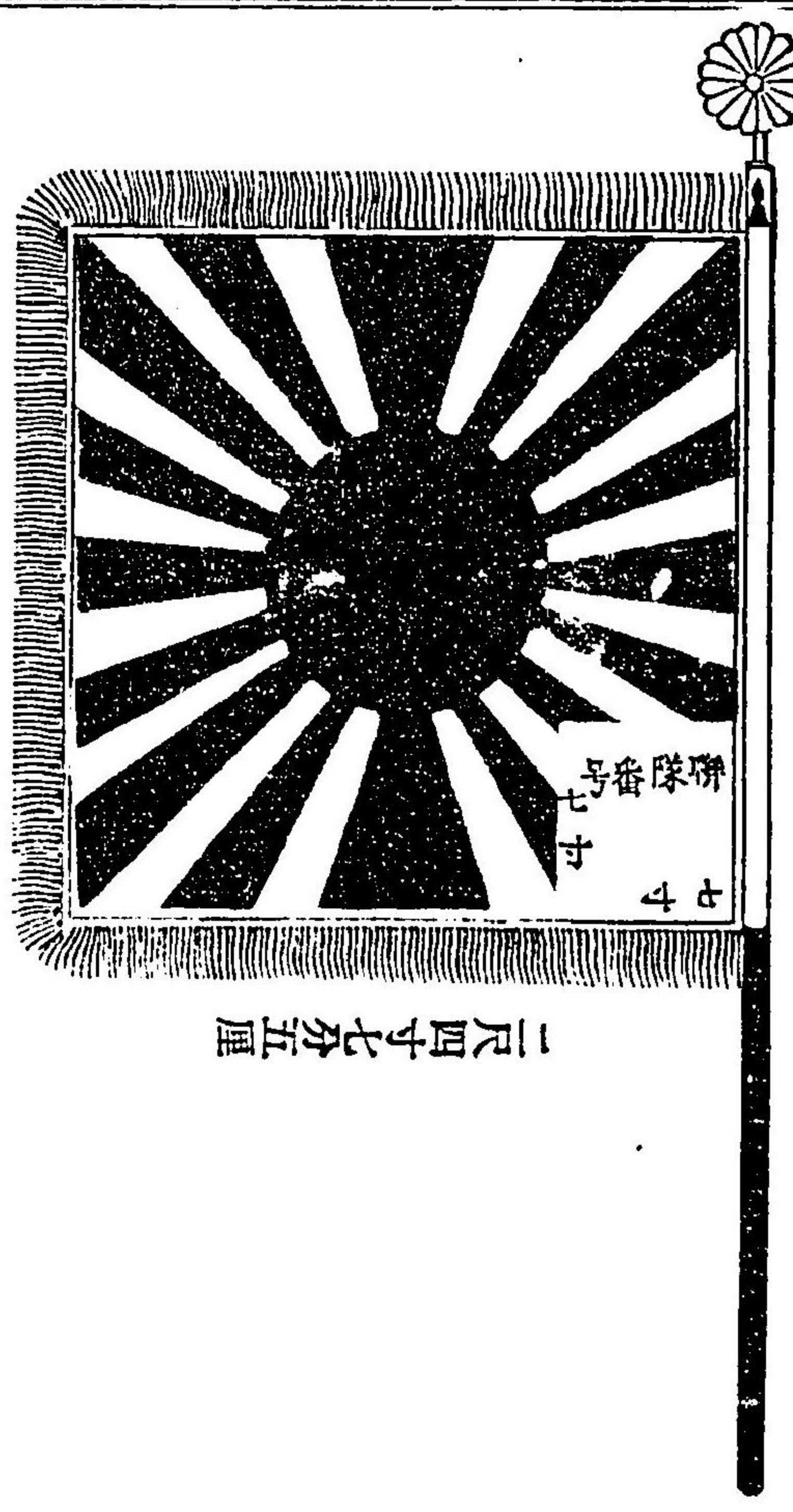
但明治二年庚午五月被定候陸軍國旗章并ニ大隊旗嚮導旗等被廢候事

步兵聯隊軍旗  
 周圍黃色ハ金モール  
 線紫色ハ絹糸



二尺六寸四分

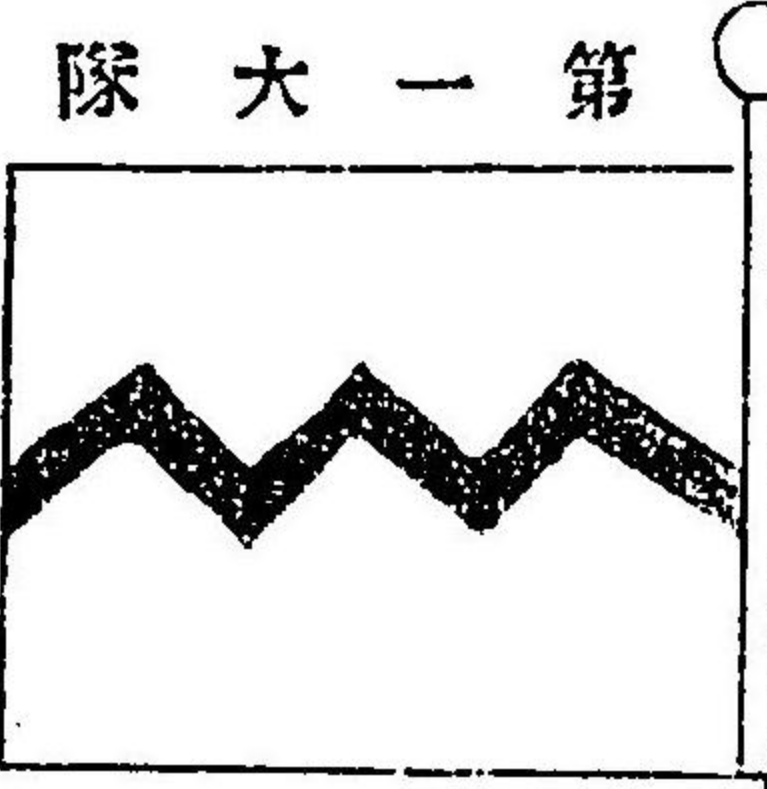
騎兵砲兵聯隊軍旗  
 周圍黃色ハ金モール  
 線紫色ハ絹糸



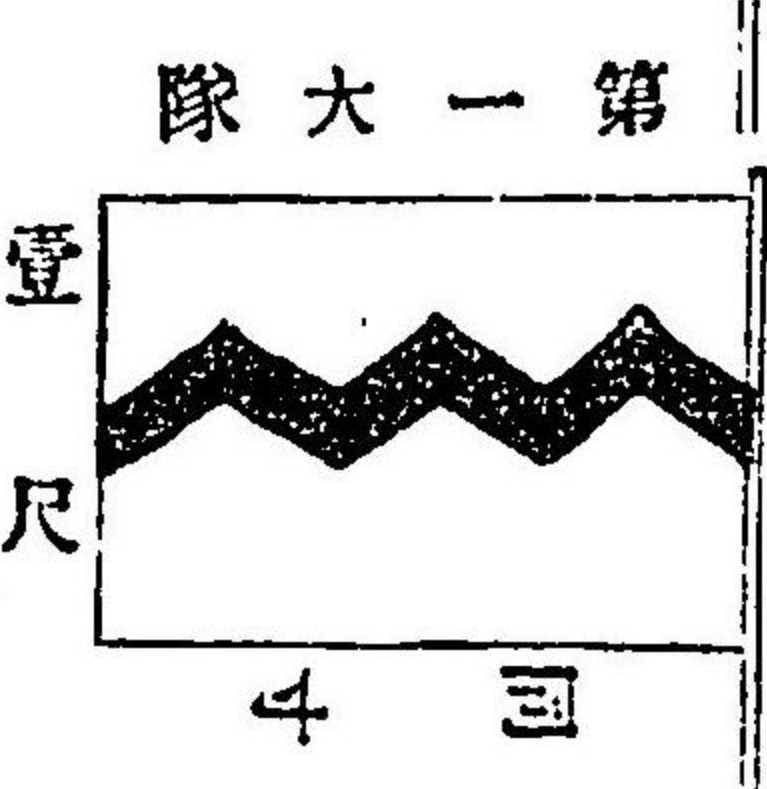
二尺四寸七分五厘

步兵大隊旗

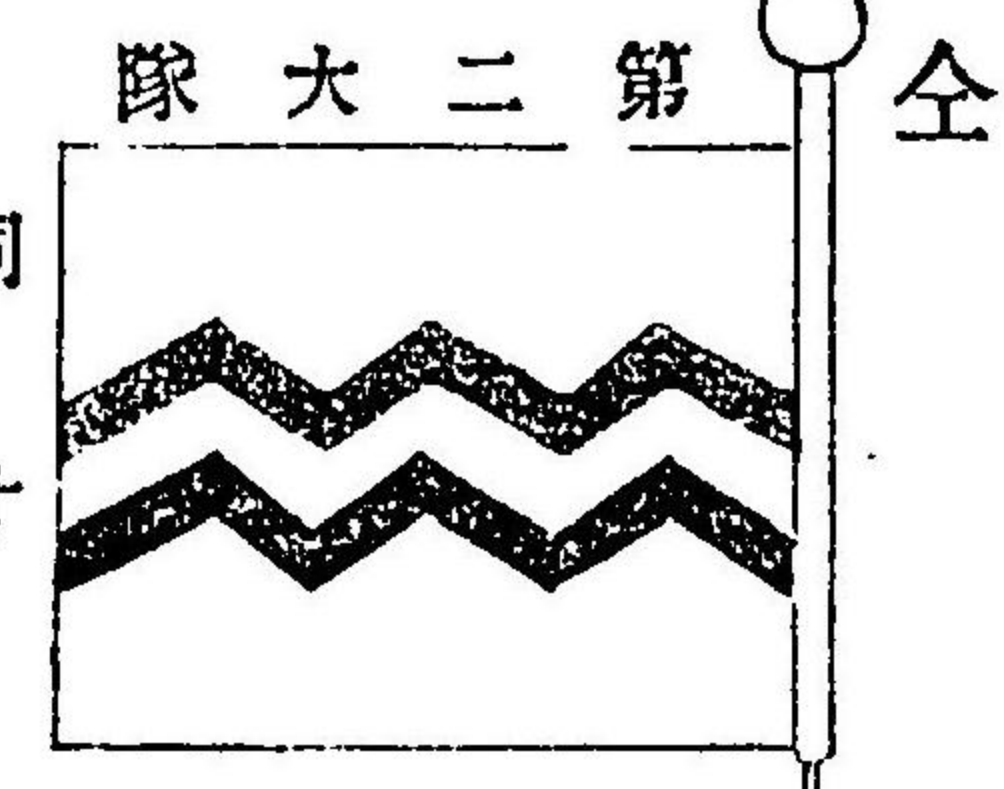
步兵嚮導旗



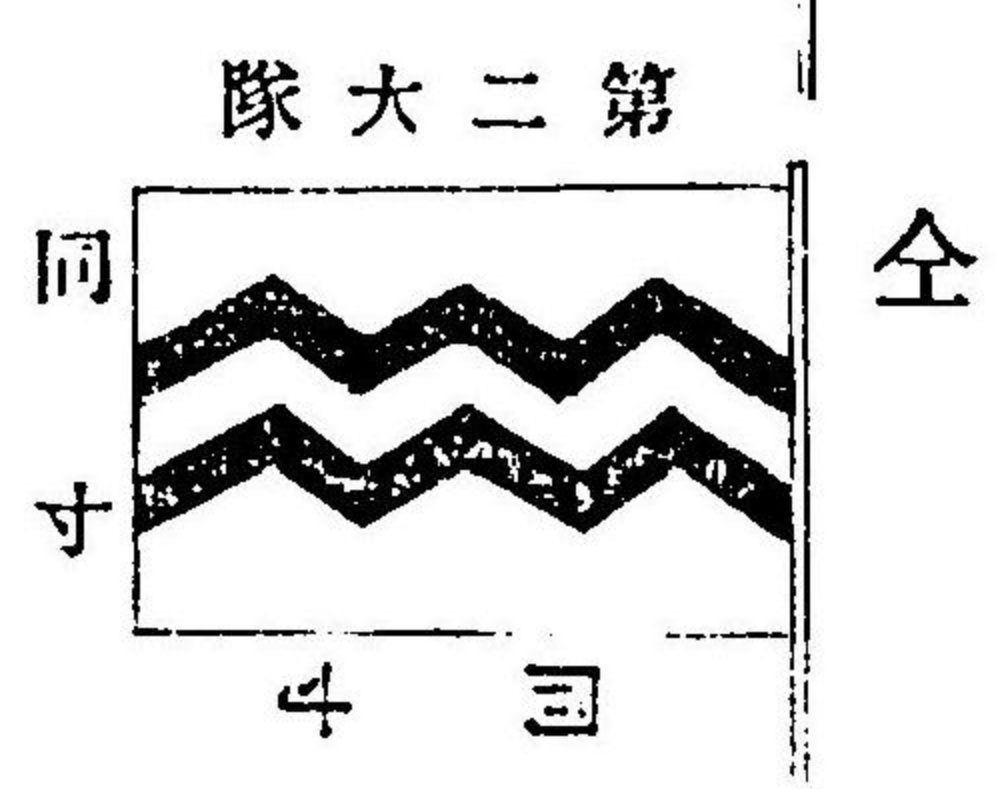
一尺四寸八分五厘



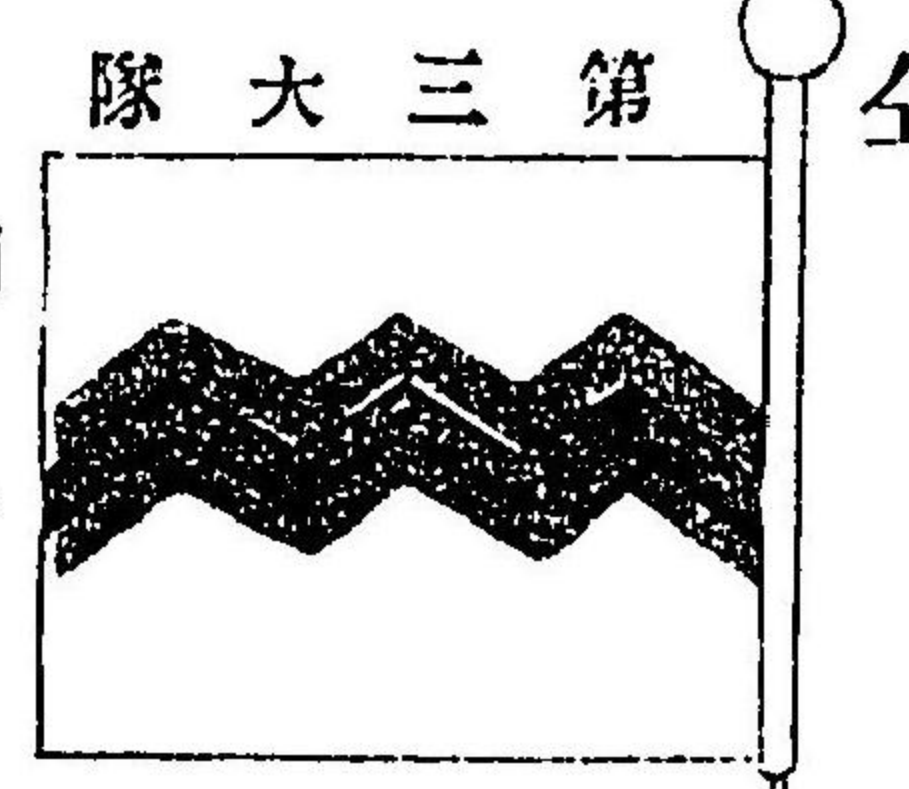
壹尺



同寸



同寸



同寸



同寸

○利息制限法

○明治十年九月十一日第六十六號布告

利息制限法左之通相定候條此旨布告候事

第一條 凡ソ金銀貸借上ノ利息ヲ分テ契約上ノ利息ト法律上ノ利息トス

第二條 契約上ノ利息トハ人民相互ノ契約ヲ以テ定メ得ヘキ所ノ利息ニシテ元金

百圓以下ハ一ケ年ニ付百分ノ二十二<sup>割</sup>百圓以上千圓以下百分ノ十五<sup>割</sup>千圓以上

百分ノ十二<sup>割</sup>以下トス若シ此限ヲ超過スル分ハ裁判上無効ノモノトシ各制限

ニマテ引直サシムヘシ

第二條 法律上ノ利息トハ人民相互ニ契約ヲ以テ利息ノ高ヲ定メサルモ裁判所ヨ

リ言渡ス所ノ者ニシテ元金ノ多少ニ不拘百分ノ六<sup>分</sup>トス

第四條 第二條ニ依リ定限利息ノ外總テ人民相互ノ契約ヲ以テ禮金棒利等ノ各目

ヲ用ル者アルモ總テ裁判上無効ノ者トス

第五條 返還期限ヲ違フルモハ負債主ヨリ債主ニ對シ若干ノ償金罰金違約金科料

等ヲ差出スヘキヲ約定スルコトアルモ概シテ損害ノ補償ト看做シ裁判官ニ於

テ該債主ノ事實受ケタル損害ノ補償ニ不當ナリト思量スルモハ之レニ相當ノ減

少ヲ爲スヲ得

○舊琉球藩負債償還并貸附金穀取立方

○明治十三年三月十一日第七號布告

舊琉球藩負債償還并貸付金穀取立方左ノ通被相定候條此旨布告候事

但舊同藩へ調達金證文所持ノ者ハ來ル五月三十日ヲ限リ本證文へ元利勘定書相

添各其管廳ヲ經テ大藏省へ可申出<sup>既ニ大藏省へ申出有之分并天保</sup>右期限ヲ失シ

候分ハ一切採用不相成候事



負債償還方

第一項

弘化元甲辰年以降舊琉球藩へ借入金ハ公債ニ相立消却殘元利全額現金ヲ以テ一時償還ニ及フヘキ事

第二項

天保十四癸卯年以前ノ古借ハ公債ニ不相立候事

貸附取立方

第一項

舊琉球藩ヨリ貸付有之金穀并各種ノ不納物ハ舊同藩約定ノ通可取立事

第二項

天保十四癸卯年以前ノ貸付金穀并各種ノ不納物ハ取立ニ不及候事

○陸軍刑法

○明治十四年十二月廿八日第六十九號布告

陸軍刑法別冊ノ通改定シ明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

右奉 勅旨布告候事

陸軍刑法目錄

第一編 總則

第一章 法例

第二章 刑例

第三章 加減例

第四章 數罪俱發

第五章 數人共犯

第六章 未遂犯罪

第二編 重罪輕罪

リ

- 第一章 反亂
- 第二章 抗命
- 第三章 擅權
- 第四章 辱職
- 第五章 暴行
- 第六章 侮辱
- 第七章 違令
- 第八章 逃亡
- 第九章 詐偽

陸軍刑法

第一編 總則

第一章 法例

第一條 此刑法ニ於テ罰ス可キ罪別テ二種ト爲ス

十五年四號布告ヲ以テ新舊法比照方ヲ定ム

一 重罪

二 輕罪

第二條 此刑法ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニ及ホスヲ得ス

若シ所犯頒布以前ニ在テ未タ判決ヲ經サル者ハ新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從テ處斷ス

第三條 軍人ト稱スルハ將官及ヒ同等官上長官士官下士諸卒ヲ謂フ

第四條 軍屬ト稱スルハ陸軍出仕ノ文官其他總テ宣誓若クハ讀法ノ式ニ由リ陸軍ニ從事スル者ヲ謂フ

第五條 司令官ト稱スルハ一軍一團其他一部隊ト雖モ總テ其司令ニ任スル者ヲ謂フ

第六條 哨兵ト稱スルハ儀仗若クハ警戒ノ爲メ守地ニ在ル者ヲ謂フ

第七條 上官ト稱スルハ官等ノ上ナル者ヲ謂フ同等ト雖モ命令ヲ下ス可キ權ヲ有スル者其部下ニ於テハ上官ニ同シ上等卒及ヒ上等卒ノ職ヲ奉スル者其部下ニ於

リ

ル亦之ニ準ス

第八條 將校同等ノ軍人ハ總テ將校ニ同シ

第九條 軍屬及ヒ陸軍所屬ノ諸生徒ハ總テ軍人ニ同シ

第十條 親屬ト稱スルハ普通刑法第一百四條第一百五條ニ記載スル者ヲ謂フ

第十一條 豫備後備ノ軍籍ニ在ル者ハ召集中ノ外此刑法ニ依テ處斷スルヲ得ス  
但此刑法ニ特例アル者ハ此限ニ在ラス

第十二條 第八十條第八十一條第八十六條第八十七條第八十八條第八十九條第九

十條第一項第九十五條第一百十一條第一百十二條第一百十三條第一百四條第一百五條

第一百十六條ニ掲クル所ノ罪ヲ犯ス者ハ軍人ニ非スト雖モ此刑法ニ依テ處斷ス

第一百六條第一百七條第一百十七條第一百十八條第一百十九條第一百二十條ノ罪ヲ犯サシム  
ル者ハ軍人ニ非スト雖モ亦軍人ト同ク論ス

第十三條 敵前軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ在テ第五十三條第五十四條第五十六條

第五十七條第五十八條第五十九條第六十條第六十一條ニ掲クル所ノ罪ヲ犯ス者

ハ軍人ニ非スト雖モ此刑法ニ依テ處斷ス但其豫備若クハ陰謀ニ止マル者ハ第六  
十二條第六十二條ニ照シテ處斷ス

第十四條 此刑法ノ罪ヲ犯スニ因リ人ヲ殺傷スル者ハ普通刑法第三編第一章ニ照  
シ重キニ從テ處斷ス但此刑法ニ特例アル者ハ此限ニ在ラス

## 第二章 刑例

第十五條 刑ハ主刑及ヒ附加刑ト爲ス

主刑ハ之ヲ宣告ス

附加刑ハ此刑法ニ於テ其宣告スル者ト宣告セサル者トヲ定ム

第十六條 左ニ掲クル者ヲ以テ重罪ノ主刑ト爲ス

一 死刑

二 無期徒刑

三 有期徒刑

四 無期流刑

- 五 有期流刑
  - 六 重懲役
  - 七 輕懲役
  - 八 重禁獄
  - 九 輕禁獄
- 第十七條 左ニ掲クル者ヲ以テ輕罪ノ主刑ト爲ス
- 一 重禁錮
  - 二 輕禁錮
- 第十八條 左ニ掲クル者ヲ以テ附加刑ト爲ス
- 一 剝奪公權
  - 二 剝官
  - 三 停止公權
  - 四 禁治產

五 監視

六 沒收

- 第十九條 陸軍法衙ニ於テ死刑ニ處スル者ハ皆之ヲ銃殺ス
- 第二十條 死刑ハ陸軍卿ノ命令アルニ非サレハ之ヲ行フヲ得ス  
軍中若クハ合圍ノ地ニ於テ特權ヲ有スル者アル時ハ其命令ヲ以テ之ヲ行フヲ得
- 第二十一條 徒刑ハ無期有期ヲ分タス島地ニ發遣シ定役ニ服ス  
有期徒刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ス
- 第二十二條 流刑ハ無期有期ヲ分タス島地ノ獄ニ幽閉シ定役ニ服セス  
有期流刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ス
- 第二十三條 懲役ハ懲役場ニ入レ定役ニ服ス  
重懲役ハ九年以上十一年以下輕懲役ハ六年以上八年以下ト爲ス
- 第二十四條 禁獄ハ獄ニ入レ定役ニ服セス

重禁獄ハ九年以上十一年以下輕禁獄ハ六年以上八年以下ト爲ス

第二十五條 禁錮ハ禁錮場ニ入レ重禁錮ハ定役ニ服シ輕禁錮ハ定役ニ服セス

禁錮ハ重輕ヲ分タス十一日以上五年以下ト爲シ仍ホ各本條ニ於テ其長短ヲ區別ス

ス

第二十六條 普通刑法第十四條第十五條第十六條第十八條第十九條第二十一條第

二十二條第二十五條ニ記載スル所ノ主刑處分ノ例ハ此刑法ニ於テ之ヲ適用ス

第二十七條 陸軍法衙ニ於テ普通刑法ニ依リ罰金科料ニ處スル者限内納完セス禁

錮拘留ニ換フル時ハ更ニ裁判ヲ用ヒス理事ノ求メニ因リ裁判長之ヲ命ス

第二十八條 剝奪公權ハ普通刑法第三十一條ニ記載スル所ノ權ヲ剝奪ス

第二十九條 重罪ノ刑ニ處スル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス終身公權ヲ剝奪ス

第三十條 剝官ハ宣告シテ將校ノ官職ヲ褫奪ス

下士上等卒軍屬其他ノ官吏此刑法ノ罪ヲ犯シ將校ニ在テ剝官ヲ附加スル刑ニ該ル時ハ別ニ宣告ヲ用ヒス其官職ヲ失フ

十六年三十七號布  
告陸海軍法衙ニ於  
テ罰金科料換刑處  
分方參照

第三十一條 禁錮ニ處スル者ハ別ニ宣告ヲ用ヒス其刑期間公權ヲ行フヲ停止ス

第三十二條 普通刑法第三十四條第三十五條第三十六條第三十七條第三十八條第

三十九條第四十條第四十一條第四十三條第四十四條ニ記載スル所ノ附加刑處分

ノ例ハ此刑法ニ於テ之ヲ適用ス

第三十三條 下士上等卒ハ此刑法及ヒ普通刑法若クハ海軍刑法ニ依リ禁錮ニ處シ

官職ヲ失フト雖モ兵役ヲ免セス其失フ所ノ官職ハ主刑終ルノ日ヨリ六月ヲ經過

スルノ後行政ノ處分ヲ以テ之ヲ復スルヲ得

第三十四條 下士諸卒ハ此刑法及ヒ普通刑法海軍刑法ノ輕罪ヲ犯シ監視ニ付シ若

クハ主刑ヲ免シテ止タ監視ニ付ス可キ時ト雖モ監視ニ付セス

第三十五條 普通刑法第四十九條第五十條第五十一條第五十二條第五十三條第五

十四條第五十五條第五十六條第五十七條第五十八條第五十九條第六十條第六十

一條第六十二條第六十三條第六十四條第六十五條ニ記載スル所ノ刑期計算假出

獄期滿免除復權ノ例ハ此刑法ニ於テ之ヲ適用ス

リ

第三章 加減例

第三十六條 此刑法ニ於テ刑ヲ加重減輕ス可キ時ハ後ノ數條ニ掲クル所ノ例ニ照シテ加減ス但加ヘテ死刑ニ入ルヲ得ス

第二十七條 第八十七條第八十八條第八十九條第二百一一條ニ掲クル所ノ重罪ノ刑加減ス可キ時ハ左ノ等級ニ照シテ加減ス

- 一 死刑
- 二 無期徒刑
- 三 有期徒刑
- 四 重懲役
- 五 輕懲役

第三十八條 第二編第一章第二章第三章第四章第七章第八章及ヒ第七十七條第七十八條第七十九條第八十條第八十一條第八十二條第八十三條第八十六條ニ掲クル所ノ重罪ノ刑加減ス可キ時ハ左ノ等級ニ照シテ加減ス

一 死刑

二 無期徒刑

三 有期徒刑

四 重禁獄

五 輕禁獄

第二十九條 輕懲役ニ該ル者減輕ス可キ時ハ二年以上五年以下ノ重禁獄ニ處スルヲ以テ一等ト爲ス

輕禁獄ニ該ル者減輕ス可キ時ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處スルヲ以テ一等ト爲ス

第四十條 重罪ノ刑ヲ減輕シテ禁錮ニ處スル時將校ハ剝官ヲ附加ス

第四十一條 禁錮ニ該ル者加重ス可キ時ハ其刑期四分ノ一ヲ加フルヲ以テ一等ト爲ス其減輕ス可キ時亦四分ノ一ヲ減スルヲ以テ一等ト爲ス

禁錮ノ刑ハ加ヘテ重罪ニ入ルヲ得ス但加ヘテ七年ニ至リ減シテ十日以下ニ降

リ

スヲ得其減シ盡ス時ト雖モ仍ホ一日以上十日以下ノ禁錮ニ處ス  
若シ減輕シテ十日以下ニ處スル時ハ重禁錮ト雖モ定役ニ服セス

第四十二條 禁錮ヲ加減スルニ因テ其期限ニ零數ヲ生シ一日ニ滿サル者ハ之ヲ除  
棄ス

第四十三條 剝官ハ其主刑ヲ減輕スル時ト雖モ仍ホ之ヲ附加ス但十日以下ノ禁錮  
ニ處スル時ハ此限ニ在ラス

第四十四條 普通刑法第七十五條第七十六條第七十七條第七十八條第七十九條第  
八十條第八十一條第八十二條第八十五條第八十九條第九十條第九十一條第九十  
二條第九十四條第九十五條第九十七條第九十八條第九十九條ニ記載スル所ノ不  
論罪減輕再犯加重加減順序ノ例ハ此刑法ニ於テ之ヲ適用ス但此刑法ニ特例アル  
者ハ此限ニ在ラス

第四十五條 再犯加重ハ再ヒ此刑法ノ罪ヲ犯スニ非サレハ之ヲ論スルヲ得ス  
第四章 數罪俱發

第四十六條 二罪以上俱ニ發スル時若クハ一罪前ニ發シ已ニ判決ヲ經餘罪後ニ發  
スル時ハ普通刑法第百條第百一條第百二條第百三條ニ記載スル所ノ數罪俱發ノ  
例ヲ適用ス但此刑法剝官ヲ附加セサル禁錮ノ罪ト剝官ヲ附加スル禁錮及ヒ海軍  
刑法剝官ヲ附加スル禁錮若クハ普通刑法ノ禁錮ノ罪ト俱ニ發シ剝官ヲ附加セサ  
ル禁錮ニ處スル時ト雖モ將校ハ仍ホ剝官ヲ附加シ下士上等卒軍屬其他ノ官吏ハ  
別ニ宣告ヲ用ヒス其官職ヲ失フ

第五章 數人共犯

第四十七條 軍人二人以上共ニ此刑法ノ罪ヲ犯ス時ハ普通刑法第百四條第百五條  
第百六條第百七條第百八條第百九條第百十條ニ記載スル所ノ數人共犯ノ例ヲ適  
用ス但第六十七條第七十七條第七十八條第八十一條第八十三條第八十四條第八  
十五條第百十九條ニ掲グル所ノ罪ヲ論スル時從犯ハ首魁ニ非サル正犯ノ刑ニ一  
等ヲ減ス

第四十八條 軍人ト軍人ニ非サル者ト共犯ニ係ル時軍人ハ此刑法ニ依リ處斷スト

リ

雖モ軍人ニ非サル者ハ普通刑法ニ照シテ其罪ヲ論ス但第十二條第十三條ニ依リ此刑法ヲ以テ處斷ス可キ者ハ此限ニ在ラス

第六章 未遂犯罪

第四十九條 此刑法ノ罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ普通刑法第百十一條第百十二條第百十三條ニ記載スル所ノ未遂犯罪ノ例ヲ適用ス

第二編 重罪輕罪

第一章 反亂

第五十條 軍人黨ヲ結ヒ擅ニ兵器ヲ執リ反亂ヲ爲ス者首魁教唆者及ヒ群衆ノ指揮ヲ爲シ若クハ樞要ノ職務ニ從事スル者ハ死刑ニ處ス其指揮ヲ爲シ樞要ノ職務ニ從事スト雖モ情狀輕キ者ハ無期流刑ニ處ス

諸般ノ職務ヲ司リ若クハ兵器彈藥其他軍需ノ物品ヲ資給スル者ハ有期流刑ニ處シ其情狀輕キ者ハ重禁獄ニ處ス

附和シテ其事ニ服行スル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第五十一條 軍人反亂ヲ爲スヲ謀リ兵器彈藥其他軍需ノ物品ヲ劫掠スル者ハ前條ノ刑ニ同シ

第五十二條 軍人前二條ノ罪ヲ犯スニ因リ故ラニ鎮撫ノ官吏ヲ殺ス者ハ死刑ニ處ス

第五十三條 軍人敵ヲ利スル爲メ部下ノ兵隊若クハ軍事ニ關スル土地家屋船舶及ヒ兵器彈藥其他軍需ノ物品ヲ敵ニ付スル者ハ死刑ニ處ス

第五十四條 軍人敵ヲ利スル爲メ土地道路ノ要害險夷ヲ指示シ若クハ攻守ノ用ニ供ス可キ圖書及ヒ暗號記號ヲ開示シ其他軍機軍情ヲ漏洩スル者ハ死刑ニ處ス

第五十五條 軍人敵國ヲ受クルノ地ニ於テ其司令官ヲ要シ敵ニ降ラシメントシテ黨ヲ爲ス者ハ死刑ニ處ス

第五十六條 軍人敵前ニ在テ隊兵ノ潰走ヲ誘起シ若クハ其連絡集合ヲ妨害スル者ハ死刑ニ處ス

第五十七條 軍人敵ノ爲メニ兵ヲ募ル者ハ死刑ニ處ス



第五十八條 軍人敵ヲ利スル爲メ軍事ニ關スル家屋船舶及ヒ壘柵兵器彈藥其他軍需ノ物品若クハ戰鬪ノ用ニ供ス可キ道路橋梁森林瀛車電線ヲ毀壞シ若クハ火ヲ放テ之ヲ燒燬スル者ハ死刑ニ處ス

第五十九條 軍人敵ヲ利スル爲メ兵器彈藥其他軍需物品ノ缺乏ヲ致ス者ハ死刑ニ處ス

第六十條 軍人敵ヲ利スル爲メ叫呼喧噪シ若クハ造言飛語ヲ爲ス者ハ死刑ニ處ス  
第六十一條 軍人敵ノ間諜ヲ誘導助成隱匿シ若クハ敵ヲ利スル爲メ俘虜降人ヲ逃走セシメ及ヒ劫奪スル者ハ死刑ニ處ス

敵ヲ利スル爲メ音信ヲ敵ニ通スル者亦同シ

第六十二條 軍人前數條ニ掲クル所ノ罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者及ヒ其豫備ヲ爲ス者ハ各本條ニ照シ一等ヲ減ス

其陰謀ヲ爲シ未タ豫備ニ至ラサル者ハ二等ヲ減ス

第六十三條 軍人前數條ニ掲クル所ノ罪ヲ犯サントシテ其豫備若クハ陰謀ヲ爲ス

ト雖モ未タ其事ヲ行ハサル前ニ於テ自首スル者ハ本刑ヲ免シ六月以上三年以下ノ監視ニ付シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第六十四條 軍人情ヲ知テ前數條ニ掲クル所ノ犯人集會ノ爲メ家屋ヲ貸ス者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第六十五條 軍人此章ノ罪ヲ犯シ輕罪ノ刑ニ處スル者ハ六月以上二年以下ノ監視ニ付シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第二章 抗命

第六十六條 軍人命令ヲ下ス可キ權アル者ノ命令ニ抗シ若クハ服從セサル者敵前ニ在テハ死刑ニ處ス

軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ在テハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

其他ノ地ニ在テハ二年以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第六十七條 軍人二人以上共ニ前條ノ罪ヲ犯ス者敵前ニ在テハ皆死刑ニ處ス

リ

軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ在テハ首魁ハ重禁獄ニ處シ其他ノ犯人ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

其他ノ地ニ在テハ首魁ハ輕禁獄ニ處シ其他ノ犯人ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第六十八條 軍人暴行ヲ爲スニ當リ上官之ヲ制止シ其命ニ從ハサル者ハ二月以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第三章 擅權

第六十九條 司令官講和ノ告示若クハ停戰ノ命令ヲ受ケ仍ホ戰鬪ノ所爲ヲ止メサル者ハ死刑ニ處ス

第七十條 司令官命令ニ背キ若クハ權外ノ事ニ於テ已ムコトヲ得サルノ理由ナクシテ擅ニ兵隊ヲ進退スル者ハ死刑ニ處ス

第七十一條 司令官擅ニ人ヲ募リ部伍ニ充ル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ剝官ヲ附加ス

第四章 辱職

第七十二條 要塞司令官若クハ要塞特命司令官其盡ス可キ所ヲ盡サスシテ敵ニ降リ若クハ所轄ノ地ヲ敵ニ付スル者ハ死刑ニ處ス  
堡砦ノ地ニ於テ其司令官之ヲ犯ス者亦同シ

第七十三條 司令官野戰ノ時ニ在テ隊兵ヲ率ヒ敵ニ降ル者ハ一月以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ剝官ヲ附加ス

若シ其盡ス可キ所ヲ盡サスシテ降ル者ハ死刑ニ處ス

第七十四條 將校敵前ニ在テ盡ス可キ所ヲ盡サスシテ遁走スル者ハ死刑ニ處ス

第七十五條 將校其部下ノ兵徒黨犯罪ノ事アルニ當リ鎮定ノ方ヲ盡サ、ル者ハ三月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ剝官ヲ附加ス

第五章 暴行

第七十六條 軍人上官ニ對シ暴行ヲ爲ス者ハ一年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

リ

第七十七條 軍人二人以上共ニ前條ノ罪ヲ犯ス者首魁ハ重禁獄ニ處シ其他ノ犯人

ハ一年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第七十八條 軍人上官ノ公務ヲ行フニ當リ前二條ノ罪ヲ犯ス者ハ各一等ヲ加フ

第七十九條 軍人上官ニ對シ兵器若クハ兇器ヲ用ヒ暴行ヲ爲ス者ハ死刑ニ處ス

上官ノ軍務ヲ行フニ當リ之ニ對シ暴行ヲ爲ス者亦同シ

第八十條 軍人哨兵ニ對シ暴行ヲ爲ス者ハ四月以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校

ハ剝官ヲ附加ス

其兵器若クハ兇器ヲ用フル者ハ有期流刑ニ處ス

第八十一條 軍人二人以上共ニ前條ノ罪ヲ犯ス者首魁ハ重禁獄ニ處シ其他ノ犯人

ハ四月以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

其兵器若クハ兇器ヲ用フル者首魁ハ死刑ニ處シ其他ノ犯人ハ有期流刑ニ處ス

首魁自ラ兵器若クハ兇器ヲ用ヒスト雖モ指示シテ之ヲ用ヒシムル時ハ死刑ニ處

ス

第八十二條 軍人同等若クハ下等ノ者軍務ヲ行フニ當リ之ニ對シ暴行ヲ爲ス者ハ

三月以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

其兵器若クハ兇器ヲ用フル者ハ重禁獄ニ處ス

第八十三條 軍人二人以上共ニ前條ノ罪ヲ犯ス者首魁ハ輕禁獄ニ處シ其他ノ犯人

ハ三月以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

其兵器若クハ兇器ヲ用フル者首魁ハ有期流刑ニ處シ其他ノ犯人ハ重禁獄ニ處ス

首魁自ラ兵器若クハ兇器ヲ用ヒスト雖モ指示シテ之ヲ用ヒシムル時ハ有期流刑

ニ處ス

第八十四條 軍人多衆相集リ暴行ヲ爲ス者首魁ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處

シ其他ノ犯人ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第八十五條 軍人多衆結合シテ相闘毆スル者首魁ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ

處シ其他ノ犯人ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第八十六條 軍人俘虜降人ヲ劫奪シ若クハ暴行脅迫ヲ以テ其逃走ヲ助クル者ハ重

リ

禁獄ニ處ス

第八十七條 軍人戰場ニ於テ創傷人ノ衣服財物ヲ褫奪スル者ハ重懲役ニ處シ因テ殺傷スル者ハ死刑ニ處ス

第八十八條 軍人軍用ノ工廠船舶及ヒ軍需ノ物品ヲ貯藏スル倉庫若クハ現ニ戰鬪ノ用ニ供スル家屋壘柵橋梁瀛車電線ヲ毀壞スル者ハ重懲役ニ處シ火ヲ放テ之ヲ燒燬スル者ハ死刑ニ處ス

第八十九條 軍人敵前軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ於テ火ヲ放チ露積スル所ノ兵器彈藥軍糧陣營具被服ヲ燒燬スル者ハ死刑ニ處ス

其他ノ地ニ在テハ重懲役ニ處ス

第九十條 軍人兵器彈藥軍糧陣營具被服ヲ棄毀シ若クハ軍用ノ馬匹ヲ殺傷スル者ハ一月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

其官給ニ係ル物品ヲ棄毀スル者ハ十一日以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第九十一條 哨兵衛兵妄リニ銃砲ヲ發スル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス  
第九十二條 軍人操練ノ際若クハ禮砲號砲ヲ發スル時瓦石等ヲ裝填シテ發射スル者ハ一月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

此條ノ罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第六章 侮辱

第九十三條 軍人上官ヲ罵詈若クハ侮慢スル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

上官ノ公務ヲ行フ時ニ於テスル者ハ一等ヲ加フ

第九十四條 軍人文書圖畫ヲ流布シ若クハ多衆ヲ會シ演說ヲ爲シテ上官ヲ誹毀スル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第九十五條 軍人哨兵ヲ罵詈若クハ侮慢スル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第九十六條 軍人同等若クハ下等ノ者軍務ヲ行フニ當リ之ニ對シ罵詈若クハ侮慢

リ

スル者ハ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第七章 違令

第九十七條 軍人哨兵ニ對シ哨令ヲ犯ス者敵前ニ在テハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ在テハ一年以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

其他ノ地ニ在テハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第九十八條 軍人擅ニ哨令ヲ變更シ若クハ之ニ違フ者敵前ニ在テハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ在テハ一年以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

其他ノ地ニ在テハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第九十九條 哨兵擅ニ其守地ヲ離ル、者敵前ニ在テハ死刑ニ處ス

軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ在テハ一年以上三年以下ノ輕禁錮ニ處ス

其他ノ地ニ在テハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第百條 哨兵睡眠若クハ酩酊シテ事ヲ省セサル者敵前ニ在テハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處ス

軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ在テハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

其他ノ地ニ在テハ十一日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處ス

第百一條 軍人現ニ軍務ニ服シ擅ニ其地ヲ離ル、者敵前ニ在テハ死刑ニ處ス

軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ在テハ六月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

其他ノ地ニ在テハ一月以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

長官之ヲ犯ス時ハ各一等ヲ加フ

第百二條 軍人戰時軍中若クハ合圍ノ地ニ在テ急呼ノ號報アル時故ナク來會セサル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第二百二條 軍人戰時軍中若クハ合圍ノ地ニ在テ兵器彈藥軍糧ノ運搬支給ヲ掌リ故

ナク其缺乏ヲ致ス者ハ三月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第二百四條 司令官命令ニ從フヲ得サル時部署若クハ其命セラル、所ノ事ヲ變更

シ直チニ之ヲ申報セサル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

其事變ニ因リ暗號記號ヲ改メ直チニ之ヲ申報セサル者亦同シ

第二百五條 軍人職務ニ因リ與リ知ル所ノ軍事ノ機密ヲ漏洩スル者ハ三月以上三年

以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第二百六條 軍人允許ヲ得テ他方ニ赴キ故ナク歸著ノ期ニ後レ十日ヲ過ル者ハ二月

以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

戰時ニ在テ五日ヲ過ル者ハ六月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第二百七條 徵兵故ナク徵集ノ期ニ後レ十日ヲ過クル者ハ十一日以上六月以下ノ輕

禁錮ニ處シ戰時ニ在テ五日ヲ過クル者ハ一年以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者故ナク召集ノ期ニ後レ十日ヲ過クル者ハ一

月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ戰時ニ在テ五日ヲ過クル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第二百八條 軍人前條ノ罪ヲ犯サシムル者ハ數人共犯ノ例ニ照シテ處斷ス

第二百九條 軍人反亂ノ罪ヲ犯サントスル者アルヲ知テ申告セサル者ハ一月以上二

年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第三百十條 軍人政治ニ關スル事項ヲ上書建白シ又ハ講談論說シ若クハ文書ヲ以テ

之ヲ廣告スル者ハ一月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第三百十一條 軍人敵前軍中若クハ臨戰合圍ノ地ニ在テ造言飛語ヲ爲ス者ハ一月以

上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第三百十二條 軍人俘虜降人ヲ逃走セシムル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ

將校ハ剝官ヲ附加ス

看守護送者之ヲ犯ス時ハ重禁獄ニ處ス

第三百十三條 軍人俘虜降人ヲ逃走セシムル爲メ兵器其他ノ器具ヲ給與シ若クハ逃

リ

走ノ方法ヲ指示スル者ハ四月以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス  
看守護送者之ヲ犯ス時ハ輕禁獄ニ處ス

第一百十四條 軍人前二條ニ掲クル所ノ輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂  
犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第一百十五條 軍人俘虜降人ヲ看守若クハ護送シ懈怠ニ因リ其逃走ヲ致ス者ハ十一  
日以上一月以下ノ輕禁錮ニ處ス

第一百十六條 軍人逃走ノ俘虜降人タルヲ知テ之ヲ藏匿シ若クハ隱避セシムル者ハ  
一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス但犯人ノ親屬ニ係ル時ハ  
其罪ヲ論セス

第八章 逃亡

第一百十七條 軍人擅ニ職役若クハ屯營本隊ヲ離レ六日ヲ過クル者ハ逃亡ト爲シ二  
月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス新兵入營三月ニ滿サル者ハ  
一等ヲ減ス

戰時軍中若クハ合圍ノ地ニ在テ三日ヲ過クル者ハ逃亡ト爲シ六月以上二年以下  
ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第一百十八條 軍人敵前ニ在テ擅ニ職役若クハ屯營本隊ヲ離ル、者ハ逃亡ト爲シ輕  
禁獄ニ處ス

第一百十九條 軍人四人以上共ニ逃亡ノ罪ヲ犯ス者首魁ハ二年以上五年以下ノ輕禁  
錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス戰時軍中若クハ合圍ノ地ニ在テハ輕禁獄ニ處シ敵  
前ニ在テハ死刑ニ處ス

其他ノ犯人ハ第一百十七條第一百十八條ニ照シテ處斷ス

第一百二十條 軍人敵ニ奔ル者ハ死刑ニ處ス

第九章 詐僞

第一百二十一條 軍人糧食ノ支給ヲ掌リ健康ヲ害ス可キ食料飲料ヲ配付スル者ハ輕  
懲役ニ處シ因テ死ニ致ス者ハ有期徒刑ニ處ス

第一百二十二條 軍人斥候偵察ノ命ヲ受ケ詐僞ノ報告ヲ爲シ若クハ傳令使命令ヲ詐

リ

リ傳フル者ハ五月以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第二百二十三條 陸軍醫官其職務ヲ以テ疾病傷痍及ヒ身體強弱ノ偽證ヲ爲ス者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ剝官ヲ附加ス  
其囑託ヲ爲シタル軍人亦同シ

第二百二十四條 軍人疾病ヲ作爲シ身體ヲ毀傷シ兵役ヲ免ル、トヲ圖ル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者戰時ニ於テ前項ノ所爲ヲ以テ召集ヲ免ル、トヲ圖ル者亦同シ

○明治十五年一月廿六日第四號布告

陸軍刑法海軍刑法第二條第二項ニ依リ新舊法ヲ比照スルニハ左ノ規則ニ從フヘシ

第一條 新法ト舊法トノ刑ヲ比照スルニハ別表ニ從フ

第二條 舊法ノ刑期新法主刑ノ刑期內ニアル時ハ新法ニ從フ但舊法ノ刑期ニ過クルコトヲ得ス  
舊法ニ於テ百日ニ該ル者新法ニ照シ二月以上四年以下ノ禁錮ニ該ル時ハ新法ニ從ヒ二月以上百日以下ニ處スルノ類

若シ舊法ノ刑期新法主刑ノ短期ニ等シクシテ舊法ニ定役ナク新法ニ定役アル時ハ舊法ニ從フ  
舊法ニ於テ杖五十錮四十二日若クハ閉門半年後停官ル時ハ舊法ニ從ヒ杖五十錮四十二日若クハ閉門半年後停官ニ處スルノ類

第三條 舊法新法ノ刑共ニ短期長期アル者ハ其短期ノ短キ者ニ從フ但其長期ノ短キ者ニ過クルコトヲ得ス  
舊法ニ於テ一年以上三年以下ニ該ル者新法ニ照シ三月以上四年以下ノ禁錮ニ該ル時ハ新法ニ從ヒ三月以上

若シ舊法新法ノ刑其短期等シクシテ舊法ニ定役ナク新法ニ定役アル時ハ舊法ニ從フ

第四條 新舊ノ法ヲ比照シ新法ニ從ヒ重罪ノ刑ニ處スル時ハ普通刑法第三十一條第二項第三項位記費號ヲ除ク第四項第五項及ヒ第四十三條ヲ除クノ外附



加刑ヲ科セス

第五條 新舊ノ法ヲ比照シ新法ニ從ヒ輕罪ノ刑ニ處スル時監視ハ之ヲ附加  
セス

第六條 新法ト舊法トヲ比照スルニハ各其本法ニ照シ加減シタル者ヲ以テ  
本刑トナス

右奉 勅旨布告候事

別表

刑期	將校	刑名	下士	刑名	卒夫	刑名
一年	閉門半年後回籍	徒	一年	同	同	同
二年	奪官	徒	二年	同	同	同
三年	閉門半年後奪官	徒	三年	同	同	同
十年	流刑	同	同	同	同	同

○明治十五年四月八日第二十號布告

百	九	八	七	六	五	四	三	二	一
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
回	閉門半年後停官	閉門四十二日後停官	降			閉門九十八日	閉門四十九日	閉門三十五日	謹慎三週
籍	錮三十五日後黜等	錮三十五日後降等一年半	官降等一年半	降等一年	降等半年	錮四十二日	錮三十五日	錮二十八日	謹慎二週
戒	杖五十錮四十二日	杖四十錮三十五日	杖三十錮二十八日	答三十錮二十八日	答二十錮二十一日	錮四十四日	錮三十五日	錮二十八日	同
役	同	同	同	同	同	同	同	同	同

舊軍律及七普通刑法共ニ罪名アリテ所犯刑法施行以前ニ係ル者ハ本年一月第四號布告ノ例ニ準シ新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從テ處斷スヘシ

但罰金科料ニ該ル者ハ明治十四年<sup>十二月</sup>第八十一號布告ニ依ルヘシ

右奉 勅旨布告候事

○明治十六年十一月十日第三十七號布告

陸海軍法衙ニ於テ罰金科料ニ處スル時ハ直ニ輕禁錮拘留ニ換フルコトヲ得

右奉 勅旨布告候事

○陸軍治罪法

○明治十六年八月四日第貳拾四號布告

陸軍治罪法別冊ノ通制定シ明治十六年八月十五日ヨリ之ヲ施行ス

右奉 勅旨布告候事

別冊

陸軍治罪法

陸軍治罪法目錄

- 第一章 總則
- 第二章 軍法會議ノ構成
- 第三章 軍法會議ノ權限
- 第四章 陸軍檢察
- 第五章 審問
- 第六章 判決

十八年十二月號布告  
ヲ以テ司法海軍  
治罪法中ニ定  
メ本法中ニ  
モノ當分施行  
スルモ  
セス

陸軍治罪法

第一章 總則

第一條 陸軍軍人ノ犯シタル重罪輕罪ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

軍法會議ハ刑事附帶ノ民事ヲ受理セス但官物ノ損害ニ係ルノ賠償ハ此限ニ在ラズ

第二條 軍法會議ハ傍聽ヲ許サス但其宣告ヲ爲ス時ハ軍人ニ限り之ヲ許ス

第三條 軍人ト稱スルハ陸軍刑法第三條第九條ニ掲クル者ヲ謂フ

第四條 司令官ト稱スルハ軍團長師團長旅團長軍管司令官營所司令官及ヒ合圍ノ地ノ司令官ヲ謂フ

第五條 普通治罪法第九條第十一條第十三條第十四條第十八條第百條第百一條ノ規則ハ此治罪法ニ於テモ之ヲ適用ス

第六條 歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者ハ軍法會議ニ於テ審判ス可キ時ノ外

軍人ノ例ニ依ルコトヲ得ス

第二章 軍法會議ノ構成

第七條 軍法會議ハ各軍管ニ一箇若クハ數箇ヲ設ク

軍中ニ於テハ軍團師團旅團ニ軍法會議ヲ設ケ合圍ノ地ニモ亦軍法會議ヲ設ク

第八條 軍法會議ニハ判士長判士理事理事補審事審事補錄事ヲ置ク

第九條 軍法會議ハ佐官一名ヲ判士長ト爲シ尉官三名理事理事補ノ内一名ヲ以テ判士トス但被告人被告人准士官以上及ヒ同等以上ノ軍人ナル時ハ左ノ表ニ照シテ判士長判士ヲ更フ

判士長	判士	被告人
佐官 一名	尉官 一名	陸軍少尉 准士官及ヒ
佐官 一名	中尉 一名 大尉 一名 少尉 一名	陸軍中尉 及ヒ
中佐 一名	大尉 一名 少尉 一名	陸軍大尉 及ヒ

十九年六月號布告ノ以テ審事補ノ五字ヲ刪ル  
十九年六月號布告ノ以テ本條ヲ改正ス

大佐 一名	少將 一名	中將 一名	中將 一名	大將 一名	大將 一名
中少理 佐事佐	中大理 佐事佐	少大聖 將事將	中少理 將事將	中大理 將事將	中大理 將事將
一名 一名	一名 一名	一名 一名	一名 一名	一名 一名	一名 一名
陸海 軍少 佐及 軍屬	陸海 軍中 佐及 軍屬	陸海 軍大 佐及 軍屬	陸海 軍少 將及 軍屬	陸海 軍中 將及 軍屬	陸海 軍大 將及 軍屬

第十條 將官ヲ以テ判士長判士ト爲ス時ハ陸軍卿ノ奏請ニ依リ上裁ヲ以テ之ヲ命  
ス  
佐官ヲ以テ判士長判士ト爲ス時ハ陸軍卿之ヲ命ス尉官ヲ以テ判士ト爲ス時モ亦  
同シ

第十一條 軍團長及ヒ獨立師團長ハ部下ノ將校ニ其軍法會議ノ判士長判士ヲ命ス

十九年六月發布  
以テ本條中審事ノ  
ニ字ヲ刪ル

ルコトヲ得又理事審事缺員スル時ハ部下ノ將校ニ命シテ其職務ヲ行ハシメ録事  
缺員スル時ハ下士ニ命シテ其職務ヲ行ハシムルコトヲ得  
臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其司令官部下ノ將校若クハ其地ニ在ル將校中ヨリ  
撰ミ專任判士ヲ置キ被告人ノ官等ニ拘ハラズ之ヲ審判セシム但將校缺乏ノ場合  
ニ於テハ他ノ官吏ヲ以テ之ヲ補充スルコトヲ得  
第十二條 軍管軍法會議ニ於テ判士長判士ニ充ツ可キ將校缺員スル時ハ軍管司令  
官ノ上申ニ依リ陸軍卿他ノ將校ヨリ之ヲ命シ若クハ被告人ヲ他ノ軍法會議ニ移  
シテ其審判ヲ爲サシム  
第三章 軍法會議ノ權限  
第十三條 軍法會議ハ其軍管若クハ師管ノ所管地方ヲ以テ管轄ト爲ス  
第十四條 軍人管轄地外ニ於テ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ其地ノ軍法會議ニ於テ之  
ヲ審判スルコトヲ得  
第十五條 軍人數箇ノ軍法會議ノ管轄地内ニ於テ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ被告人

ヲ逮捕シタル地ノ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

第十六條 軍團師團旅團軍法會議ハ其團所屬軍人ノ犯シタル重罪輕罪ヲ審判ス

第十七條 俘虜降人ノ犯シタル重罪輕罪ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

第十八條 軍人任官若クハ就役ノ前罪ヲ犯シ在官現役中發覺スル者ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス其在官現役中罪ヲ犯シ免官若クハ免役ノ後發覺スル者ハ司法裁判ニ付ス

歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者召集中罪ヲ犯シ若クハ舊罪發覺スル者ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス其召集中ノ犯罪解散ノ後發覺スル者ハ司法裁判ニ付ス

第十九條 軍人二人以上共ニ重罪輕罪ヲ犯シ各其管轄ヲ異ニスル時ハ先キニ審問ニ着手シタル軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス海軍軍人軍屬ト共犯ニ係ル時モ亦同シ

第二十條 軍人ト軍人ニ非サル者ト共ニ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

第二十一條 陸軍刑法ノ罪ヲ犯シタル者ハ軍人ニ非スト雖モ軍法會議ニ於テ之ヲ

十八年十二月二十日  
ヲ以テ便宜法ヲ定  
メ之ニテ廢止スルハ  
條中及第二十條ハ  
當分施行セズ

審判ス餘罪俱ニ發シタル者モ亦同シ

第二十二條 軍法會議ハ重罪輕罪ト俱ニ發シタル違警罪モ亦之ヲ審判ス

第二十三條 軍中若クハ合圍ノ地ノ軍法會議ヲ廢スルニ當リ既ニ審判ニ着手シタル者ハ陸軍卿ノ指定スル軍法會議若クハ其事件ヲ管理ス可キ官司ニ送致ス可シ

#### 第四章 陸軍檢察

第二十四條 陸軍檢察ハ陸軍ニ關スル犯罪ヲ搜查シ證據ヲ拾收ス

第二十五條 左ニ記列スル諸官ハ司令官ノ命令ヲ受ケテ陸軍檢察ノ職務ヲ行フ  
要塞副官若クハ衛戍副官

憲兵ノ將校下士

衛兵司令

砲兵工兵ノ監護

第二十六條 要塞司令官次官衛戍司令官諸隊長分遣隊長及ヒ各所管ノ長官ハ各其管スル所ノ事ニ就キ犯罪アルコトヲ知りタル時ハ自ラ陸軍檢察ノ處分ヲ爲シ若

クハ檢察官ニ委シテ其處分ヲ爲サシムルコトヲ得

審事其職務ヲ行フノ際現行犯アルコトヲ知りタル時ハ自ラ陸軍檢察ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第二十七條 何人ヲ論セス軍人ノ犯罪ニ因リ損害セラレタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ陸軍檢察官被告人所屬ノ長官隊長若クハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得

第二十八條 何人ヲ論セス軍人ノ犯罪アルコトヲ知りタル時ハ第二十七條ニ記載シタル官吏ニ告發スルコトヲ得

第二十九條 陸軍所屬ノ官吏職務ヲ行フニ因リ軍人ノ重罪輕罪ヲ犯ス者アルコトヲ知りタル時ハ其職務ヲ行フ地ノ陸軍檢察官若クハ被告人所屬ノ長官隊長ニ告發スヘシ

第三十條 軍人ノ重罪輕罪現行犯アル時ハ何人ヲ論セス直ニ之ヲ逮捕スルコトヲ得

其犯罪人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ陸軍檢察官司法警察官憲兵卒若クハ巡查ニ交付ス可シ

第三十一條 司法警察官憲兵卒及ヒ巡查現行犯ノ軍人ヲ逮捕シ若クハ其交付ヲ受ケタル時ハ速ニ之ヲ陸軍檢察官ニ引致スヘシ

第三十二條 司法警察官軍人ニ係ル告訴告發ヲ受ケタル時ハ速ニ陸軍檢察官若クハ被告人所屬ノ長官隊長ニ交付ス可シ

第三十三條 告訴人告發人ハ願下ヲ爲シ若クハ其陳述ヲ變更センコトヲ請求スルコトヲ得

第三十四條 陸軍檢察官軍人ノ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知りタル時ハ直ニ犯所ニ臨檢シ犯罪人ヲ逮捕シ訊問ヲ爲シ其調書ヲ作ル可シ

其引致ヲ受ケタル時モ亦同シ  
第三十五條 陸軍檢察官要塞司令官次官衛戍司令官諸隊長分遣隊長各所管ノ長官檢察ノ處分ヲ爲シタル時ハ調書ヲ作り證憑文書ヲ添ヘ之ヲ司令官ニ具申ス可シ

十九年六號布告  
以テ第一項ヲ改正  
ス

第五章 審問

七百二

第二十六條 司令官被告事件ノ具申ヲ受ケタル時ハ左ノ諸項ヲ除クノ外事件ノ難  
易ニ從ヒ理事ニ下付シ審事ヲシテ其審問ヲ爲サシメ若クハ直ニ其判決ニ付ス可  
シ

被告人上長官以上ナル時ハ軍管司令官ハ之ヲ陸軍卿ニ具申ス可シ

營所ニ於テ被告人士官以上ナル時ハ營所司令官之ヲ軍管司令官ニ具申ス可シ

第二十七條 陸軍卿審問ノ命令ヲ下ス時ハ其事件ヲ司令官ニ交付シ司令官ハ之ヲ  
理事ニ下付ス可シ

第二十八條 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其地ノ司令官被告人ノ官等ニ拘ハラヌ

直ニ其審問ノ命令ヲ下スコトヲ得

第二十九條 審事審問ヲ爲ス時ハ先ツ召喚狀ヲ發ス其被告人出廷シタル時ハ即日

之ヲ訊問ス可シ

第四十條 審事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサル時ハ勾引狀ヲ發ス

十九年六號布告  
以テ本條中審事ヲ  
理事ト改ム

全上

全上

ルコトヲ得

第四十一條 審事ハ重罪被告人ニ對シ又ハ其他ノ被告人罪證ヲ埋滅シ若クハ逃走  
ノ恐アル時若クハ未遂罪脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂クルノ恐アル時ハ直ニ勾  
引狀ヲ發ス可シ

十九年六號布告  
以テ本條中審事ヲ  
理事ト改ム

第四十二條 審事ハ召喚狀若クハ勾引狀ヲ受ク可キ被告人遠隔ノ地ニ在ル時ハ其  
地ノ陸軍檢察官若クハ審事若クハ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

全上

第四十三條 審事ハ召喚狀若クハ勾引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事故ア  
リテ令狀ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ其所在ニ就テ之ヲ訊問スルコ  
トヲ得若シ被告人遠隔ノ地ニ在ル時ハ其地ノ審事若クハ司法警察官ニ其處分ヲ  
囑託スルコトヲ得

全上

第四十四條 審事ハ被告人ノ所在ヲ覺知スルコト能ハサル時ハ理事ヲ經テ之ヲ司  
令官ニ具申ス可シ

司令官ハ各軍管司令官營所司令官及ヒ各控訴裁判所ノ檢事長ニ人相書ヲ送り其

十九年六號布告  
以テ本條中審事ヲ  
理事ト改ム且一五字  
ヲ刪ル

リ

七百三

逮捕ヲ求ム可シ

第四十五條 審事ハ被告人禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト認メタル時ハ收禁狀ヲ發スルコトヲ得

收禁狀ヲ發シタル後若シ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非ス又其收禁ヲ要セサル者ト認メタル時ハ收禁狀ヲ解ク可シ

第四十六條 審事ハ事實審明ノ爲メ臨檢家宅搜索物件押收ノ處分ヲ爲スコトヲ得其處分ヲ爲ス時ハ錄事之ニ會同シ調書ヲ作ル可シ

若シ其場所遠隔ノ地ニ在ル時ハ其他ノ審事若クハ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十七條 審事ハ事實審明ノ爲メ驛遞電信鐵道ノ官署及ヒ諸會社ニ事由ヲ通知シテ被告人ニ關係アル往復文書電報及ヒ物件ヲ收受開披スルコトヲ得若シ其場所遠隔ノ地ニ在ル時ハ第四十六條第二項ノ例ニ依ル

第四十八條 審事ハ證人及ヒ通事ヲ呼出スコトヲ得

十九年六號布告ヲ以テ本條中審事ヲ改ム

全上

全上

全上

證人皇族若クハ勅任官ナル時ハ審事其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ  
證人疾病其他正當ノ事故アリテ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ審事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ  
證人若シ遠隔ノ地ニ在スル時ハ其地ノ審事若クハ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十九條 審事ハ被告人及ヒ證人ノ訊問ヲ爲ス時ハ錄事之ニ會同シ調書ヲ作り訊問及ヒ供述ヲ錄取シ被告人若クハ證人ニ讀示セシメ其陳述シタル所ニ違ハサルヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ記ス可シ  
被告人及ヒ證人ハ其陳述ヲ變更増減センコトヲ請求スルコトヲ得

第五十條 審事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ要スル時ハ學術又ハ職業ニ因リ鑑定スルコトヲ得可キ者ニ命シテ其鑑定ヲ爲サシム可シ

十九年六號布告ヲ以テ本條中審事ヲ改ム

全上

リ



鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其方法結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記シ若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記シ署名捺印ス可シ

第五十一條 審事ハ證人鑑定人通事正當ノ事故ヲ證明セスシテ其呼出ニ應セサル時ハ二圓以上拾圓以下ノ罰金ヲ科ス可シ但審事ハ其證人ニ對シ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

證人陳述ヲ肯セサル時ハ普通刑法第百八十條ニ依リ又鑑定人鑑定ヲ肯セサル時ハ普通刑法第百七十九條ニ依リ罰金ヲ科ス可シ

第五十二條 證人鑑定人通事ニ罰金ヲ科スル時ハ普通刑法第二十七條ニ從フ但罰金ヲ禁錮ニ換フル時亦審事之ヲ命ス

第五十三條 審事審問ニ於テ餘罪ヲ覺擧シタル時ハ直ニ本件ト共ニ審問ス可シ共犯ヲ覺擧シタル時ハ理事ヲ經テ之ヲ司令官ニ具申ス可シ

第五十四條 審事審問ヲ終リタル時ハ其報告書ヲ作り意見書ヲ添ヘ訴訟文書ト共ニ之ヲ理事ニ交付シ理事ハ意見書ヲ添ヘ之ヲ司令官ニ上申スヘシ

十九年六號布告ヲ以テ本條改正

全上

第六章 判決

第五十五條 司令官ハ軍法會議ヲ開ク可キ命令書ヲ判士長ニ下シ其謄本ヲ訴訟文書ト共ニ理事ニ下付シ理事ハ之ヲ判士長ニ交付シ會議ノ日時ヲ判士ニ通報ス可シ

第五十六條 軍法會議ヲ開ク時ハ判士長判士錄事各其席ニ著キタル後判士長被告人ヲ出廷セシム

判士長ハ先ツ被告人ノ官位勳等隊號職名氏名族籍年齢ヲ問ヒ訊問ヲ爲スノ旨ヲ告示シ錄事ヲシテ審事ノ報告書ヲ朗讀セシム

其朗讀終リタルノ後判士長ハ被告事件ヲ訊問シ若クハ判士ニ命シテ其訊問ヲ爲サシム

第五十七條 判士長ハ開廷ヨリ判決ニ至ルマテ令狀ヲ發スルコトヲ得判士長ハ法廷ニ於テ警戒ノ爲メ其處置ヲ爲スコトヲ得

法廷ニ於テ罪ヲ犯ス者アル時ハ判士長其處分ヲ爲シ若クハ判士ニ命シテ其處分

十九年六號布告ヲ以テ本條改正

十九年六號布告ヲ以テ本條改正

リ

ヲ爲サシム可シ

法廷ニ於テ證人鑑定人及ヒ通事ヲ要スル時ハ第五章ノ例ニ依ル

第五十八條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人出廷ノ命ニ應セサル時ハ之ヲ引致ス可シ但疾病若クハ正當ノ事故ニ因リ出廷スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ判士長ハ其審判ヲ延期スルコトヲ得

第五十九條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人逃走シテ審判ノ日時ニ出廷セス若クハ逃走シテ召喚狀ヲ送達スルコトヲ得サル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可シ

第六十條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人召喚狀ヲ受ケ審判ノ日時ニ出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲ス可シ

第六十一條 數人共犯ノ審判ヲ爲ス時ハ被告人中闕席シタル者アリト雖モ出廷シタル者ニ對シ審判ヲ爲ス可シ

第六十二條 判士長ハ被告人ヲ訊問シタル後證人ヲ訊問シ若クハ判士ニ命シテ訊問セシム可シ

十九年六號布告ヲ改正ス

證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト認メタル時ハ判士長ハ收禁狀ヲ發シ更ニ訊問ヲ爲シ若クハ判士ニ命シテ訊問ヲ爲サシメ之ヲ司令官ニ具申ス可シ

其處分ヲ爲シタル時ハ判士長ハ本件ノ審判ヲ延期スルコトヲ得

第六十三條 法廷ニ於テ更ニ檢證ノ處分ヲ要スルコトアル時ハ判士長ハ其處分ヲ爲シ若クハ判士ニ命シテ其處分ヲ爲サシム可シ

法廷ニ於テ共犯ヲ覺擧シタル時ハ判士長ハ之ヲ司令官ニ具申ス可シ  
若シ餘罪ヲ覺擧シタル時ハ本件ト共ニ其審判ヲ爲ス可シ但判士長ハ之ヲ司令官ニ具申スヘシ

第六十四條 被告人及ヒ證人ノ訊問終リタル時ハ判士長ハ更ニ被告人ニ對シ他ニ陳述ス可キ事件ナキヤ否ヲ問ヒ訊問終リタルノ旨ヲ告ケ被告人ヲ退廷セシム可シ

第六十五條 判決書ハ判士事實ト法律トニ依リ左ノ條件ニ照シテ之ヲ作り判士長

十九年六號布告ヲ改正ス

リ

判士録事共ニ署名捺印シ判士長之ヲ理事ニ交付ス理事ハ訴訟文書ヲ添へ之ヲ司令官ニ上申ス可シ

一有罪ノ判決書ニハ犯罪ノ證據及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ記ス

二無罪ノ判決書ニハ被告事件罪ト成ラサルコト及ヒ其理由ヲ記シ犯罪ノ證據備ハラサル時ハ其旨ヲ記ス

三免訴ノ判決書ニハ公訴ノ期滿免除ト爲リタルコト大赦アリタルコト法律ニ於テ其罪ヲ全免スルコト及ヒ其理由ヲ記ス

四被告人ノ官位勳等隊號職名氏族籍年齡住所及ヒ軍法會議判決ノ年月日ヲ記ス

第六十六條 司令官ハ左ニ記列スルノ事件ハ陸軍卿ニ上申シテ命ヲ請ヒ其他ハ之ヲ專決ス但營所司令官ハ士官以上ノ犯罪ハ軍管司令官ニ上申ス可シ  
死刑  
上長官以上ノ重罪輕罪

士官ノ重罪

第六十七條 司令官其判決ヲ不適當ト思量スル時其專決ノ權アル事件ハ直ニ之ヲ再議セシムルコトヲ得

其專決ノ權ナキ事件ハ意見ヲ附シテ陸軍卿ニ上申ス可シ

第六十八條 陸軍卿ハ司令官ヨリ具申スル所ノ判決ヲ不適當ト思量スル時ハ直ニ司令官ニ下シテ之ヲ再議セシムルコトヲ得

陸軍卿ハ死刑並ニ上長官以上ノ重罪輕罪及ヒ士官ノ重罪ニ係ル者ハ上奏シテ命ヲ請フ可シ

第六十九條 宣告執行ノ命令アリタル時ハ判士長判士録事法廷ニ臨ミ被告人ヲ出廷セシメテ判士長其宣告ヲ爲ス可シ

第七十條 闕席裁判ニ係ル刑ノ宣告書ハ軍法會議ノ門前ニ揭示ス可シ

第七十一條 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其地ノ司令官ハ第六十六條ノ權限ニ拘ハラス直ニ其宣告執行ノ命令ヲ下スコトヲ得

十九年六月號布告ノ  
以上本條中錄事ノ  
加フニ理事ノ二字ヲ

第七十二條 軍團師團旅團ノ長若クハ合團ノ地ノ司令官ハ輕罪ノ刑ノ宣告ヲ受ケタル者ニ戴罪服務ヲ命スルコトヲ得但戴罪服務ノ日數ハ刑期ニ算入セス其戴罪服務中功績アル者ハ司令官其刑ヲ減免スルコトヲ得

第七十三條 行刑ニ關スル方法ハ陸軍卿別ニ之ヲ定ム

第七十四條 臨戰若クハ合團ノ地ニ於テハ其地ノ司令官ハ時宜ニ依リ此治罪法ノ條目ヲ省略執行セシムルコトヲ得

○明治十九年二月十七日第六號布告

陸軍治罪法中左ノ通加除改正ス

第八條審事審事補ノ五字ヲ削ル

第九條改正

軍法會議ハ佐官一名ヲ判士長ト爲シ尉官四名ヲ以テ判士トス但被告人准士官以上及ヒ同等以上ノ軍人ナル時ハ左ノ表ニ照シテ判士長判士ヲ更換ス

判士長	判士	被告人
佐官 一名	少尉 若クハ中尉 二名	陸海軍少尉准士官及ヒ 同等ノ軍人軍屬
佐官 一名	中尉 二名	陸海軍中尉及ヒ 同等ノ軍人軍屬
大佐若クハ中佐 一名	少尉 二名	陸海軍大尉及ヒ 同等ノ軍人軍屬
大佐 一名	中佐 二名	陸海軍少佐及ヒ 同等ノ軍人軍屬
少將 一名	大佐 二名	陸海軍中佐及ヒ 同等ノ軍人軍屬
中將 一名	少將 二名	陸海軍大佐及ヒ 同等ノ軍人軍屬
中將 一名	中將 二名	陸海軍少將及ヒ 同等ノ軍人軍屬
大將 一名	大將 一名	陸海軍中將及ヒ 同等ノ軍人軍屬
大將 一名	大將 二名	陸海軍大將及ヒ 同等ノ軍人軍屬

第十一條審事ノ二字ヲ削ル

第二十六條以下各條中審事ノ二字ヲ理事ニ改ム

第三十六條第一項改正

司令官被告事件ノ具申ヲ受ケタル時ハ左ノ諸項ヲ除クノ外審判ノ命令ヲ下シ其事件ヲ理事ニ下付ス可シ

第三十七條第三十八條中審問ノ二字ヲ審判ニ改ム

第四十四條理事ヲ經テノ五字ヲ削ル

第五十三條改正

理事審問ニ於テ共犯若クハ餘罪ヲ覺擧シタル時ハ直チニ之ヲ審問ス可シ但共犯ノ官等其審判ノ命令ヲ下シタル司令官ニ於テ命令ヲ下スコトヲ得サル者ニ係ル時ハ之ヲ司令官ニ具申ス可シ

第五十四條改正

理事審問ヲ終リ若クハ審問ヲ爲サシテ直チニ判決ニ付ス可キ時ハ意見

書ヲ作り會議ノ日時ヲ定メ訴訟文書ト共ニ之ヲ判士長ニ交付シ會議ノ日時ヲ判士ニ通報ス可シ

其事件不問ニ付ス可キモノハ之ヲ司令官ニ具申ス可シ

第五十五條削除

第五十六條改正

軍法會議ヲ開ク時ハ判士長判士理事錄事各其席ニ著キタル後判士長被告人ヲ出廷セシメ之ヲ訊問シ若クハ判士ヲシテ其訊問ヲ爲サシム可シ

第六十三條第二項第三項改正

法廷ニ於テ共犯若クハ餘罪ヲ覺擧シタル時ハ直チニ其裁判ヲ爲シ若クハ會議ヲ中止シ理事ニ移シテ其審問ヲ爲サシム可シ但共犯ノ官等其審判ノ命令ヲ下シタル司令官ニ於テ命令ヲ下スコトヲ得サル者ニ係ル時ハ判士長之ヲ司令官ニ具申ス可シ

第六十五條第六十九條錄事ノ上理事ノ二字ヲ加フ

奉勅

○陸海軍法衙ニ於テ罰金科料ニ處スル時換刑方

○明治十六年十一月十日第二拾七號布告

陸海軍法衙ニ於テ罰金科料ニ處スル時ハ直ニ輕禁錮拘留ニ換フルコトヲ得  
右奉 勅旨布告候事

リ

○遠於ノ部

○大藏省証券條例

○明治十七年九月二十日第貳拾四號布告

大藏省証券條例別紙ノ通制定ス

右奉 勅旨布告候事

別紙

大藏省証券條例

第一條 大藏省証券ハ出納上一時使用ノ爲メ大藏省ヨリ發行スルモノトス

第二條 大藏省証券ハ無記名利付定期拂ニシテ其發行シタル年度ノ歲入ヲ以テ仕

拂ヲ爲スモノトス

第三條 大藏省証券ノ發行金額ハ大藏卿之ヲ豫定シ太政官ノ裁可ヲ受クヘシ

第四條 大藏省証券ハ百圓五百圓千圓五千圓壹萬圓ノ三種ニ別テ其仕拂期限ハ三

才

ケ月六ケ月九ケ月トス但其仕拂期日ハ各証券面ニ記載スヘシ

第五條 大藏省証券ハ何人ニテモ授受賣買スルヲ得

第六條 大藏省証券ノ仕拂及ヒ引換ニ關スル事務ハ日本銀行ニ於テ取扱ハシムヘシ

第七條 大藏省証券ノ所持人ハ其仕拂ノ期日ニ至リ日本銀行本支店又ハ代理店ニ於テ其仕拂ヲ請求スヘシ但其仕拂ハ通貨ヲ以テスルモノトス

第八條 大藏省証券ハ其仕拂期日ヨリ起算シ滿六ケ月間ハ之ヲ仕拂フヘシ滿六ケ月ヲ過ルトキハ一切仕拂ヲ爲サ、ルモノトス但仕拂期日後ハ利子ヲ付セサルモノトス

第九條 大藏省証券汚染又ハ毀損セシトキハ日本銀行本支店又ハ代理店ニ差出シ証券ノ引換ヲ請フヘシ但其券面金額記號及ヒ主要ノ印部ヲ検査シ其眞正タルヲ証認シ得ヘキ者ニアラサレハ引換サルヘシ

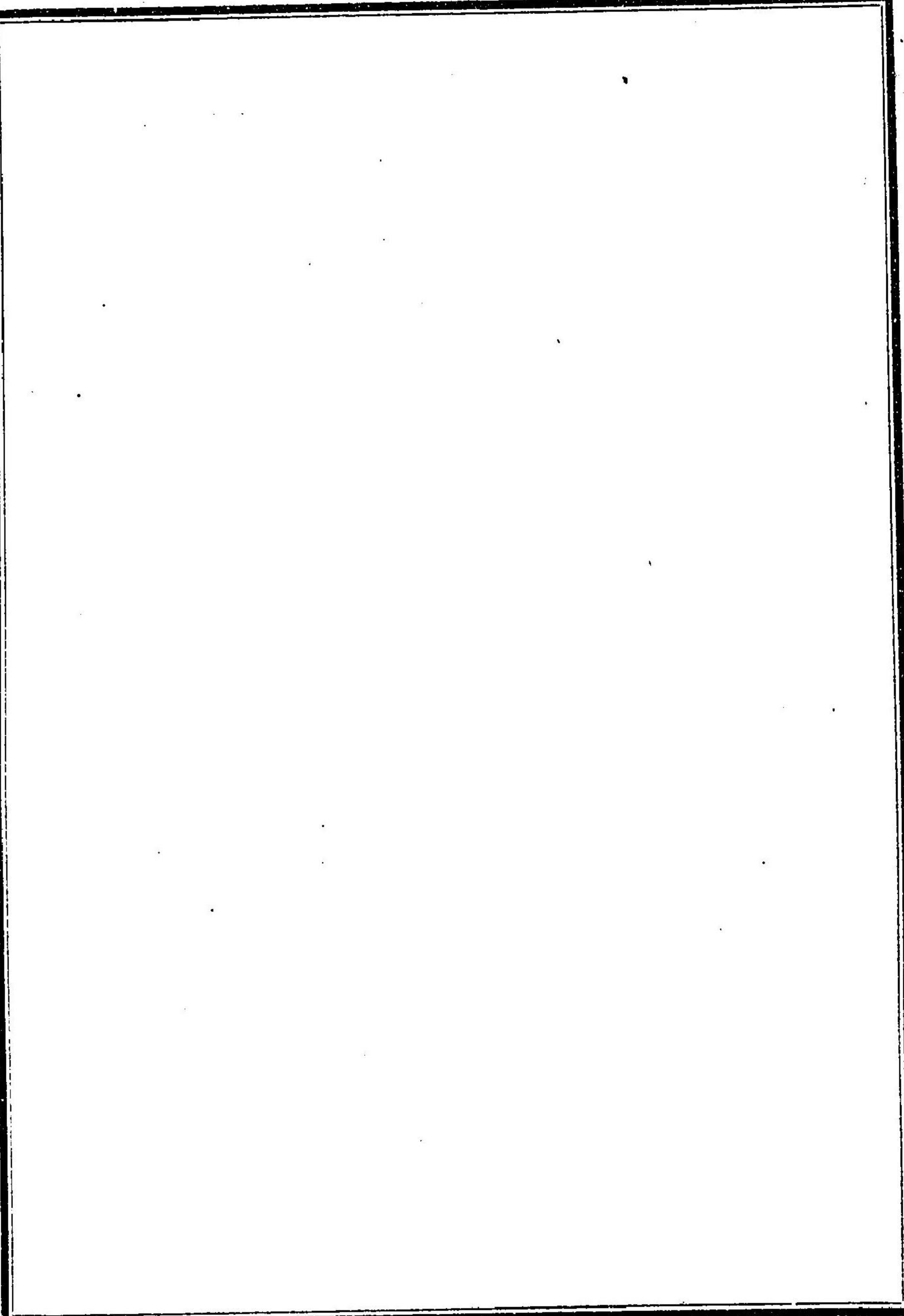
第十條 大藏省証券ノ所持人其証券ヲ亡失セシトキハ其事由並ニ券面ノ金額仕拂

期日記號番號及ヒ所有セシトキノ手續ヲ詳記シ日本銀行本支店又ハ代理店ヲ經テ大藏省ニ届出ヘシ大藏卿ハ其証券ノ授受賣買引換及ヒ仕拂ヲ差止ムヘキ旨ヲ告示スルモノトス但發覺シタルトキハ同様ノ手續ヲ以テ届出ヘシ

第十一條 亡失セシ証券ハ之ヲ發見セサルモ日本銀行本支店又ハ代理店ニ於テ滿

第十二條 大藏省証券ヲ偽造若クハ變造シテ行使シタルモノハ刑法第二百四條第二項ニ依テ處斷ス





○和ノ部

○王政復古更始一新

○慶應三年十二月十四日布告

德川内府従前御委任之大政返上將軍職辭退之兩條今般被聞食候抑癸丑以來未曾有之國難先帝頻年被憐宸襟候御次第衆庶之所知ニ候依之被決叙慮王政復古國威挽回之御基被爲立候間不論既往更始一新自今攝關幕府等廢絶即今假リニ總裁議定參與之三職ヲ置レ萬機可被爲行候事

神武創業之始ニ原ツキ緒紳武辨堂上地下ノ別ナク至當ノ公議ヲ竭シ天下ト休戚ヲ同ク可被遊叙慮ニ付各勉勵舊來驕惰ノ汗習ヲ洗ヒ皇國ノ爲メ忠誠ヲ可盡事

一内覽勅問御人數國事御用掛議奏武家傳奏守護職所司代總被廢候事

一太政官始追々可被爲興候間其旨可心得居候事

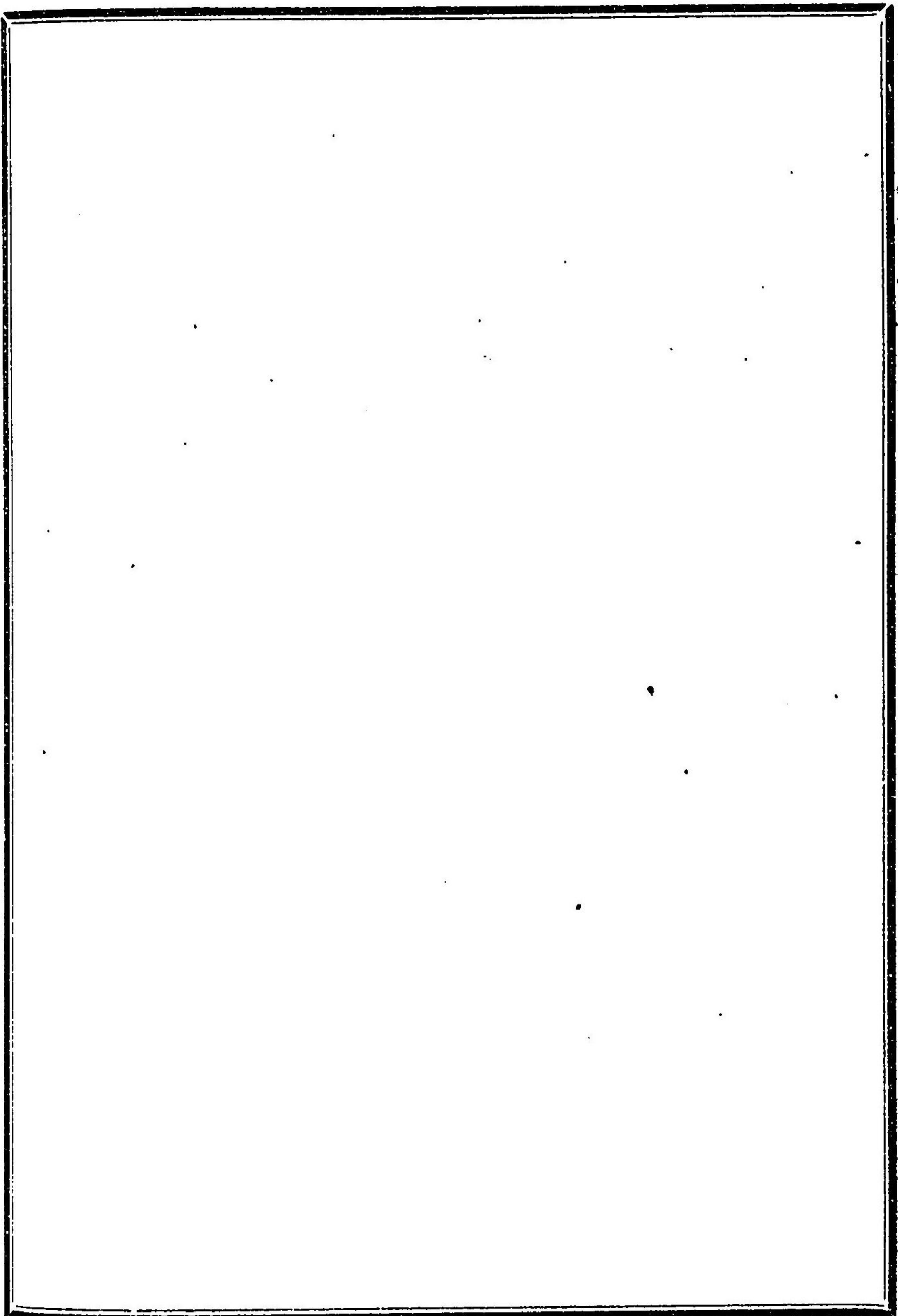
一朝廷禮式追々御改正可被爲在候得共先攝錄門流之儀被止候事

ワ

一舊弊御一洗ニ付言路被洞開候間見込有之向者不拘貴賤無忌憚可致獻言且人才登庸第一之御急務ニ候故心當リ之仁有之候ハ、早々言上可有之候事

一近來物價格別騰貴如何トモスヘカラサル勢富者ハ益富ヲ累テ貧者益窘急ニ至リ候趣畢竟政令不正ヨリ所致民ハ王者之大寶百事御一新之折柄旁被惱宸襟候智謀遠計救弊之策有之候者ハ無誰彼可申出候事

右之通り御確定被仰出候ニ付而ハ六十餘州大小藩ハ申ニ不及陪從吏卒之末ニ至迄御趣意厚相心得候様御沙汰候事

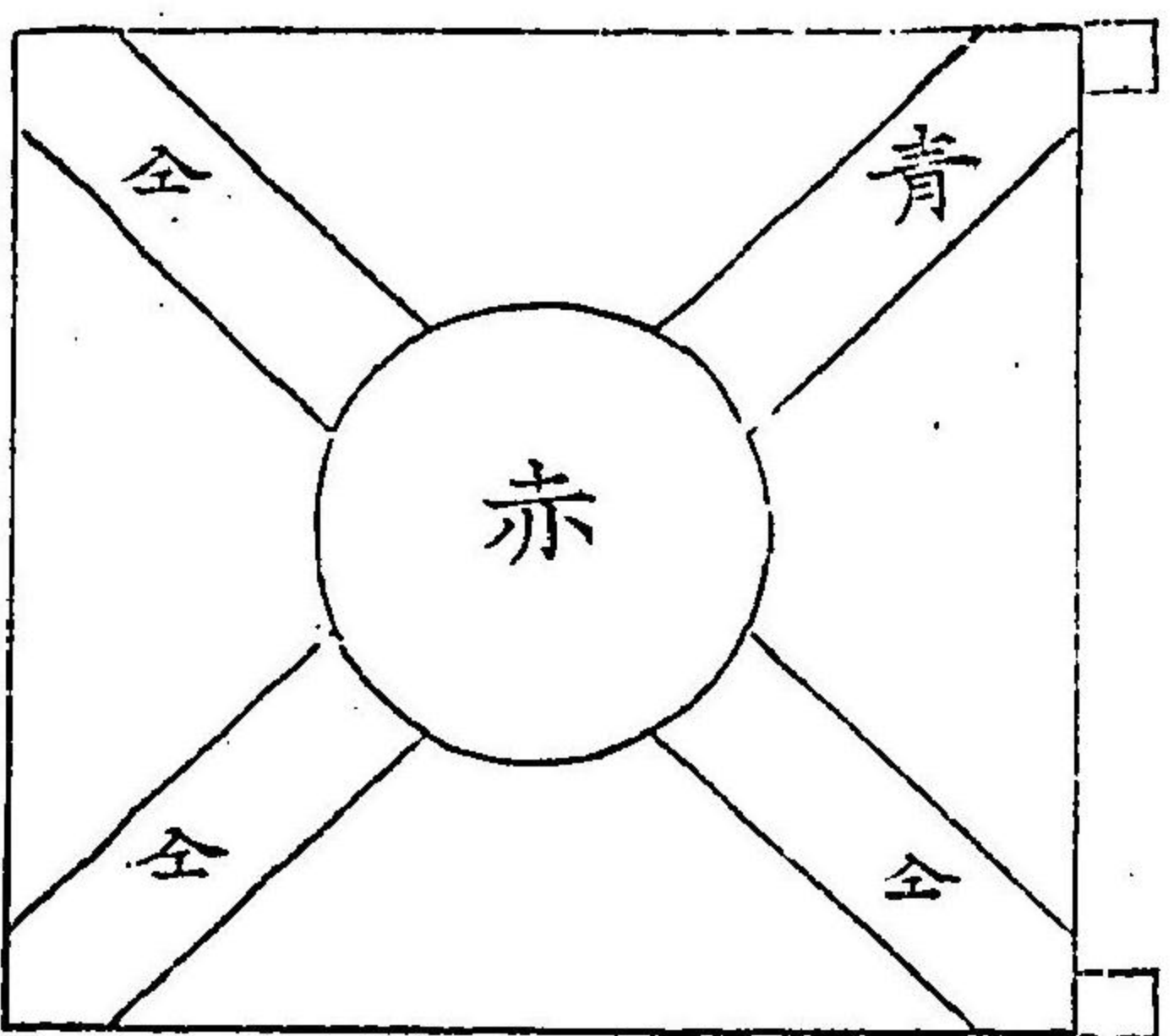


○加ノ部

○開港場税關并監船及附屬船ノ旗章

○明治四年十月廿七日布告

各開港場税關并監船及附屬船ノ旗章左ノ通被相定候間爲心得相達候事



○海里ヲ定ム

○明治五年四月廿四日第三百三十號布告

今般海軍省ニ於テ別紙ノ通相定候條其旨可相心得尤海里ハ普通陸里ト不混様可致事

一海里ハ一度六十分一ヲ以テ一里ト定ム即チ陸里十六町九分七厘五毛ナリ

一尋ハ曲尺六尺ヲ以テ一尋ト定ム

但測量圖海底ノ淺深ハ干潮ノ時間尋數ヲ以テ定ムルモノトス

一經度ハ英國「グレンウーナ」ヲ以テ暫ク初度トス

但我國ニ在テハ東京海軍省標竿ヲ以テ東經一百二十九度四十五分二十五秒零五ト定ム

○香具師ノ名目ヲ廢ス

○明治五年七月八日第百九十六號布告

從來香具師ト唱へ來候名目自今被廢止候事

但銘々商賣ノ儀ハ可爲勝手事

○海關輸出入荷物取扱條例

○明治六年六月十四日第二百十號布告

内國人民一般并御雇外國人ニ至ル迄海關輸出入荷物取扱條例別冊ノ通被定候條此旨相達候事

海關輸出入荷物取扱條例

第一官省使寮司及府縣官員并留學生徒ニ至ル迄政府ノ命ヲ奉シ海外ニ航旅スル者公用ノ荷物并本人相當ノ旅具ヲ除クノ外輸出入共商品同様一般收稅スヘシ

第二前款ニ掲クル官員并留學生徒發著ノ前後輸出入又ハ他邦滯留中送致セル貨物等無稅通關スヘキ旨大藏省ノ證書無之分ハ商品同様一切收稅スヘシ

第二華士族ヨリ平民ニ至ル迄商業或ハ留學遊歷等ノ爲メ自費ヲ以テ海外へ渡航スル者荷物輸出入ノ際本人相當ノ旅具ヲ除クノ外一切收稅スヘシ

但相當旅具免稅ノ荷物ヲ定ムルハ稅關官吏ノ意見ニシテ本人之ヲ取捨増減スルコトヲ得ヘカラス

第四官省使寮司及府縣於テ雇役ノ外國人自用品其自國又ハ他國ヨリ取寄或ハ御國産ヲ其本國へ差送ル分トモ自今約定書中自用品無稅通關可指許旨ノ明文無之分ハ輸出入トモ商品同様收稅スヘシ

但向後外國人備入ノ節有稅ノ自用品ハ輸出入トモ免稅致スヘキ旨條約面ニ記載スヘカラス

第五前條ニ掲クル外國人來著又ハ滿期歸國ノ節輸出入ノ荷物本人相當ノ旅具ヲ除クノ外商品同様收稅スヘシ

○海軍旗章

○明治六年十二月廿四日第四百十六號布告

明治四年辛未十月被相定候海軍旗章圖面ノ通今般更正増補候條紛敷印相用申問敷候此旨布告候事

但海軍省管轄外ノ西洋形船御國旗ノ外ハ日ノ丸形ノ旗章不相成且日本形ノ大小船御國內ニ於テ日ノ丸印相用候儀禁止候事

別紙圖面

八年百八十八號布  
告ヲ以テ御旗改正  
ス

八年百八十八號布  
告ヲ以テ皇族旗改正  
ス

御旗

皇族旗

塞面銀月



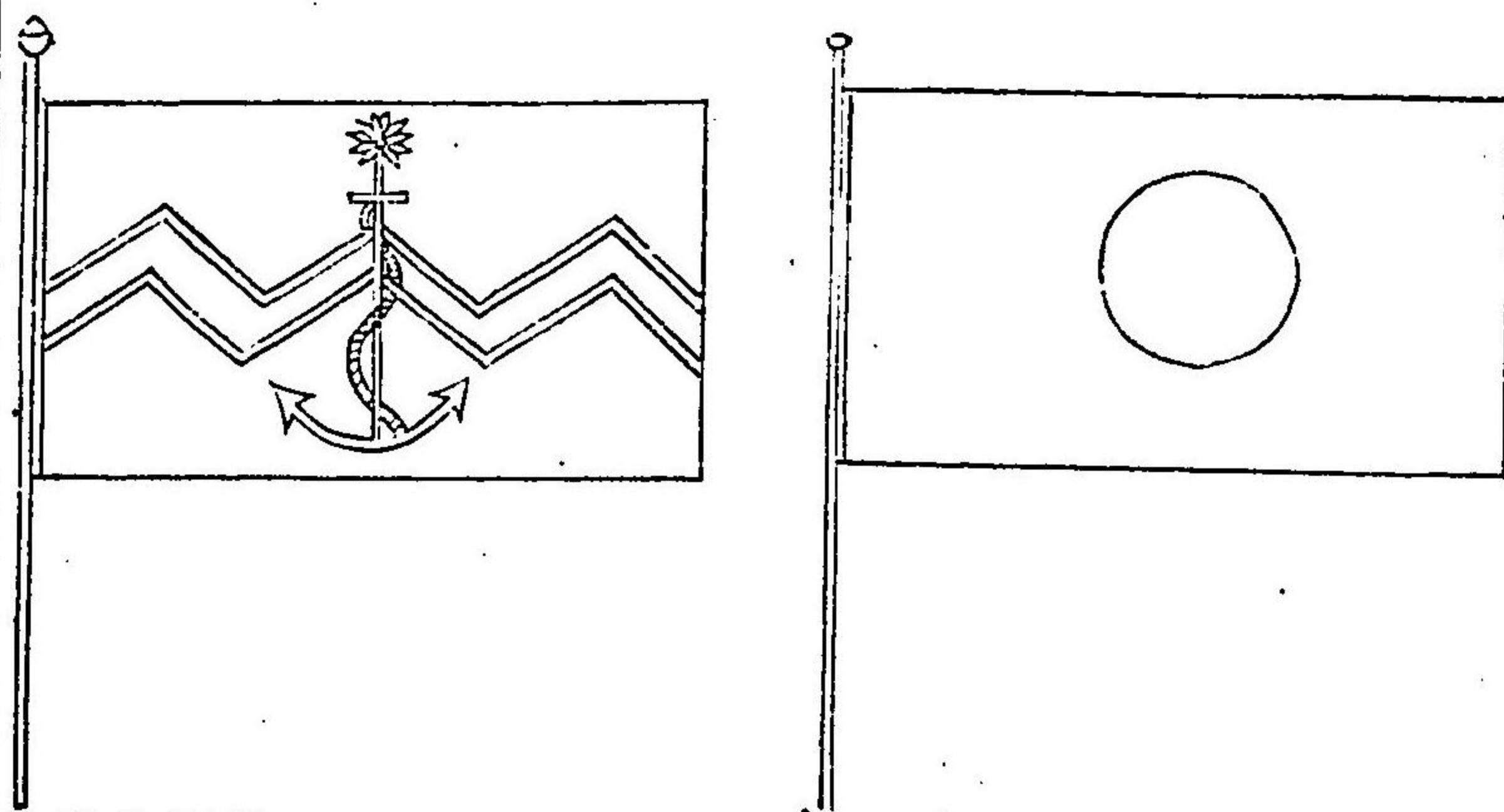
一御旗 錦布金日銀月章  
縦七尺八寸横一丈一尺七寸  
風下余幅五寸八分  
但シ縦徑ハ横徑ノ三分ノ二又横徑ノ  
二十分一ヲ風下ノ縁ニ加フ  
日月ノ徑ハ縦徑ノ五分三ト定ム

一皇族旗 青地錦布紅日章  
縦横右ニ同シ

八年六十四號布  
告ヲ以テ下等細目中  
ヲ改正ス

御國旗

海軍旗

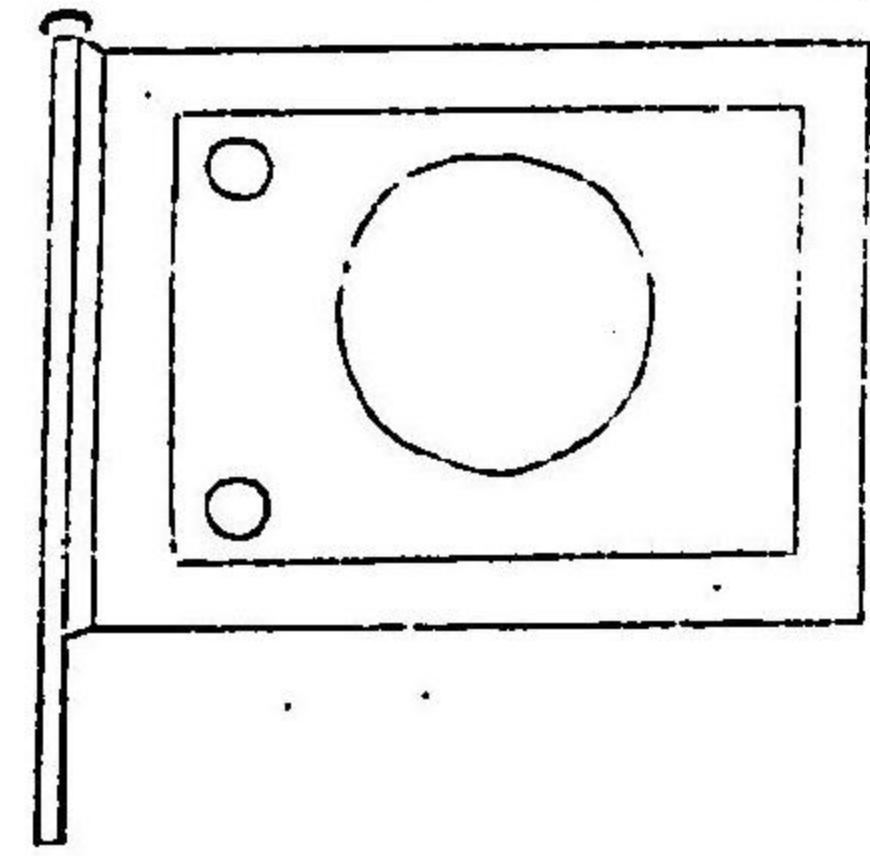


一御國旗 白布紅日章  
縦横右ニ同シ  
一船首旗章 國旗ニ同シ  
縦六尺横八尺  
小艦ニ在テハ小ナル者ヲ用フ  
風雨或ハ大小艦ノ別ヲ以テ旗モ亦大小  
ノ差アリ縦横ノ比例ハ定法ニ從フヘシ

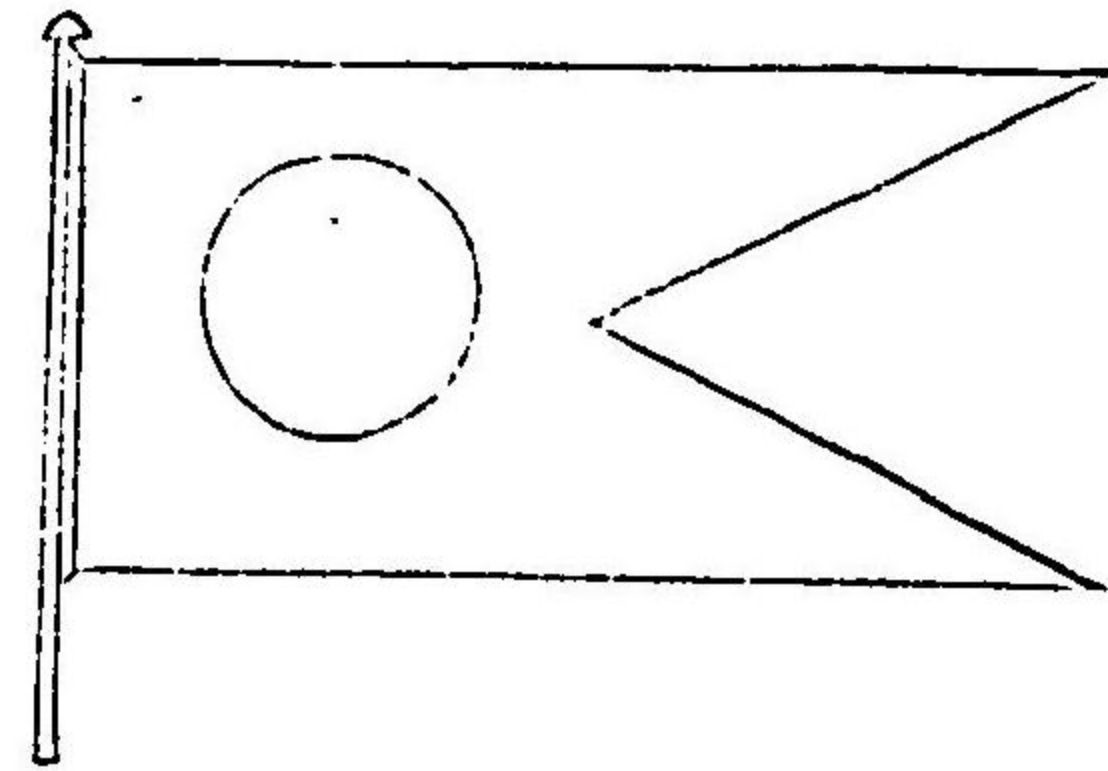
一海軍旗 白布紅錨紅山形二條  
錨ノ環櫻花ノ狀ヲナス  
大縦一丈横一丈五尺  
中縦七尺八寸横一丈一尺七寸  
小縦五尺横七尺  
各地艦船ノ進退ニ管スル處ハ皆此旗  
ヲ揚ク  
海軍省長官又ハ代理乗艦ノ時モ之レ  
ヲ用ルコトアリ

カ

將脚船旗



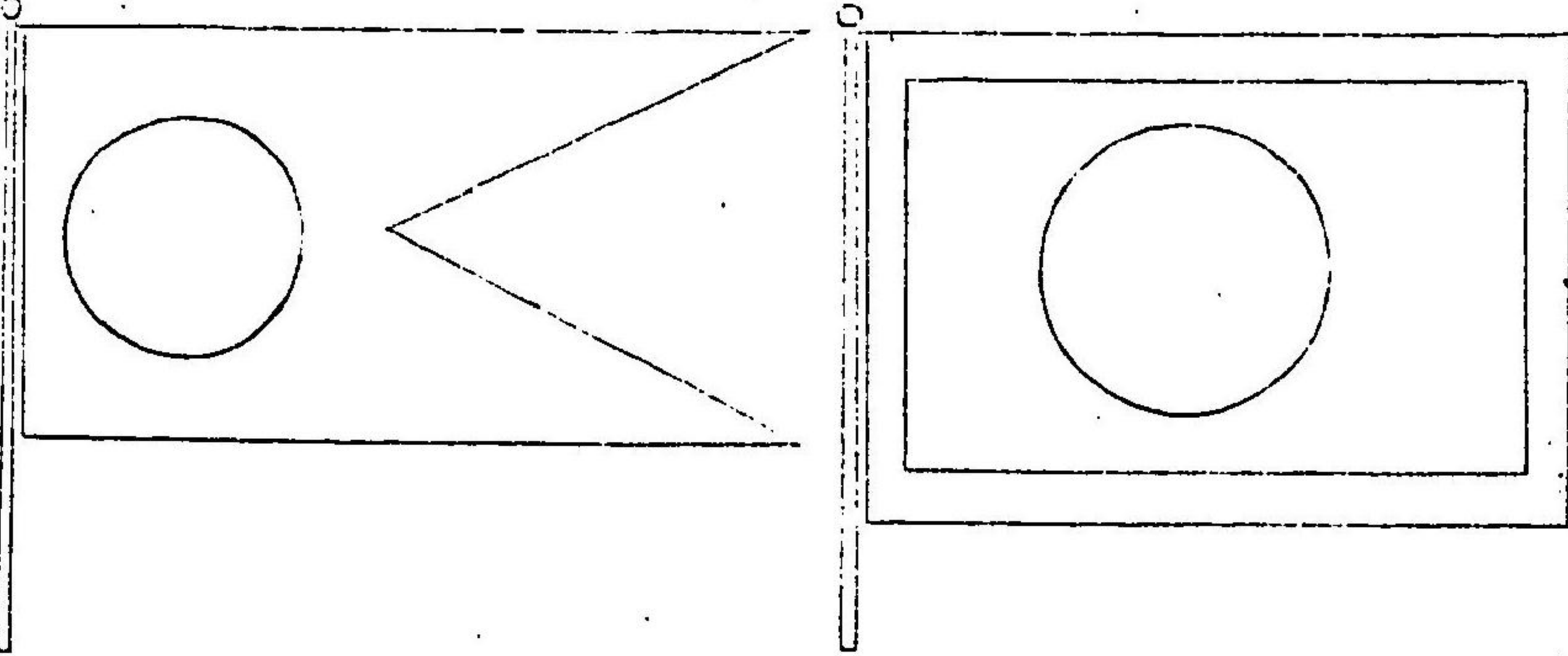
代令旒



一將脚船旗 白布紅線紅日章  
 縱三尺橫四尺五分  
 風下余幅二寸二分五厘  
 中將脚船ニハ一小時ヲ加フ  
 少將脚船ニハ二小時ヲ加フ  
 甲 但シ縱自紅線内際五寸五分  
 乙 但シ横前五寸

一代令旒 白布紅日章  
 縱三尺橫六尺  
 但シ三角形右ニ同シ  
 代令旒ハ指揮官不在ノ港内ニ二艦以  
 上合集スル時先任官之レヲ後橋頭ニ  
 揚クヘシ

將旗 代將旒



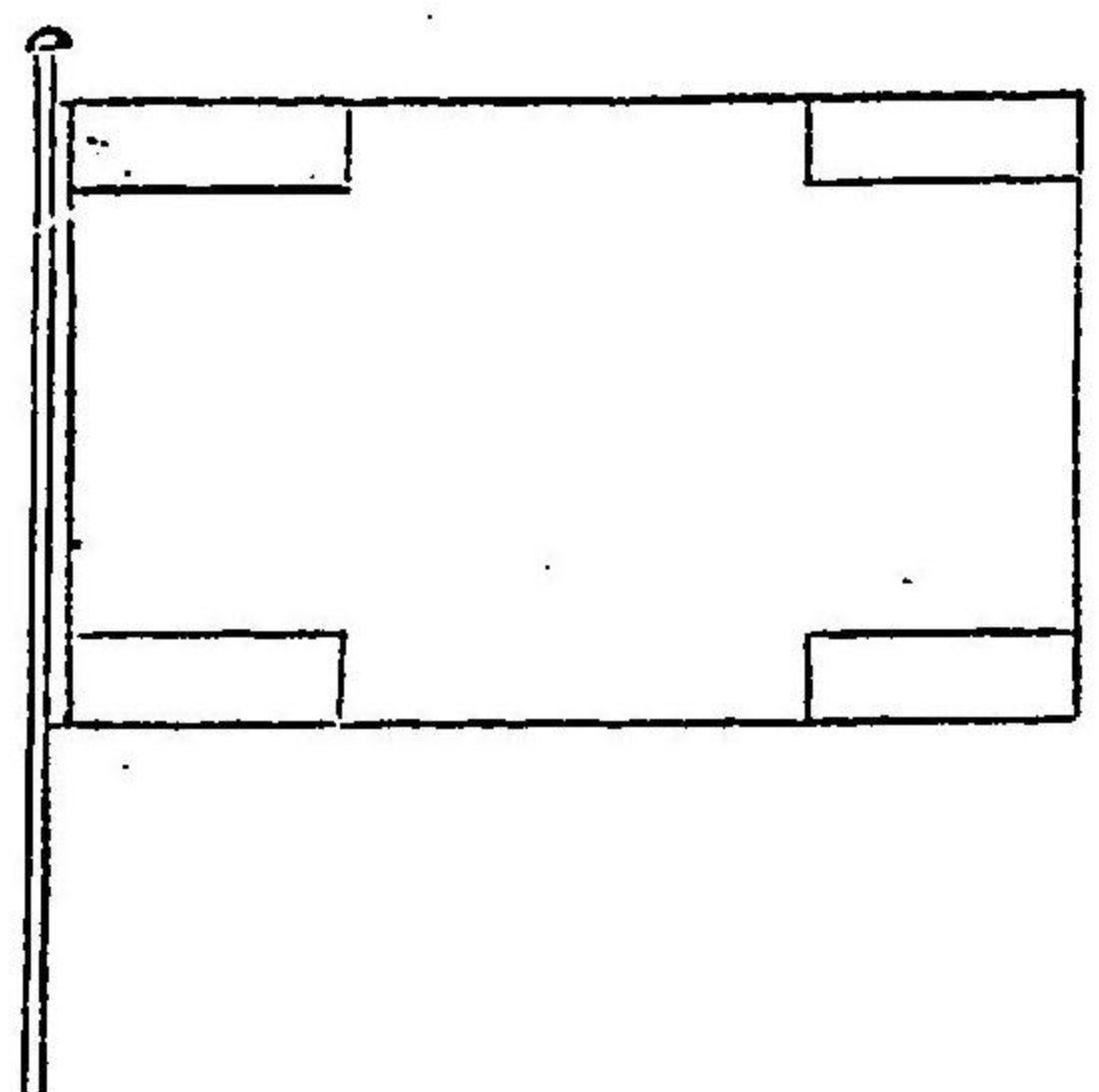
一將旗 白布紅線紅日章  
 縱六尺橫九尺  
 風下余幅四寸五分  
 大將乘艦ノ時ハ之レヲ中橋頭ニ揚ク  
 中將乘艦ノ時ハ之レヲ前橋頭ニ揚ク  
 少將乘艦ノ時ハ之レヲ後橋頭ニ揚ク

一代將旒 白布紅日章  
 縱四尺五寸橫九尺  
 但シ三角形四寸二分ノ一  
 代將旒ハ大佐指揮官タル時之レヲ用  
 ルモノニシテ大佐中艦隊指揮タル時  
 中橋頭ニ揚ク小艦隊指揮タル時ハ前  
 橋頭ニ揚クヘシ

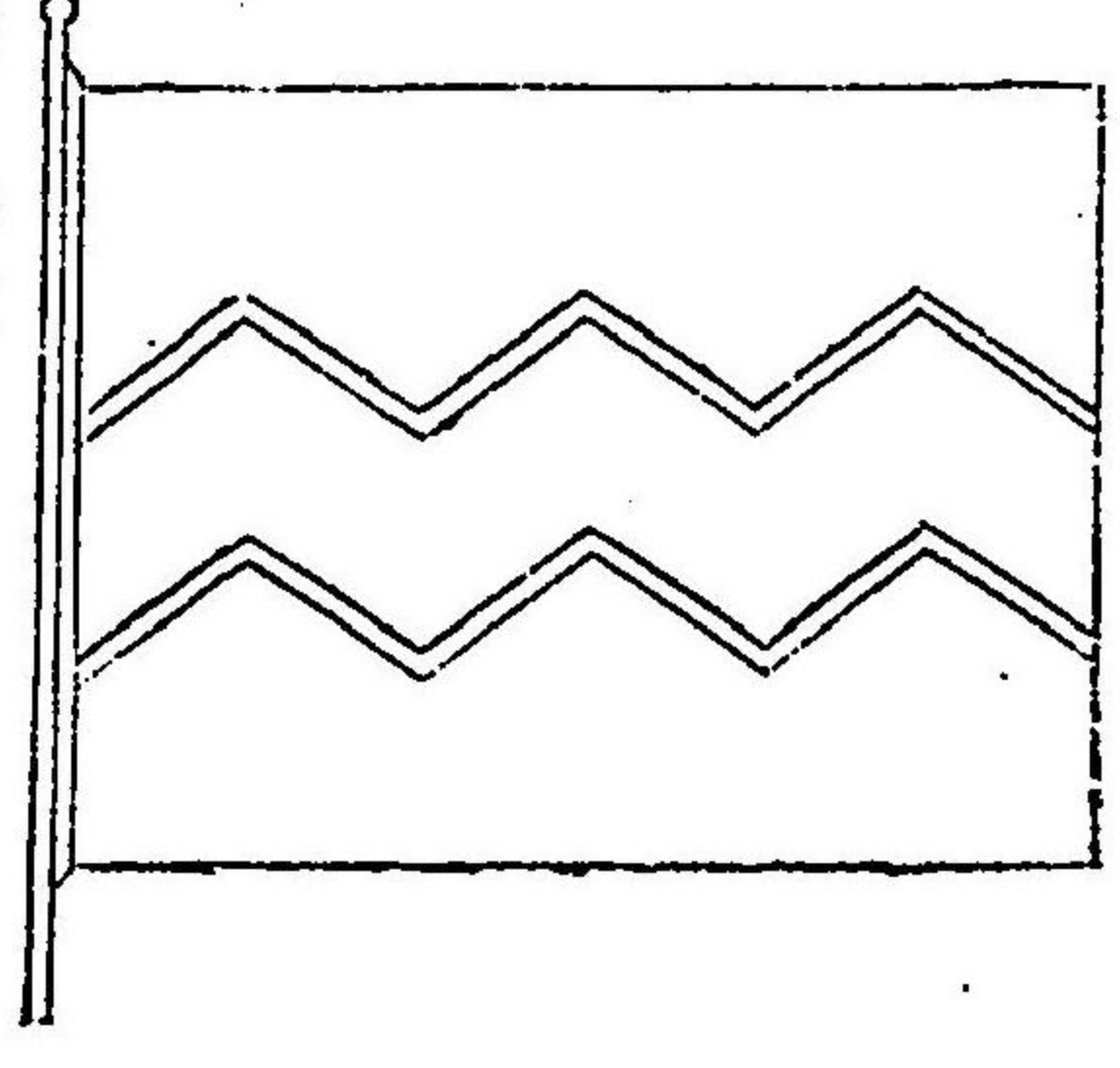
十五  
年十  
三號  
布告  
先  
行  
改  
稱  
其  
旗  
章  
ヲ  
定  
ム

カ

運送船旗



水路嚮導旗



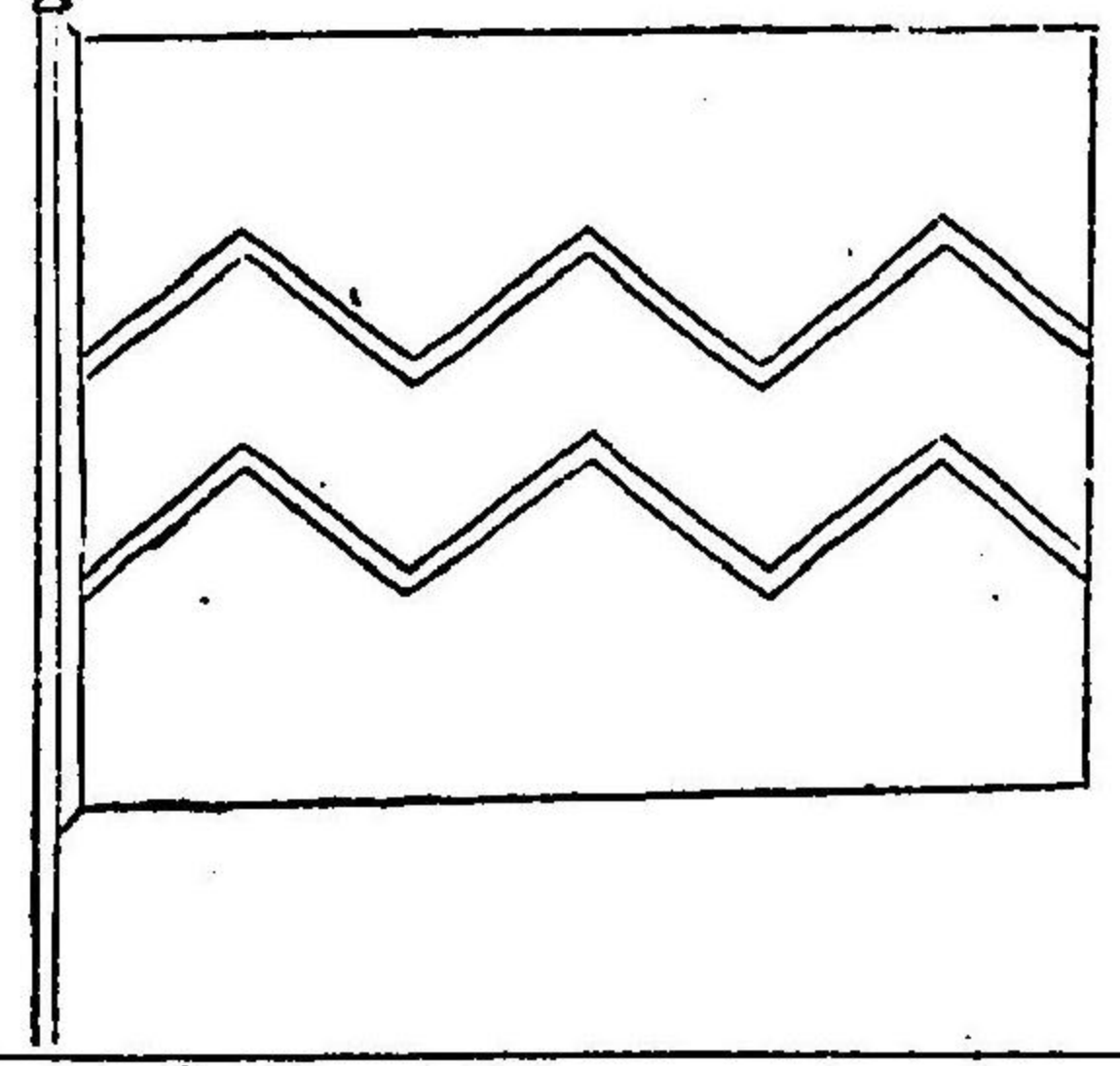
一運送船旗 白布紺山形二條  
縱横右ニ同シ  
但シ艦隊ニ屬スル時ハ旗ヲ揚ク

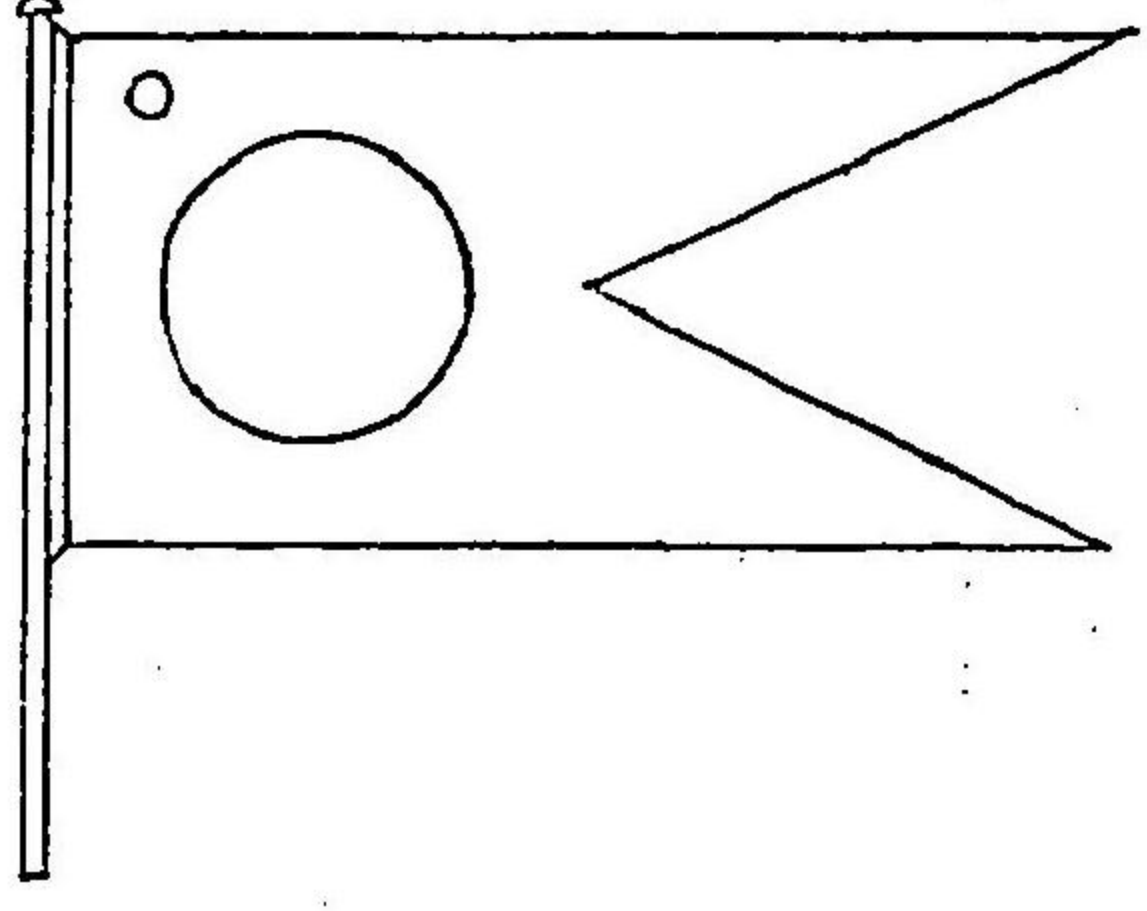
一水路嚮導旗 白布紺隅  
縱六尺横八尺

七百三十三

當直旗

代將脚船旒





一代將脚船旒  
形色代將旒ニ同フシテ中艦隊指揮ニ  
ハ小球ナシ小艦隊指揮ニハ一  
加フ

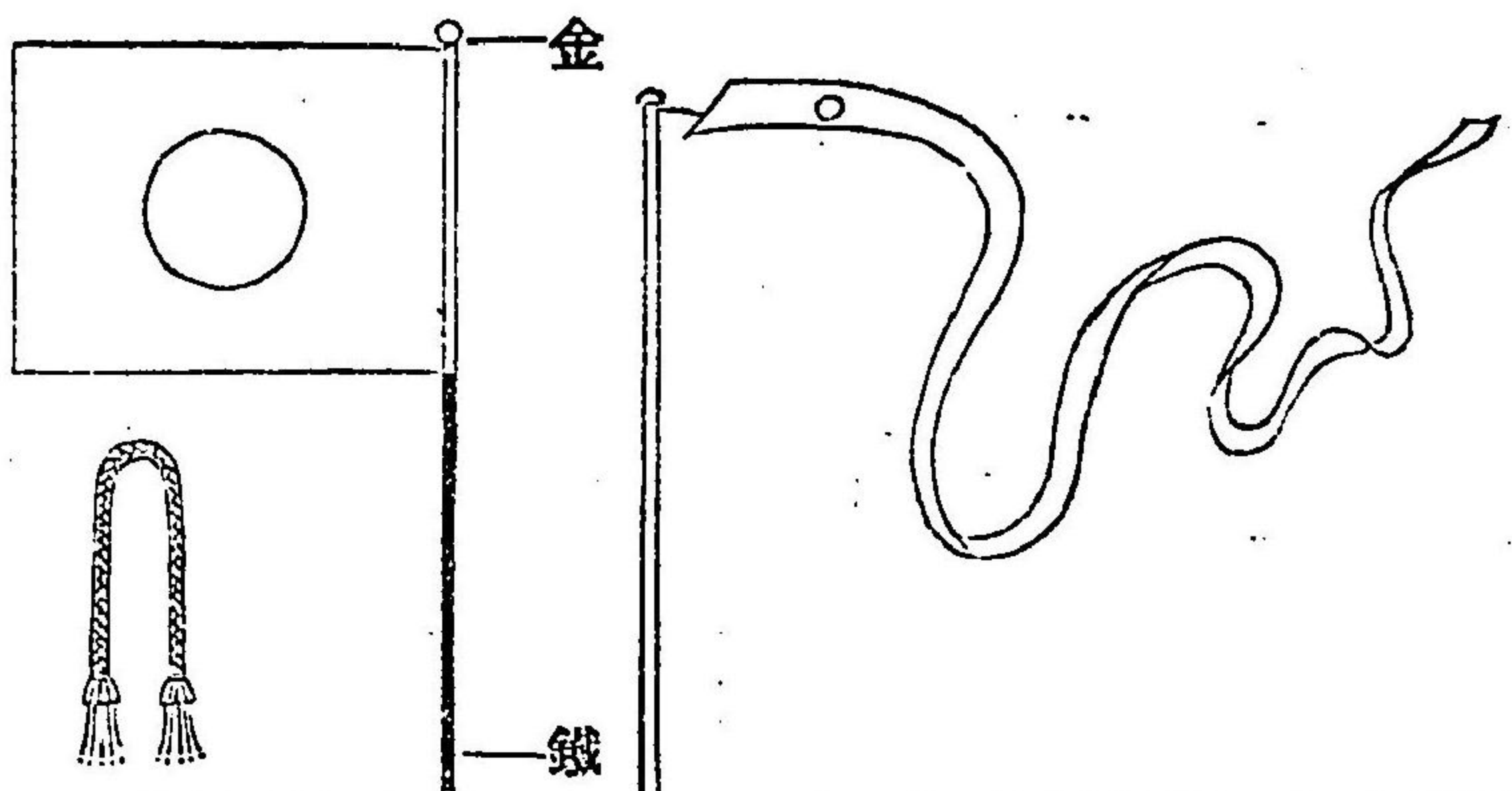
一當直旗 紅布白山形二條  
縱六尺横八尺  
艦當直ノ時之レテ後橋ニ揚ク  
風雨中或ハ小艦ニ在テハ小ナル者  
用フ縱横ノ比例ハ定法ニ從フ可シ

七百三十一



十五年十三號布告  
ヲ以テ隊附御國旗  
ヲ廢ス

旗 旒 隊 附 御 國 旗

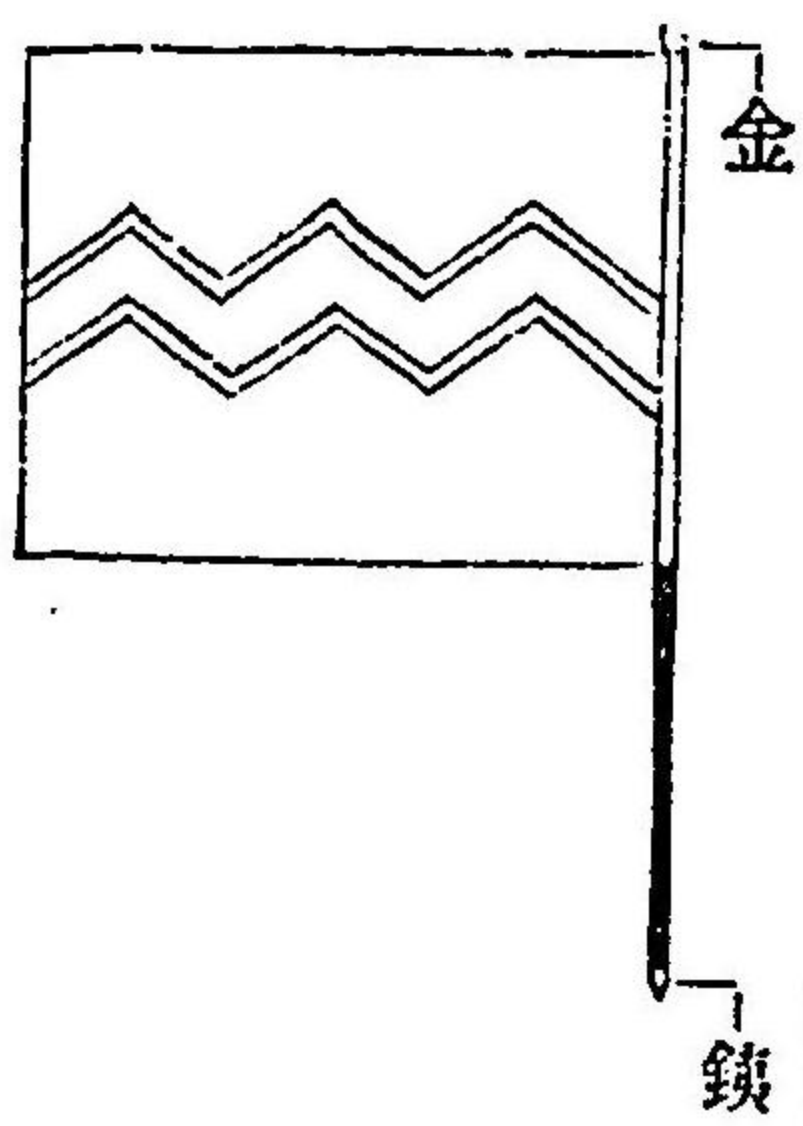


一旒中橋頭 白布紅日  
大長サ 八間上幅四寸  
中長サ 五間半上幅三寸五分  
小長サ 三間半上幅三寸

一隊附御國旗 白布紅日章  
縱三尺橫三尺七寸五分  
日章徑一尺四寸  
旗ノ括リ白革包  
紐紫金打交セ長サ三尺二寸  
旗竿堅木黒塗  
長サ七尺九寸直徑九分  
金物 鐵頭 銅金燒付二寸

十五年十三號布告  
ヲ以テ隊旗ヲ廢ス

旗 隊



一隊旗 白布紅山形二條  
山形幅一寸六分  
縱橫其他前ニ同シ

○明治八年四月廿二日第六十四號布告

明治六年<sup>十二月</sup> 第四百十六號布告海軍旗章中左之通改定候條此旨布告候事

一海軍旗 白布云々

大縱云々

中縱云々

小縱云々

海軍本省及ヒ長官同代理乘艦ノ時ノミ之ヲ用フ

○明治八年十二月十日第百八十八號布告

明治六年<sup>十二月</sup> 第四百十六號布告海軍旗章ノ内御旗皇族旗別紙ノ通改正候條此旨布告候事

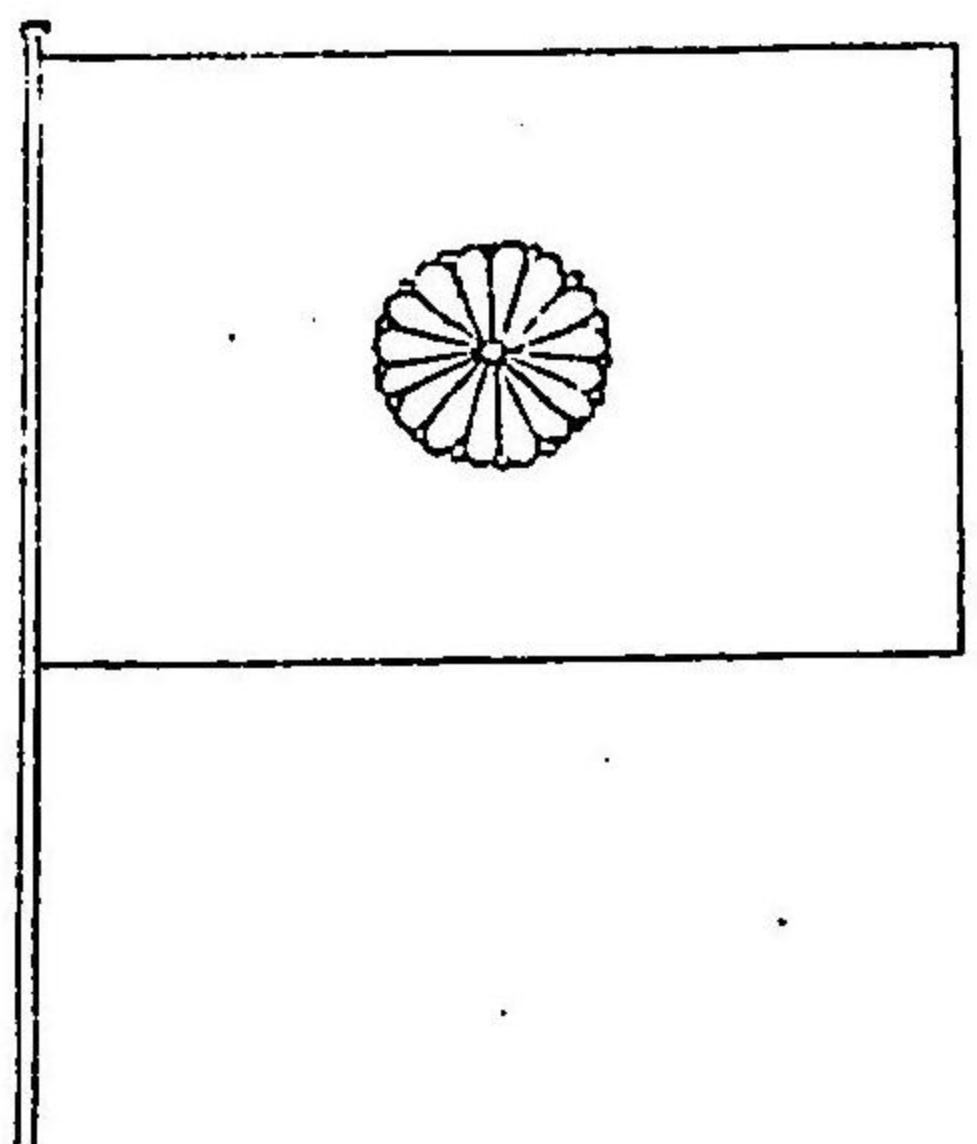
御旗 縮圖

一御旗 紅布菊御紋白

縦七尺八寸横一丈一尺七寸

但シ縦徑ハ横徑三分ノ二

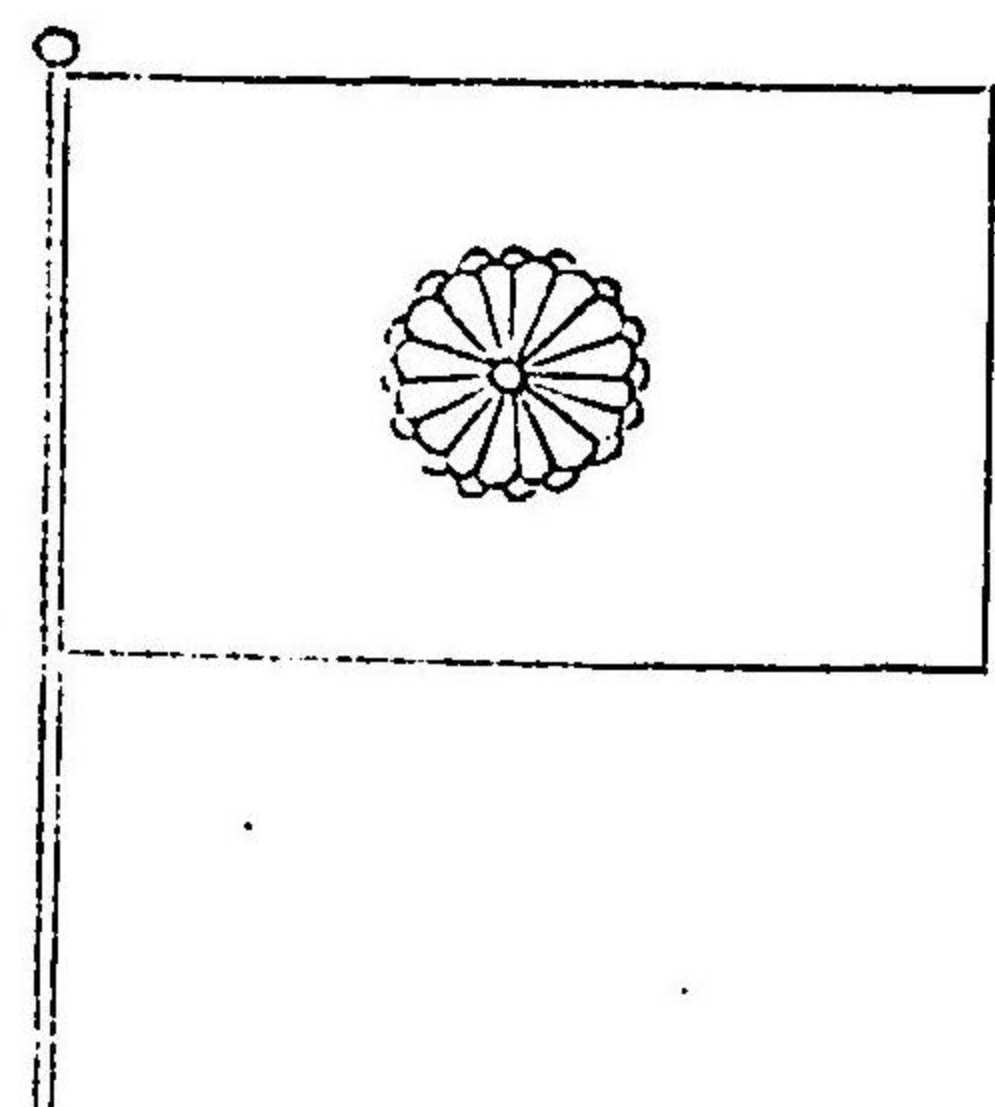
菊御紋ノ徑ハ縦徑ノ七分五厘ト定ム



皇族旗

一皇族旗 紺布菊御紋白

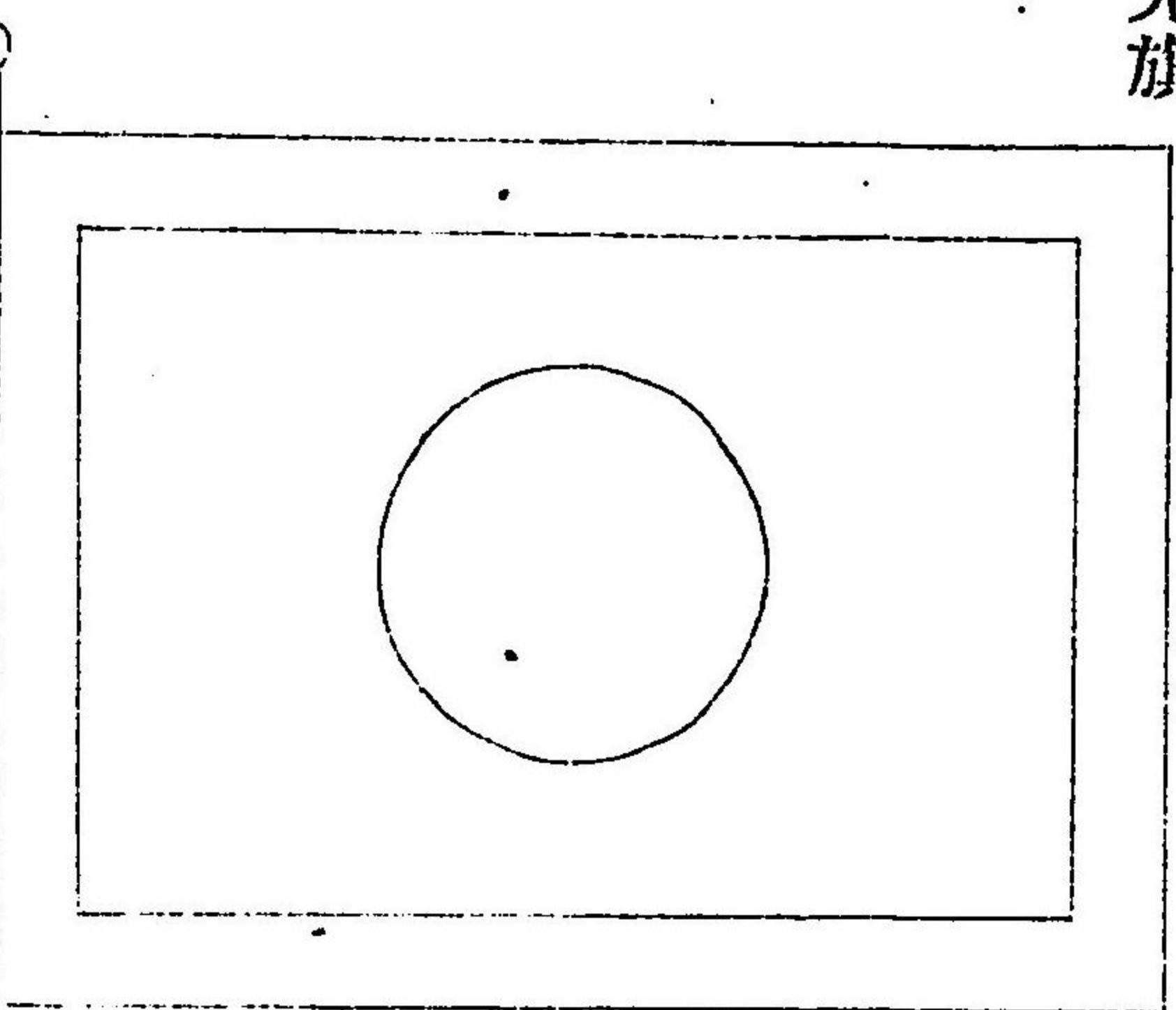
縦横右ニ同シ



○明治十五年二月廿二日第十三號布告

明治六年<sup>十二月</sup> 第四百十六號布告海軍旗章中隊附國旗并隊旗ヲ廢シ水路嚮導旗ヲ要招水先旗ト改稱左ノ如ク其旗章ヲ定ム  
右奉 勅旨布告候事

要招水先旗



縦 六尺  
横 八尺  
日章 徑三尺壹寸五分  
紺縁 幅八寸

○贋造金銀銅貨紙幣等取扱規則

○明治九年四月十九日第五十七號布告

銀行又ハ爲替方又ハ兩替屋又ハ官廳ニ於テ備入候鑑定人等金銀銅貨紙幣ヲ鑑定ノ節贋造品取扱規則左ノ通相定候條此旨布告候事

贋造金銀銅貨紙幣等取扱規則

第一條 新金銀銅貨紙幣等贋造品ハ詳ニ其原由及持主ノ宿所姓名ヲ尋テ其面前ニ於テ斷截シ速ニ其最寄警察出張所或ハ屯所或ハ區戸長ニ差出シ其顛末ヲ申立ツヘシ若シ官廳ニ關スルキハ該廳ヨリ警察官署ニ通知スヘシ

但持主立會ハサル時ハ必ス代理人ヲ出サシムヘシ遠隔ノ地ヨリ遞送シ來レル者ハ立會人ヲ取リテ之ヲ斷截シ速ニ遞送主ヘ報告スヘシ

第二條 鑑定ヲ誤リ正貨紙幣ヲ斷截シタル時ハ改人ヨリ持主ヘ其斷截シタル正貨紙幣ヲ其同等ノ品ト引換相渡シ斷截シタル紙幣ハ事由ヲ詳記シテ管轄廳ヘ引換ヲ乞フヘシ

第三條 若シ正贋定メ難キモノ有之節ハ其原由及持主ノ宿所姓名ヲ分明ニ記載シ持主ノ面前ニ於テ其品ヲ封シ持主ヲシテ之ニ封印セシメ鑑定者ヨリ管轄廳ヘ差

出スヘシ然ル時ハ該廳ニ於テ詳細吟味ノ上全ク正品ニシテ其製充分ナラス通用ノ際人民ノ疑ヲ生スヘキモノハ直ニ持主ヘ引換渡スヘシ其贋造品ハ第一條ニ依ル

第四條 古金銀貨幣贋造品ハ持主又ハ代理人ノ面前ニ於テ斷截シ直ニ其持主又ハ代理人ヘ還付スヘシ

第五條 贋造ヲ知ルト雖モ斷截セスシテ持主ニ還付シ又ハ申立ヲ等閑ニスル者等ハ相當ノ處罰ヲ爲スヘシ

○合家ヲ禁止シ既ニ合家セシ者ノ處分方

○明治九年五月二十日第七十五號布告

明治六年<sup>月</sup>第二十八號第五項及ヒ同年<sup>月</sup>第三百一號ヲ以テ合家ノ儀布告候處詮議ノ次第有之自今被禁止候條此旨布告候事

但從前既ニ合家セシ分ハ今後左ノ通可取扱事

- 一分家セント欲スルモノハ其合家セシ本人ノ一代中ニ限り復舊スルヲ許ス其子孫ニ至テハ七年第七十三號布告分家ノ例ニ據ルヘシ
- 一戸籍記載方及ヒ刑律上ノ關涉ニ於テハ戸主ノ血屬ハ等親ニ依リ其血屬ナキハ等親外ノ親屬タルヘシ
- 一士族平民合家セシモノハ總テ士族ニ編入スヘシ

○各區町村金穀公借共有物取扱土木起功規則

○明治九年十月十七日第三百三十號布告

各區町村金穀公借共有物取扱土木起功規則自今左之通相定候條此旨布告候事

第一條 凡一區ニ於テ金穀ヲ公借シ若クハ共有ノ地所建物等ヲ賣買スルキハ正副區戸長並ニ其區内每町村ノ總代二名ツ、ノ内六分以上之ニ連印スルヲ要スヘシ

十二年十二月十二號  
告ヲ以テ區町村會  
開設ノ地方ハ其議  
スニ付セシムヘシト

第二條 凡ソ町村ニ於テ金穀ヲ公借シ若クハ共有ノ地所建物等ヲ賣買スル時ハ正

副區戸長並ニ其町村内不動産所有ノ者六分以上之ニ連印スルヲ要スヘシ

但右不動産所有者ヨリ其總代ヲ撰ンテ之カ代理タラシムルハ其都合ニ任スヘシ

第三條 凡ソ區内若クハ町村内ニテ土木ヲ起功スル時ハ其區ト町村ナルトニ隨ヒ

各第一條若シクハ第二條ニ倣フヘシ

第四條 若シ第一條第二條及ヒ第三條ニ指示セル場合ニ於テ唯正副區戸長ノ印ノ

ミヲ鈐シ其須要ナル連印ナキモノハ總テ之ヲ該區戸長限リノ私借若クハ私ノ土木起功ト看做スヘシ其正副區戸長ノ印ノミヲ以テ共有ノ地所建物等ヲ賣買シタル者ハ總テ賣買ノ効ヲ有セス

○明治十二年六月二十四日第二十二號布告

區會町村會ヲ開設セル地方ニ於テハ明治九年<sup>十月</sup>第三百二十號布告金穀公借共有

物取扱土木起功ノ事項ハ總テ該會議ニ付シ施行スヘシ此旨布告候事

○株式取引所條例

○明治十一年五月四日第八號布告

明治七年<sup>十月</sup>第三百七號布告株式取引條例相廢シ更ニ別冊ノ通相定候條此旨布告候事  
別冊

表

明治十一年<sup>五月</sup>第八號布告改定

株式取引條例

紙

株式取引所條例

第一章 株式取引所創立及開業ノヲ

第一條 株式取引所ハ株式仲買人ノ集會シテ日本政府ノ諸公債證書及日本政府ノ條例ヲ遵奉シテ發行シタル銀行並諸會社ノ株券等ヲ賣買取引スル所ナリ而シテ之ヲ創立セントスルモノハ其創立願書へ其地方長官ノ與書ヲ受ケ之ヲ大藏省へ差出シ大藏卿ノ允許ヲ請フヘシ

第二條 此條例ヲ遵奉シテ株式取引所ヲ創立スルニハ其發起人少クトモ十名以上ニシテ其資本金額ハ二十萬圓以上タルヘシ而シテ其資本金總高ノ半數以上ニ當ル金額ヲ右發起人總員ニテ出スベシ

第三條 大藏卿ハ此創立願書ヲ受領シテ其許可スヘキヤ否ヲ考案シ或ハ之ヲ許可シ或ハ之ヲ許可セサルヲアルベシ

第四條 發起人右創立許可ヲ受クルニ於テハ諸般ノ規程ヲ議定シテ創立證書及定款申合規則各二通ヲ製シ株主一同記名調印ノ上地方長官ノ與書證印ヲ受ケ之ヲ

大藏省へ差出スヘシ

但創立證書及定款等ハ創立許可ヲ得タル日ヨリ遅クトモ三ヶ月間ニ差出スベシ若シ右期限内ニ差出サザルキハ其許可ハ無効ニ属スヘシ

第五條 右創立證書及定款申合規則ハ左ノ主旨ニ從ヒ各取引所ノ便宜ニ依テ之ヲ製定スベシ然レモ必ス此條例ノ旨趣ニ抵觸スルヲ得ザルベシ

創立證書ハ取引所ヲ創立スルニ付株主一同決定シタル綱領ノ條件及ヒ其責任ノ有限或無限有限責任トハ負債償却ノ義務ニ於テ該取引所ノ株券限リ或ハ其株券ノ二倍等其限アルヲ云ヒ無限責任トハ株主一同相連帶シテ各自ノ資力ヲ竭スニ至ルヲ云フヲ明記シ必ス之ヲ遵守踐行スベキ旨ヲ政府ニ對シ保證スルモノナリ

定款ハ取引所ヲ創立スルニ付株主一同其取引所ノ便宜ヲ商量決定シテ互相確守スベキ約束條款ヲ記載スルモノナリ

申合規則ハ賣買取引ニ付賣買主雙方ノ間ニ於テ取引所ニ對シ確守スヘキ規程ヲ記載スルモノナリ

カ

第六條 大藏卿ハ右創立證書及定款申合規則ヲ檢按シテ不都合ナシト思考スルニ於テハ之ニ奥書證印ヲ加ヘ免狀ト共ニ之ヲ其取引所ニ下付シテ開業ヲ許スベシ但爾后取引所ノ都合ニヨリ其創立證書及ヒ定款申合規則ヲ改正加除セントスルキハ其時々大藏卿ノ認許ヲ受クベシ

第七條 取引所ハ開業前ニ於テ其營業保證ノ爲メ資本金高ノ二分二以上ニ當ル現金又ハ公債證書（大藏省ヨリ指定スル價格ヲ以テ）ヲ大藏省ニ差出シ預置クベシ

但シ開業免狀ヲ得タル後滿五ヶ月ニ至リ猶本文ノ手續ヲナサズ又ハ開業セザルヲアルトキハ其免狀ハ取消タルベシ

第八條 取引所ハ開業ノ日ヨリ滿五ヶ年ノ間其營業ヲ保續スルヲ得ベシ右滿期ニ至リ尚ホ營業セント欲スルキハ更ニ允許ヲ受クベシ

第九條 取引所ニ於テ開業免狀ヲ受ケタル上ハ其免狀並ニ創立證書ノ寫ヲ添ヘ何月何日ヨリ其商業ヲ創ムヘキ旨ヲ新聞紙又ハ其他ノ方法ヲ以テ世上ニ公告スベシ

第二章 株主並ニ株手形ノコト

第十條 各株主ヨリ入金シタル金額ハ分テ百圓以上一定ノ株式トナシ株手形ヲ製シ其株主タルモノヘ之ヲ交付スベシ

第十一條 株主ハ其取引所ノ營業時間ハ何時ニテモ其金員及ヒ諸帖簿ヲ檢閱スルコトヲ得ヘシ

第十二條 株主ハ何等ノ事故アルトモ其取引所解散ノ期ニ至ラザル間ハ其株金ヲ取戻スコトヲ得ス

第十三條 株主ハ其取引所ノ承認ヲ得タル上其所持ノ株式ヲ賣渡シ又ハ讓渡シタナスコトヲ得ベシ

第十四條 株主タルモノハ其取引所ノ役員タラザル時間ハ何時ニテモ仲買人タルヲ得ベシト雖モ仲買人トナリタルキハ仲買人ノ規則ヲ遵守スベシ而シテ賣買上ニ於テハ之ヲ仲買人ト稱スヘシ

第三章 仲買人ノコト

十三年二十號布告  
スヲ以テ本條ヲ改正

七百四十八

第十五條 取引所ノ規定ニ從ヒ相當ノ身元金ヲ差入レ取引所ノ承認ヲ得テ自ラ株式賣買ノ取引ヲナスモノヲ其取引所ノ仲買人ト稱スベシ

但シ仲買人ニ於テ假令他人ノ依頼ヲ受ケ賣買セシモノト雖モ取引所ニ於テハ都テ仲買人ノ賣買シタルモノト看做スベシ

第十六條 仲買人ノ身元金ハ少クトモ百圓以上タルベシ

第十七條 仲買人ハ丁年者ニ限ルベシ且ツ一度身代限ノ處分ヲ受ケタル者ハ其負債ノ義務ヲ免レタル實證アルニ非サレハ入社ヲ許サ、ルヘシ

第四章 役員ノ一

第十八條 取引所ノ役員ト稱スルモノハ左ノ如シ

頭取  
肝煎

其他支配人書記方計算方等ノ各義務ヲ以テ役員ヲ定ムルハ取引所ノ便宜ニ任

十三年二十號布告  
スヲ以テ本條ヲ改正

十三年二十號布告  
スヲ以テ本條ヲ改正

第十九條 取引所ノ肝煎ハ少クモ五名以上ト定メ株主ノ總會ニ於テ其取引所ノ規定ニ從ヒ現ニ三十株以上ヲ所持スル株主中ヨリ之ヲ撰定シ又其肝煎ハ同僚中ヨ

リ頭取一人ヲ推舉スベシ而シテ支配人以下ノ諸役員ハ頭取並ニ肝煎ノ衆議ニ依リ株主又ハ株主外ヨリ之ヲ撰任スベシ

第二十條 取引所役員ノ在職年限ハ一ケ年タルベシ

第二十一條 頭取ハ取引所ノ事務ヲ總轄シ取引所一切ノ責ニ任スベシ

第二十二條 頭取肝煎ハ其仲買人賣買上ノ差違レヲ解キ違約者ヲ處分スルノ責任アリトス

第二十三條 取引所諸役員職務上ノ責任權限等ハ其取引所ニ於テ適當ノ規程ヲ設ケ之ヲ定款中ニ記載スベシ

第五章 一般ノ規程

第二十四條 外國人ヲ取引所ノ株主並仲買人ト爲スヲ得ス

第二十五條 取引所ニ於テ株式賣買取引ヲナス者ハ其取引所ノ承認ヲ經タル仲買人

カ

七百四十九



ニ限ルベシ

十四年二十八號布告ヲ以テ本條ヲ削除ス

第廿六條 取引所ニ關係アル政府ノ官吏ハ其取引所ノ株主タルヲ許サス

第廿七條 取引所ノ役員タルモノハ其取引所ニ於テ賣買本人又ハ仲買人トナルヘ

カラス

第廿八條 取引所ノ役員及ヒ仲買人ハ他ノ株式取引ヲ爲ス會社ノ役員又ハ仲買人  
或ハ他ノ銀行並ニ諸會社(官許ヲ經テ合本會社)ノ役員タルヲ得ス

第廿九條 取引所ハ其營業ノ爲メ緊要ナル地所家屋ヲ除クノ外地所家屋ヲ所持ス  
ルヲ許サス又之ヲ賣買スヘカラス

十三年五十七號布告ヲ以テ本條ヘ但テ追加ス

第三十條 政府ニ於テ賣買ヲ許シタル諸公債證書及ヒ政府ノ條例ヲ遵奉シテ發行  
シタル銀行並諸會社ノ株券等ノ賣買ヲ除クノ外此取引所ニ於テ一切他ノ物件ヲ  
賣買シ他ノ事業ヲ營ムヘカラス

第三十一條 取引所ハ第一章第七條ニ掲ケタル營業保證ノ爲メ大藏省ヘ預クベキ  
公債證書ヲ除クノ外自ら諸公債證書諸株券等ヲ賣買シ又ハ之ヲ所持スヘカラス

十三年二十號布告ヲ以テ本條ヲ改正ス

第三十二條 取引所ハ諸證據金ヲ使用スベカラス又貸附金ヲナスベカラス

第三十三條 取引所ニ於テ違約人ヲ處分スルハ其證據金及ヒ身元金ヲ以テ其違約  
ニ依リ相手方ニ於テ失ヒタル利得ト蒙リタル損害トシ償ハシムルニ止マルベシ

第三十四條 取引所ハ其取引所ニ於テ株式等ノ賣買ヲ認許シタル銀行並諸會社及  
ヒ新立會社ノ株式ヲ賣買スルノノ依頼ヲ受ルト雖モ其事情ニヨリ之ヲ停止シ又  
ハ之ヲ許否スルノ權ヲ有ス

第三十五條 取引所ノ諸願伺届又ハ諸證書約定書及往復ノ文書等取引所一般ニ關  
スル事件ハ頭取肝煎等コレニ記名調印スヘキハ勿論ナレモ必ス其取引所ノ名ヲ  
署シ取引所ノ印ヲ捺スヘシ

第六章 賣買取引ノヲ

第三十六條 取引所ニ於テ爲ス所ノ賣買取引ハ現場ト定期ノ二様ニ分チ必ス現物  
ノ受渡シヲ爲スヘシ

但ニヶ月ヨリ永キ定期ノ約定ヲナスヘカラス

カ

第二十七條 凡取引所ニ於テ賣買ノ約定ヲナシ其定期ニ係ルモノハ約定金高百分ノ五宛ニ下ラサル證據金ヲ賣買雙方ヨリ差入ル可シ而シテ其期限中相庭ノ高低等ニヨリテハ追證據金増證據金等ヲ差入シムルヲ得ベシ

第二十八條 約定取引ノ期限ニ至ツテハ其品種ニ依リ記名書替等其他受渡シノ手續ハ政府又ハ諸會社ノ成規ニ照シ之ヲ履行スベシ

第二十九條 約定期限内ニ於テ之ヲ轉賣スルヲ得ベシト雖モ其期日ニ至レハ必ス現物ノ受渡ヲ爲スベシ

第四十條 賣買主ニ於テ諸證據金ノ差入レヲ怠リ又ハ期限ニ至リテ其約定ヲ履行セザル者及ビ私ニ賣買ノ約定ヲ爲シ之ヲ公ニセザルモノ等ハ都テ之ヲ違約人ト爲スベシ

第七章 手数料ノヲ

第四十一條 取引所ニ於テ收領スベキ手数料ハ(賣買雙方ヨリ)其賣買金高現場取引ハ千分ノ一定期取引ハ千分ノ二宛ニ超ユベカラス

十五年六月十四號布告ヲ以テ本條ヲ改正ス

十八年三月十七號布告ヲ以テ本條ヲ改正ス

第四十二條 手数料ハ其決算ノ時ニ至リ賣買取引ニ關係スル他ノ債主ニ先ツテ之ヲ收受スルヲ得ベシ

第八章 検査ノヲ

第四十三條 大藏卿ニ於テ要用ト思考スルキハ何時ニテモ官員ヲ派遣シ或ハ其地方長官ヘ達シテ其取引所ノ業体及ヒ金銀其他諸帖簿等ヲ検査セシムルヲアルベシ

第九章 帖簿ノヲ

第四十四條 取引所ハ毎日取扱ノ事項ハ勿論金銀ノ出納等凡テ之ヲ詳明正確ニ記載シ且其簿記ノ方法ニ於テ大藏卿ノ差圖アルトキハ其差圖ニ從フヘシ

第四十五條 取引所ニ於テ製定使用スル處ノ諸帖簿ハ其名目用法ヲ詳記シ之ヲ大藏省ヘ届出ヅベシ

第十章 諸報告ノヲ

第四十六條 取引所ハ賣買實際ノ報告及金銀出納表其他役員ノ進退並株主仲買人

カ

ノ姓名等ヲ大藏卿ノ指命スル處ニ從ヒ時々報告ヲナスヘシ

第十一章 納税ノリ

第四十七條 此取引所ハ追テ政府ニ於テ制定施行スル所ノ收税規則ニ遵ヒ相當ノ税金ヲ納ムベシ

第十二章 罰則

第四十八條 取引所ノ役員及株主並仲買人等此條例ヲ犯スカ又ハ役員タルモノ株主並仲買人ノ此條例ニ背戾シタルヲ不問ニ措キ又ハ背戾セシメタル實證アルキハ役員並ニ本人トモ其事ノ輕重ニ依リ三十圓ヨリ少ナカラス千圓ヨリ多カラザル罰金ヲ科スベシ

第四十九條 検査官員ノ命ヲ拒ミ帖簿書類等ヲ差出サ、ルカ又ハ其疑問ニ答辨ヲ爲サミル者アルトキハ頭取又ハ其主任者ニ拾圓ヨリ少ナカラス五十圓ヨリ多カラザル罰金ヲ科スベシ

十八年三十八號布告ヲ以テ收税規則ヲ更定ス參照

十五年六十四號布告ヲ以テ本條ヲ改正ス

十五年六十四號布告ヲ以テ第五十條ヲ追加ス

○明治十三年四月十五日第二十號布告

明治十一年<sup>五</sup>月第八號布告株式取引所條例中左ノ通改正加除シ又明治十二年<sup>二</sup>月

第八號布告但書ヲ廢ス金銀賣買取引ノ證據金モ株式取引所條例ニ遵フヘシ此旨布告候事

株式取引所條例第三章第十五條

丁年ニシテ仲買人トナラント欲スル者ハ次條ニ定ムル身元金ヲ差入レ取引所ノ承認ヲ得タル上仲買人トナラントスル願書ヲ大藏卿ニ捧ケ其認許ヲ受クヘシ

仲買人ハ他人ノ委托ヲ受ケテ賣買取引ヲ爲スト自己ノタメニ爲ストナ問ハス取引所ニ對シテハ其賣買取引上一切ノ責任ヲ負フヘシ

全 第十六條

株式仲買人ノ身元金ハ貳百圓以上金銀仲買人ノ身元金ハ千圓以上タルヘシ

全 第四章第十九條

カ

取引所ノ肝煎ハ五名以上トシ株主ノ總會ニ於テ取引所ノ定規ニ從ヒ現ニ三十株以上ヲ所持スル株主中ヨリ之ヲ撰擧シ肝煎ハ其同僚中ヨリ頭取一人ヲ推擧シ其住所姓名年齢等ヲ大藏卿ニ具申シテ其認許ヲ受クヘシ大藏卿ハ時トシテハ其改撰ヲ命スルコトアルヘシ  
支配人以下ノ役員ハ頭取肝煎ノ衆議ニ依リ株主又ハ株主ニアラサル者ヲ撰任スルコトヲ得

全 第五章第三十三條

取引所ニ於テ違約人ヲ處分スルハ其證據金及ヒ身元金ヲ以テ其違約ニ依リ相手方ニ於テ失ヒタル利得ト蒙リタル損害トヲ償ハシメ而シテ其違約人ヲ除名スルニ止マルヘシ

○明治十三年十二月廿三日第五十七號布告

明治十一年<sup>五</sup>月<sup>五</sup>日第八號布告株式取引條例第一章第二條中其資本金額ハ貳拾萬圓

十五年六月十四號布告ヲ以テ本條ヲ改正ス

ヲ拾萬圓ト改正シ及ヒ第五章第二十條へ左ノ通但書追加候條此旨布告候事

但本條ニ掲載セサル諸會社ノ株券ト雖モ其營業確實ナリト認ムルモノハ大藏卿ニ於テ其賣買ヲ許可スルヲ得

○明治十四年五月六日第二十八號布告

明治十一年<sup>五</sup>月<sup>五</sup>日第八號布告株式取引條例第二十六條削除候條此旨布告候事

○明治十四年九月十三日第四十三號布告

明治九年<sup>六</sup>月<sup>六</sup>日第八十二號同十年<sup>一</sup>月<sup>一</sup>日第十一號同年<sup>二</sup>月<sup>二</sup>日第二十四號同十一年<sup>五</sup>月<sup>五</sup>日第八號同年<sup>十二</sup>月<sup>十二</sup>日第三十七號同十二年<sup>二</sup>月<sup>二</sup>日第九號同年<sup>五</sup>月<sup>五</sup>日第十九號布告中内務省又ハ大藏省トアルハ農商務省ト改正内務卿又ハ大藏卿トアルハ農商務卿ト改正候條此旨布告候事

○明治十五年十二月二十七日第六拾四號布告

明治十一年<sup>五</sup>月第八號布告株式取引所條例中左ノ通改正追加ス

第三十二條 取引所ニ於テ違約人ヲ處分スルハ其違約ニ依リ取引所ノ取引上

ニ於テ失ヒタル利得ト蒙リタル損害トナ其者ノ證據金及ヒ身元金ヲ以テ償

ハシメ其者ヲ除名スルニ止ルヘシ而シテ仍ホ其損失ヲ償フコト能ハサルト

キハ取引所ニ於テ其責ニ任スベシ

第四十條 賣買主ニ於テ諸證據金ノ差入レヲ怠リ又ハ期限ニ至リテ其約定ヲ

履行セサル者ハ都テ之ヲ違約人ト爲スベシ

第四十九條 官員檢査ノ節取引所役員及ヒ仲買人等簿冊書籍ヲ差出スコト拒ミ

又ハ疑問ニ答辯ヲ爲サ、ル者アルキハ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ヲ科スベシ

第五十條 取引所ノ規約ニ背犯シタル役員及ヒ株主仲買人ヲ取引所限り處分

スルハ之ヲ除名スルカ或ハ過怠料ヲ取立ツルニ止ルモノトス

但其過怠料ハ株金身元金ノ高ニ超ユルヲ得ス

右奉 勅旨布告候事

○明治十八年十一月廿八日第三拾七號布告

明治十一年<sup>五</sup>月第八號布告株式取引所條例第七章第四拾一條左ノ通改正シ明治

十八年十二月一日ヨリ施行ス

第七章 手数料ノ事

第四十一條 取引所ニ於テ賣買者雙方ヨリ領收スヘキ手数料ハ取引所ニ於テ

相當ノ額ヲ定メ大藏卿農商務卿ノ認許ヲ受クヘシ

右奉 勅旨布告候事

○明治十八年十一月廿八日第三十九號布告

明治十二年<sup>九</sup>月第三十七號第三十八號布告及同十六年<sup>七</sup>月第二十五號布達ヲ以テ

東京大阪橫濱神戸各株式取引所ニ於テ當分金銀貨幣取引差許置候處明治十九

年一月一日ヨリ右取引ヲ禁止ス

右奉 勅旨布告候事

○明治十三年四月十五日第二十一號布告

法律定規ニ遵ヒ官許ヲ得タル米商會所株式及ヒ橫濱取引所外若クハ内タリ正  
竊ニ米穀并金銀貨幣及株式ノ限月若クハ現場<sup>定期ヨリ起リテ</sup>賣買其他之ニ類  
似シタル取引ヲ爲シタル者及情ヲ知テ賣買取引ノ場所ヲ給與シタル者若クハ  
其賣買取引ヲ誘助シタル者ハ拾圓以上貳百圓以下ノ罰金ニ處シ其賣買取引ハ  
無効ト爲スヘシ

但本條ヲ犯シタル者ヲ告發シタル者ニハ其告發ニ因テ科シタル罰金ノ全部ヲ給  
ス其自ラ犯シタル者事未タ發覺セサル前ニ於テ自首シタル者ハ其罪ヲ問ハス  
右布告候事

○明治十五年八月十九日第四十六號布告

米商會所及ヒ株式取引所ノ賣買ニ不正惡弊アルカ又ハ賣買取引上ノ景況穩當

ナラサル爲メ公共ニ妨害ヲ及ホスト認ムルトキハ農商務卿ハ其會所及ヒ取引  
所又ハ仲買人ノ營業ノ一部又ハ全部ヲ停止若クハ禁止シ又ハ役員ヲ退罷セシ  
ムルコトアルヘシ

但本年第二十六號布告米商會所條例追加第二十條ハ削除ス

右奉 勅旨布告候事

○明治十六年八月六日第貳拾九號布告

米商會所及株式取引所ノ仲買人ニシテ竊ニ米穀並金銀貨幣公債證書株式ノ限月  
若クハ現場<sup>定期ヨリ起リテ</sup>賣買又ハ其類似ノ取引ヲ爲シタル者及情ヲ知テ賣買取  
引ノ場所ヲ給與シタル者若クハ其賣買取引ヲ誘助シタル者ハ五拾圓以上千圓以  
下ノ罰金ニ處シ其賣買取引ハ米商會所條例及株式取引所條例ノ手續ヲ爲サシム  
右奉 勅旨布告候事

○海外行印鑑免狀ヲ廢シ外務省本年一號布達海外旅券規則ニ據ラシム

○明治十一年五月四日第九號布告

明治二年四月同三年正月布告海外行印鑑免狀渡方ノ儀及同九年<sup>十</sup>月<sup>十</sup>第百二十八號布

告中海外行免狀ノ廢ハ廢止候條自今外務省本年一月第一號布達海外旅券規則ニ照準スヘシ此旨布告候事

○海上衝突豫防規則

○明治十三年七月十六日第三十五號布告

明治七年<sup>一</sup>月<sup>一</sup>第五號布告海上衝突豫防規則別冊ノ通改正シ來九月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

別冊

海上衝突豫防規則

總則

第一條 此規則中蒸氣船ト雖モ帆ニテ走り蒸氣ヲ用ヒサル時ハ帆前船ト看做シ蒸氣ヲ用フル時ハ帆ヲ用フルト用ヒサルトノ差別ナク總テ蒸氣船ト心得ヘシ

燈火

第二條 各船日没ヨリ日出マテノ間ハ天氣ニ拘ラス第三條第四條第五條第六條第七條第八條第九條第十條第十一條ニ記載スル燈火ヲ掲クヘシ決シテ他ノ燈火ヲ用フヘカラス

第三條 蒸氣船ハ航海中必ス左ノ燈火ヲ掲クヘシ

(甲)前橋又ハ其前面ニ於テ船舳上二丈ヨリ低カラサル所ニ亮明ナル白燈一個ヲ掲クヘシ若シ船幅二丈ヲ超ル時ハ船舳上其船幅ヨリ低カラサル所ニ之ヲ掲クヘシ○此燈火ハ常ニ不同ナク亮明ノ光ヲ發シテ鍼盤ノ二十方位ヲ照スヘク製造シ之ヲ左右舷外ヘ十方位ツ、即チ船ノ正首ヨリ各舷正横後ノ二方位マテ光線ノ及

カ

フヘキ様ニ装置シ且晴天ノ暗夜ニ少クモ五里海里ニテ算スノ距離ヨリ見ユヘキ  
モノヲ用フヘシ

(乙) 右舷ニ綠燈ヲ掲クヘシ○此燈火ハ常ニ不同ナク亮明ノ光ヲ發シテ鐵盤ノ十  
方位ヲ照スヘク製造シ之ヲ船ノ正首ヨリ右舷正横後ノ二方位マテ光線ノ及フヘ  
キ様ニ装置シ且晴天ノ暗夜ニ少クモ二里ノ距離ヨリ見ユヘキモノヲ用フヘシ

(丙) 左舷ニ紅燈ヲ掲クヘシ○此燈火ハ常ニ不同ナク亮明ノ光ヲ發シテ鐵盤ノ十  
方位ヲ照スヘク製造シ之ヲ船ノ正首ヨリ左舷正横後ノ二方位マテ光線ノ及フヘ  
キ様ニ装置シ且晴天ノ暗夜ニ少クモ二里ノ距離ヨリ見ユヘキモノヲ用フヘシ

(丁) 右綠紅ノ舷燈ニハ燈火ヨリ前ニ少クモ二尺出タル屏風様ノ隔板ヲ其燈火ノ  
内側ニ當テ、装置シ右舷燈ハ左舷ニ在ル船ヨリ見ヘス左舷燈ハ右舷ニ在ル船ヨ  
リ見ヘサル様ニナスヘシ

第四條 蒸氣船他船ヲ引テ航行スル時ハ兩舷燈ノ外ニ亮明ノ白燈二個ヲ二尺ヨリ  
少カラサル間ヲ隔テ、縦ニ連掲シ獨走ノ蒸氣船ト區別スヘシ此燈火ハ獨走ノ蒸

十八年二十七日  
正告ヲ以テ本條ヲ改メ

氣船ニ掲クル白燈ト同製ナルヲ用ヒテ同所ヘ掲クヘシ

第五條 帆前船ト蒸氣船トノ差別ナク海底電信線ノ布置又ハ引揚ニ從事スル時及  
ヒ事變ノ爲ニ運用自由ヲ得サル時ハ夜間ハ直徑八寸三分ヨリ少カラサル球形ノ  
紅燈三個ヲ帆前船ナレハ蒸氣船ニ掲クル白燈ノ位置ニ蒸氣船ナレハ其白燈ノ代  
リニ二尺ヨリ少カラサル間ヲ隔テ縦ニ連掲スヘシ又晝間ハ直徑二尺ノ黑球三個  
ヲ前檣ノ前面ニ於テ其頭部ヨリ低カラサル所ニ二尺ヨリ少カラサル間ヲ隔テ縦  
ニ連掲スヘシ

右黑球及ヒ燈火ハ近寄ル他船ニ於テ運用自由ヲ得スシテ航路ヲ避クル能ハサル  
船ノ信號ト看認ムヘシ

右ノ船全ク運行セサル時ハ舷燈ヲ掲クヘカラスト雖モ運行スレハ必ス之ヲ掲ク  
ヘシ

第六條 帆前船ハ自ラ走ルト他船ニ引カル、トノ差別ナク白燈ヲ除クノ外第三條  
ニ記載スル蒸氣船ノ燈火ヲ掲クヘシ決シテ白燈ヲ掲クヘカラス

カ



第七條 小形船ニ於テ天氣ノ模様ニ依リ綠紅ノ二燈ヲ掲ケ置キ難キ時ハ綠燈ハ右舷ニ紅燈ハ左舷ニ於テ何時ニテモ標スヘキ様甲板上ニ用意シ置キ他船ノ我船ニ近寄り來ルカ又ハ我船ノ他船ニ近寄り行ク時ハ衝突ヲ防クニ充分ナル時間ヲ見定メテ各舷燈ヲ他船ヨリ最モ見ヘ易キ様各舷ニ標スヘシ但此時綠燈ハ左舷ヨリ見ヘス紅燈ハ右舷ヨリ見ヘサル様注意スヘシ

此綠紅ノ燈ヲ置違ヒ無ク容易ニ取扱フ爲メ綠燈ノ燈籠ハ綠色紅燈ノ燈籠ハ紅色ニテ外面ヲ塗り且成規ノ隔板ヲ之ニ備置クヘシ

第八條 帆前船ト蒸氣船トノ差別ナク碇泊中ハ最モ見ヘ易クシテ船体上ヨリ二丈ヲ超ヘサル所ニ白燈一個ヲ掲クヘシ○此燈火ハ直徑六寸六分ヨリ少カラサル球形ノ燈籠ニテ常ニ不同ナク最モ亮明ノ光ヲ發シ少クモ周回一里ノ距離ヨリ見ユル様ニ爲スヘシ

第九條 水先船其營業場ニ於テ水路嚮導ニ從事スル時ハ他船ニ用フル燈火ヲ掲ケス唯檣頭ニ於テ周回諸方ヨリ見ユヘキ白燈一個ヲ掲ケ且十五分時ヲ超ヘサル間

歌ヲ以テ閃光一個又ハ數個ヲ發スヘシ

水先船其營業場ニ於テ水路嚮導ニ從事セサル時ハ他船ト同様ノ燈火ヲ掲クヘシ  
第十條 甲板ナキ漁船及ヒ甲板ナキ小形航行中ハ必スシモ他船ニ用フル舷燈ヲ掲クルニ及ハス然レモ舷燈ノ代ニ一面ハ綠色ノ硝子板一面ハ紅色ノ硝子板ヲ備ヘタル燈籠一個ヲ手近ニ備置キ他船ノ我船ニ近寄り來ルカ又ハ我船ノ他船ニ近寄り行ク時ハ衝突ヲ防クニ充分ナル時間ヲ見定メテ其燈籠ヲ標スヘシ但此時ニ綠光ハ左舷ヨリ見ヘス紅光ハ右舷ヨリ見ヘサル様注意スヘシ

右漁船及ヒ小形碇泊シタルカ或ハ網ヲ卸シタル時ハ亮明ナル白燈一個ヲ標スヘシ且便宜ニ從ヒ度々閃光ヲ發スルモ苦シカラス

第十一條 他船ニ追越サレントスル船ハ他船ニ向テ船尾ヨリ白燈ヲ標シ又ハ閃光ヲ發スヘシ

霧中信號

第十二條 蒸氣船ハ汽笛ヲ音響ノ妨碍物ナキ所ニ裝置シ且霧中號角及ヒ號鐘ヲ備

十八年二十七號布告ヲ以テ本條中文字改正

十八年二十七號布告ヲ以テ本條中文字改正

フヘク帆前船ハ全様ノ號角及ヒ號鐘ヲ備フヘシ但此汽笛號角及ヒ號鐘ハ善ク其用ニ適セサルヘカラス

霧中又ハ降雪中ハ晝夜ノ差別ナク本條ニ記載セル信號ヲ左ノ如ク用フヘシ

(甲) 蒸氣船航行中ハ汽笛ヲ以テ二分時ヨリ多カラサル間歇ヲ以テ長聲ヲ一發スヘシ

(乙) 帆前船航行中ハ號角ヲ以テ二分時ヨリ多カラサル間歇ヲ以テ右舷開ナレハ一聲ヲ發シ左舷開ナレハ二聲ヲ連發シ船ノ正横後ニ風ヲ受ケタル時ハ三聲ヲ連發スヘシ

(丙) 帆前船ト蒸氣船トノ差別ナク航行中ニ非サレハ二分時ヨリ多カラサル間歇ヲ以テ號鐘ヲ鳴スヘシ

霧中速力

第十三條 帆前船ト蒸氣船トノ差別ナク霧中及ヒ降雪中ハ程好キ速力ヲ以テ走ルヘシ

航法

第十四條 二艘ノ帆前船互ニ近寄りテ衝突ノ懼アル時ハ一方ノ船ヨリ左ノ如ク他船ノ航路ヲ避クヘシ

(甲) 一杯ニ開カサル船ハ一杯ニ開キタル船ノ航路ヲ避クヘシ

(乙) 左舷ニ一杯ニ開キタル船ハ右舷ニ一杯ニ開キタル船ノ航路ヲ避クヘシ

(丙) 一杯ニ開カサル二艘ノ船風ヲ受クル舷方同カラサル時ハ左舷ニ風ヲ受ケタル船ヨリ他船ノ航路ヲ避クヘシ

(丁) 一杯ニ開カサル二艘ノ船風ヲ受クル舷方同シキ時ハ風上ノ船ヨリ風下ノ船ノ航路ヲ避クヘシ

(戊) 船尾ヨリ風ヲ受ケタル船ハ他船ノ航路ヲ避クヘシ

第十五條 二艘ノ蒸氣船正シク眞向又ハ殆ト眞向ニ行逢フテ衝突ノ懼アル時ハ兩船共鐵路ヲ右舷ニ轉シ互ニ他船ノ左舷ノ方ヲ行過スヘシ

本條ハ兩船正シク眞向又ハ殆ト眞向ニ行逢フテ衝突ノ懼アル時ニ限り應用ス

ヘク各其鐵路ヲ保テテ必ス替リ行ク時ニ應用スヘカラス

本條ヲ應用スヘキ至當ノ場合ハ兩船共ニ正シク眞向又ハ殆ト眞向ニ行逢ヒタル時即チ晝間ハ我船ノ楫ト他船ノ楫ト一直線又ハ殆ト一直線ニ見ユル時夜間ハ互ニ他船ノ兩舷燈ヲ一時ニ見ル時ニ限ルヘシ

本條ハ晝間他船ノ我鐵路ヲ横切リテ我船ノ前面ニ見ユル時又ハ夜間我船ノ紅燈他船ノ紅燈ニ對シ或ハ我船ノ綠燈他船ノ綠燈ニ對スル時又ハ我船ノ前面ニ綠燈ナクシテ紅燈ヲ見或ハ紅燈ナクシテ綠燈ヲ見ル時又ハ綠紅ノ兩燈ヲ我船ノ前面ヨリ他ノ位置ニ見ル時ハ應用スヘカラス

第十六條 二艘ノ蒸氣船互ニ航路ヲ横切り衝突ノ懼アル時ハ我右舷ニ他船ヲ見ル船ヨリ他船ノ航路ヲ避クヘシ

第十七條 帆前船ト蒸氣船ト互ニ近寄り衝突ノ懼アル時ハ蒸氣船ヨリ帆前船ノ航路ヲ避クヘシ

第十八條 總テ蒸氣船他船ニ近寄り衝突ノ懼アル時ハ速力ヲ緩ニシ又ハ時宜ニ依

リ停止シ且後退スヘシ

第十九條 蒸氣船此規則ニ遵テ鐵路ヲ取ル時ハ左ノ汽笛信號ヲ以テ他船ニ其鐵路ヲ通知スルヲ得ヘシ

短聲一發 我船ノ鐵路ヲ右舷ニ取ル

短聲二發 我船ノ鐵路ヲ左舷ニ取ル

短聲三發 我船一杯ノ速力ニテ退却ス

此信號ヲ用フルト否ラサルトハ隨意タルヘシ但此信號ヲ用ヒタル時之ヲ用ヒタル船ハ必ス其信號通りニ其鐵路ヲ取ラサルヘカラス

第二十條 帆前船ト蒸氣船トノ差別ナク他船ヲ追越サントスル時ハ以上ノ規則ニ拘ラス總テ他船ノ航路ヲ避クヘシ

第二十一條 總テ蒸氣船狹隘ノ水路ヲ通航スルニ當リ無難ニ通行シ得ル時ハ其航路ノ中流ヨリ其船ノ右舷ニ當ル方ヲ航行スヘシ

第二十二條 以上ノ規則ニ依リテ兩船ノ内一船ヨリ他船ノ航路ヲ避クル時ハ他船

カ

ニ於テ其鐵路ヲ保守スヘシ

第二十三條 此規則ヲ遵守スルニ就テハ航海上百般ノ危険ニ心ヲ配リ且危険切迫シテ此規則ヲ遵守スル暇ナキ特別ノ場合ニ於テハ臨機ノ處置ヲ以テ之ヲ避クルニ注意スヘシ

懈怠ノ責

第二十四條 此規則ニ於テ點燈又ハ信號又ハ見張ノ怠リ又ハ海員ノ常務又ハ臨機處置ニ於テ必要ナル用心ノ怠リヨリ生シタル事件ニ於テハ船、船主、船長、乗組人員、各其責ヲ免ル可カラサルモノトス

別則

第二十五條 此規則ハ各地官府ニ於テ特ニ制定シタル港、川其他内海ノ航行規則ノ施行ニ干渉セサルモノトス

第二十六條 此規則ハ二艘以上ノ軍艦又ハ軍艦ニ護送セラル、船ニ増揚スル列位燈火及ヒ信號燈火ニ付各國政府ニ於テ特ニ制定シタル規則ニ干渉セサルモノトス

十八年二十七日號布告ヲ以テ本條中文字改正

十四年三十三號布告ヲ以テ第二十七條ヲ追加ス

ス

○明治十四年五月廿八日第三十三號布告

明治十三年<sup>七月</sup>第三十五號布告海上衝突豫防規則左ノ通追加候條此旨布告候事

但明治九年<sup>二月</sup>第十一號布告廢止候事

罰則

第二十七條 凡船舶合格ノ燈籠及信號器ヲ所持セス若クハ點燈及信號ヲ怠リ又ハ燈籠ノ裝置ヲ過リタル者ハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス

但甲板ナキ漁船及甲板ナキ小船ハ此限ニアラス

○明治十八年八月二十一日第貳拾七號布告

明治十三年<sup>七月</sup>第三十五號布告海上衝突豫防規則中左ノ通改正追加シ明治十九年一月一日ヨリ施行ス

十八年二十七日號布告ヲ以テ第二十八條ト改正

十八年二十七日號布告ヲ以テ第二十七條及ヒ附則追加

カ